遺構名	形態 規模 m	付属施設				重複関係		土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅 製品	報告 頁	時期		備考
		床面	柱穴	炉 カマド	その他	先	後	実測 数	重量 (kg)				時代	細別	
SB134	不明	貼床	未検出	未検出			SX005	4	1.34	管玉		226	古墳	前期	1次面で床面のみ確認
SB135	隅丸方形	貼床	1	炭のみ 検出		SB136			5.25	管玉 ガラス製 小玉	刀子状品	219	弥生	後期	
SB136	不整形	貼床	2	炉			SB135 SE037	5	8.96	ガラス製 小玉	鉄鏃 ヤリガンナ	219	弥生	後期	
SB137	隅丸方形？	貼床	未検出			SB136			1.56			219	弥生	後期	
SB138	隅丸方形 4.50	貼床	未検出	炉		SB140	SK176 SE038 SE039	11	11.62		鉄鏃	224	古墳	前期	
SB139	不明	貼床	未検出	炉		SB141 SB143	SZ025	8	23.57	土玉	銅鏃 銅製環	221	弥生	後期	
SB140	不明	脆弱	2	未検出			SB138 SK176 SZ025	8				218	弥生	後期	
SB141	不明	貼床	未検出	未検出			SZ025		2.09			221	弥生・後期 ～ 墳・前期		
SB142	隅丸方形 4.70	貼床	未検出	炉			SB139 SZ025		4.45			221	弥生	後期	SB139床面下層で確認
SB143	隅丸方形	貼床	1	未検出		SK177	SB141 SZ025					221	弥生・後期 ～ 古墳・前期		
SE037	円形 1.10					SB136			0.24				平安以降		
SE038	円形	1.05				SB138	SE039		0.65				平安以降		
円形	1.10					SB138			2.35				平安以降		
SK176	不整形 1.50					SB138			0.94						
SK177	方形 1.90×1.50	平坦	なし	なし	炭・骨 片出土		SB143	17	16.27	土玉	銅釧	216	弥生	後期	土器に伴って多量の炭が検出された。また、骨片も少量ながら出土している。
SZ025	方形 溝幅 0.50	平坦	なし	なし		SB139 SB140 SB141 SB143			6.09			221	古墳	前期	

表 15　A 区 2 次面検出遺構一覧表

状の利器、SB139で銅鏃と銅環、SB134・135・136・139からは管玉・ガラス玉・土製丸玉などの玉類が出土している。XII区でも該期の多くの住居から鉄製品・青銅製品・玉類の出土がみられ、個々の遺構での保有量こそ1・2点程度であるが、集落全体で捉えると継続的に鉄製品・青銅製品・玉類を保有している点は特筆される。また、SB135からは北関東系の土器片が出土していて、XII区SB018・023とともに複数の住居から出土をみていることは注目される。

土坑は調査区西隅部でSK177が検出されている。多量の土器群とともに、銅釧片・土製丸玉・炭・骨片が出土している。埋葬遺構としての可能性は低く、その性格は注意される。

溝跡はSB139の周囲を巡って1条検出されている。形態的には方形周溝墓の可能性が考えられるが、墳丘・埋葬施設ともに痕跡がまったく見出されず、また、周囲に周溝墓群の展開が認められないことからも積極的な評価が難しい遺構である。

弥生時代中期・栗林式期以前は遺構の確認はないうえ、遺物の出土もほとんど認められず、存在は確認されなかった。

2　検出された遺構と出土遺物

SK177（PL－37、PL－A－1）

調査区西端部で検出された土坑である。1.9×1.5mを測り、方形を呈する。南東隅部でSB143と重複するが、隅部まで明瞭に検出されていて、SB143に後出すると考えられる。

覆土は暗褐色粘質土を主体とする。確認面からの掘削深度はおよそ0.3mを測る。壁面は四方ともに覆土が剥げ落ちて明瞭に把握されたが、南東側のSB143との重複部分のみ他に比して明瞭さに欠けた。いずれの壁も上方から下方に向かって斜めに掘り込まれており、壁面は特に整えられた状況や何らかの施設が設けられた痕跡は認められなかった。底部はほぼ平坦で、特に施設設置にともなう掘り込みの痕跡はみられなかった。東西方向の主軸北側では覆土下層より底面にかけて炭の分布が検出された。北壁中央付近の土器群がみられない部分で濃密に確認され、土器群下まで達していることが確認されたが、南半部には及んでいない。また、焼土・炭化材はまったく認められず、本土坑内で火が使用された可能性は低いと考えられる。

土器群に混じって、骨片が東壁際・中央部・北西隅部付近の3箇所で検出された。検出高はいずれも土器群直上で、底面付近や土器群下、あるいは炭層に伴っての検出は認められない。骨片は3箇所いずれも小片で粉化が著しく、人獣の別や部位の特定はできなかった。歯の出土も認められない。また、検出された骨片間ではその骨

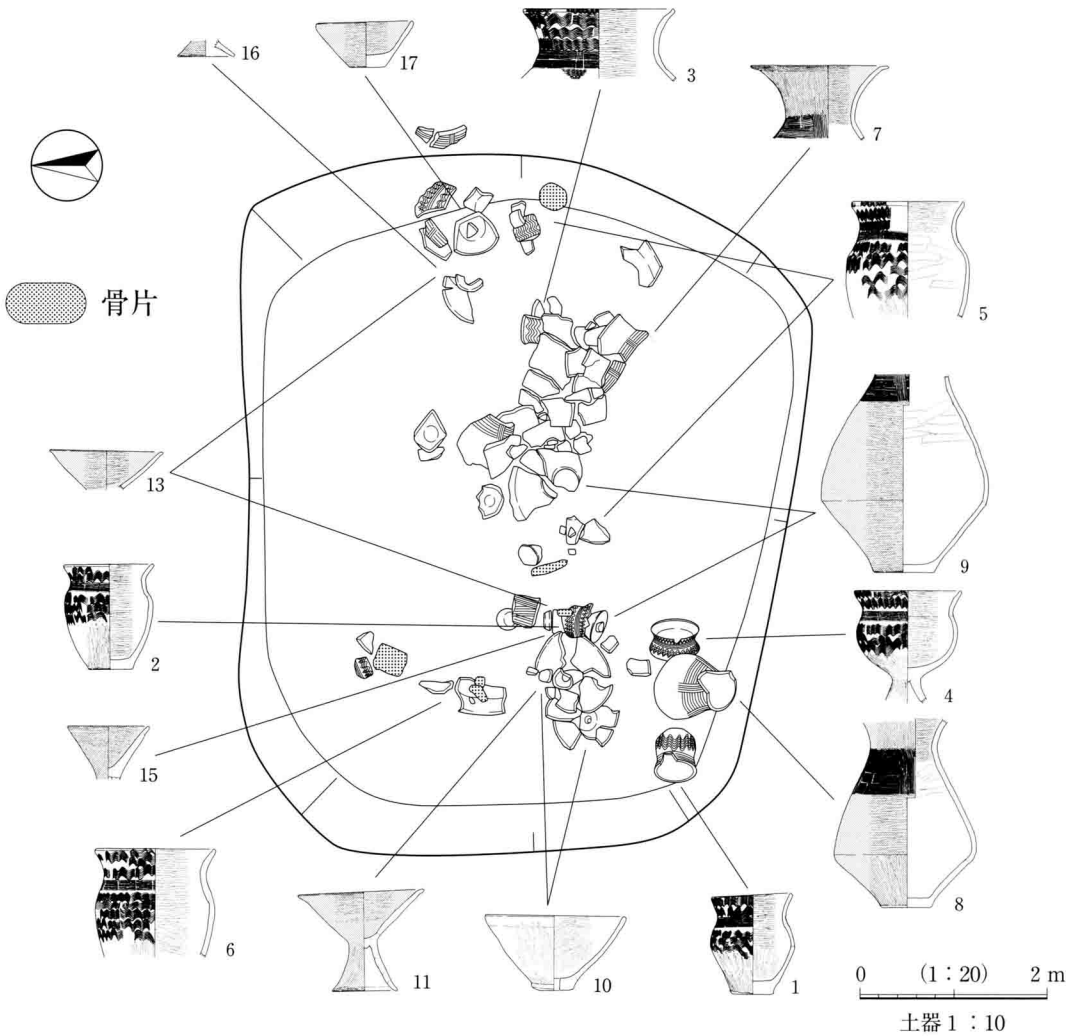


図234　SK177実測図

片どうしを繋ぐ連続的な分布はまったく確認されず、埋葬を想定することは難しい。土器群直上より検出され、残存しやすい歯の検出がなかったことからも埋葬遺構ではなく、骨片がそれぞれ独立したモノとして使用された状況が想起される。

土器は主軸上の底面直上を中心に、底面から覆土上層にかけて多量に出土している。最も出土高が高い16の鉢は確認面にまで達する。土器群のまとまりのうち、最も東壁寄りでは高杯・鉢が比較的高い位置より出土している。中央部では床面直上より壷・甕類の大型品が横倒しになって潰れた状態で確認された。西壁寄りでは高杯・鉢が上層から、甕・甑が下層から高さを異にして出土している。これらの状況からは、小形品が比較的高い位置

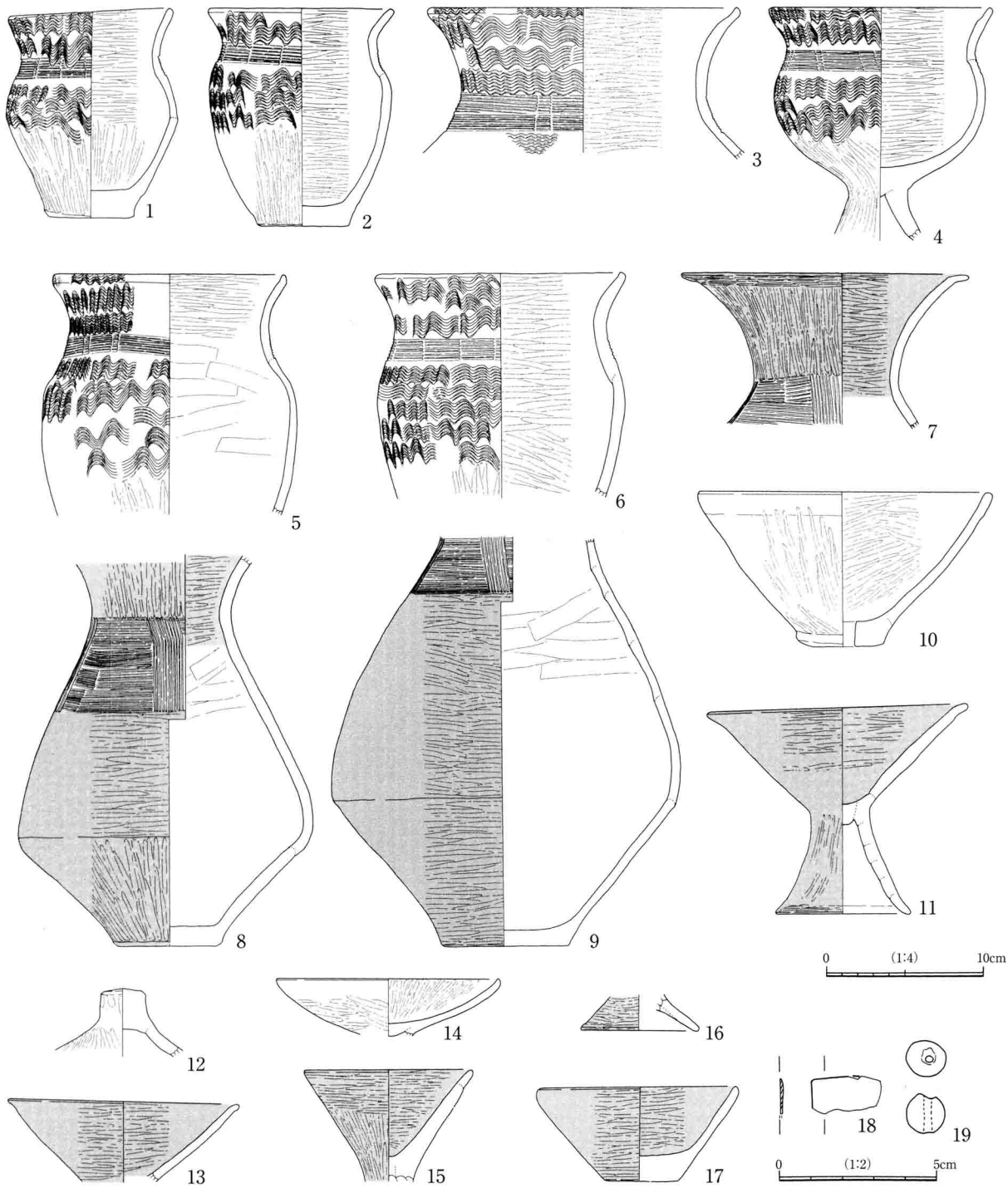


図235　SK177出土遺物実測図

で、大型品が床面に近い位置で出土する傾向が伺える。破片間の接合は基本的に周辺の破片が接合する状況であるが、完形に復元されるものはほとんどないうえ、11の高杯や８の壷、３の甕のように土器群のまとまりを超えて接合する事例も認められる。南西側隅部底面上からは壷・甕・台付甕（図235－１・８・４）がそれぞれ１点ずつ出土している。検出時には横倒しに近い状態であったが、ほぼ原形を留める出土状況は他の土器群と大きく異なっていて、底面上に正置された可能性があるなど、他の土器群とは別の取り扱いを受けた可能性が考えられる。

以上のように、土器の出土状況からは３段階の土器設置工程が想定される。第一は主軸上にみられる大型品を中心とした一群で、北半に炭が持ち込まれた後に設置される。土器群がどのような状況で置かれたかは定かでないが、接合関係からは破砕された可能性が高いと判断される。第二は南西隅部に設置された３点の土器である。前述したように正置された可能性も考えられ、第一群のように破砕されてはいない。なお、この第一と第二の時間的順位は確定できない。第三は東西両端部付近で認められた高杯・鉢など小形品を主体とする最上層出土の一群である。西壁寄りで明らかなように、上層と下層の土器群の間には堆積土が存在し、木棺状の空間を一定期間保持する施設が認められないことから、土坑が埋め戻された最終段階で設置されたものと考えられる。なお、この埋め戻し工程において骨片が使用されたと考えられる。

出土した土器には壷・高杯・鉢・甕・台付甕・甑・蓋がある。高杯は杯部が直線的に開く小型品のみで、杯部で稜をもって屈曲し、大きく外反する口縁形態や脚部三角形透かしを有する箱清水式の典型的高杯が含まれていない点で器種構成上注意される。しかし、出土状況に加えて型式学的にも箱清水式盛行期の良好な一括資料と評価できる。青銅製品では帯状円環型銅釧の破片が１点、覆土より出土している。緩やかに円弧を描く幅広の小破片で、断面は薄い板状を呈し、破断面における意図的な破砕痕あるいは叩き延ばしの痕跡などはみられない。玉類では土製丸玉が１点、覆土中より出土している。

以上の様相より、弥生時代後期・箱清水式期に該当すると考えられる。

SB140（PL－37）

SB138の北側で検出された竪穴住居である。北側は調査区外となり、西側はSZ025により掘り込まれ、失われている。南東側ではSK176とSB138が上部に重複し、その床面下でわずかに確認されたにすぎない。このため、規模・形態は明らかにしえなかった。ただし、SB138・SK178下で確認された東壁は北西－南東方向に真っすぐ延び、検出された柱穴の位置を加味すると、東壁が主軸方向を示し、6.0×4.5m程度の隅丸方形を呈する可能性が考えられる。

床面は全面で貼床が検出された。柱穴は北西側と南東側で２箇所検出されている。北東側ならびに南西側は位置的にみて、調査区外に存在すると考えられる。炉跡は検出されなかった。また、炉に伴う炭層も検出されていないが、他住居にみる設置位置からは北壁調査区外に存在する可能性が想起される。

遺物は床面上より多量の土器が出土している。図化・掲載した点数は甕２・高杯６と出土量に比して少なく、接合・復元率が低い、破片資料が大半を占める。器種では高杯片が比較的多く、掲載個体でも確認できるように、全形

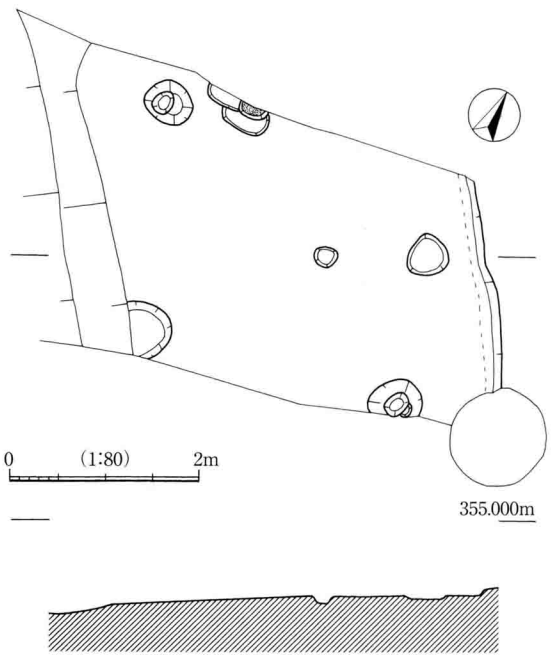


図236　SB140実測図

復元がなされたものはない。この破片化の原因として重複遺構による影響も考慮されるが、重複遺構下で影響が少ない部分でも復元率が低いことからは、当初より破片化した土器片の投棄が行われた可能性も想起される。

以上の様相より、弥生時代後期・箱清水式期に該当すると考えられる。

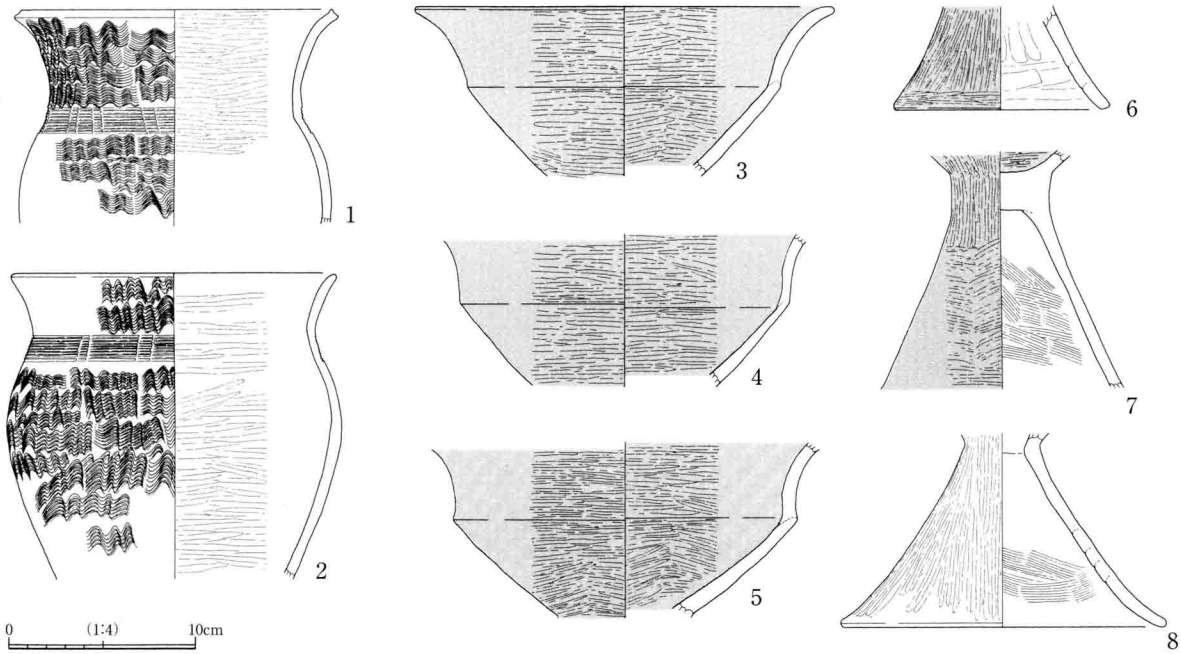


図237　SB140出土遺物実測図

SB135・136・137（PL－37、PL－A～D）

調査区東側にて重複して検出された竪穴住居である。SB135とSB137の直接的な重複関係はないが、出土遺物の様相を合わせてSB136→SB137→SB135の構築順と考えられる。

SB136　SB135・137ならびにSE037に掘り込まれる竪穴住居である。南北ともに調査区外へと続き、南側でSB135・SE037に、北側でSB137に掘り込まれているため、残存状況はよくない。確認長は東西で約6.0m、南北で約4.0mを測る。

西壁は明瞭であったが、東壁は不明瞭で充分に把握されたとはいいがたい。床面は全面で貼床が検出された。ただし、壁面の確認状況同様に東壁際までは達していなかった。床面範囲からすると、東壁はSB136との重複部分から西壁に並行に直線的になる可能性が考えられる。柱穴は2箇所確認されている。炉跡は検出されていない。柱穴を結ぶ線の若干内側で焼土が検出されたが、焼け締まった状態ではなく、炉跡として確定はできなかった。

遺物は床面上より土器・鉄製品・玉類の出土がみられる。図化・掲載したものには、

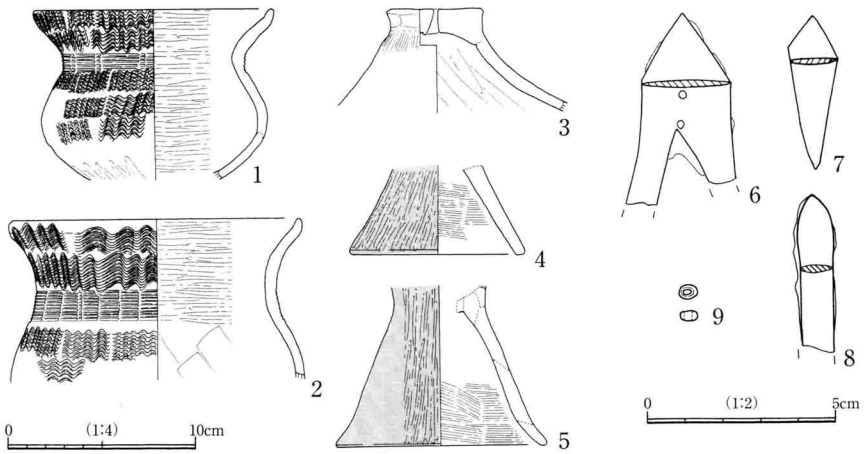


図238　SB136出土遺物実測図

甕・台付甕・蓋・高杯がある。このほか、壷や鉢などの赤彩系土器群の破片も認められ、また、吉田式とみられる破片資料も少なからず出土している。鉄製品には鉄鏃・ヤリガンナがある。6は無茎鏃で、左右ともに切り込みの深い腸抉先端部を欠損する。鏃身部には矢柄装着用に縦に２孔が穿たれるが、木質など矢柄装着の痕跡は残存していなかった。７は圭頭斧箭式鉄鏃である。刃は屈折部先端側にのみ認められ、茎部に円孔は認められない。８は切っ先先端が若干上方に湾曲しており、ヤリガンナとみられる鉄製品である。玉類には、スカイブルー色のガラス製小玉が１点出土している。

以上の様相より、弥生時代後期・箱清水式期に該当すると考えられる。

SB137　SB136を掘り込んで構築された竪穴住居である。北側の大部分が調査区外となり、南西隅部を含む南側の一部分が確認されたにすぎない。確認長は5.5×1.0mを測り、隅丸長方形を呈すると考えられる。床面は貼床が確認された。柱穴は検出されていない。北西壁際でピットが１箇所検出されているが、非常に浅く、主柱穴とは考えずらい。炉なども検出されなかった。

遺物は床面上より少量の土器片が出土している。図化・掲載したものはないが、弥生時代・箱清水式の破片が主体を占め、該期に該当すると考えられる。

SB135　SB136を掘り込み、南側は調査区外となる。確認長は4.6×2.6mを測り、隅丸長方形を呈する。

床面は壁際まで全面で貼床が確認された。柱穴は１箇所確認されている。最大径１mを測る大型土坑であるが、南壁側で二段掘りとなり、柱穴とみて誤りないと考えられる。炉・カマドなどは検出されなかった。ただし、柱穴の西側床面上で広く薄い炭の散布が検出され、炉跡に伴う可能性が高いと考えられる。

遺物は覆土下層から床面直上にかけて、土器・鉄製品・玉類が出土している。土器の出土総量は少なくないが、いずれも小片で復元実測できたものはない。１は口縁部片、２は胴部の破片で、ともに縄文が施文され、北関東・吉ケ谷式系（赤井戸式）の破片であるとみられる。３・４は鋭利な工具による施文片で、胎土からも吉田式と考えられる。５は壷頸部片で、波状文上に円形浮文が貼付けられている。６は小刀あるいは刀子状の利器の破片とみられ、西側床面上で検出された炭層上より出土している。両端部とも欠損しているとみられるが、土を巻

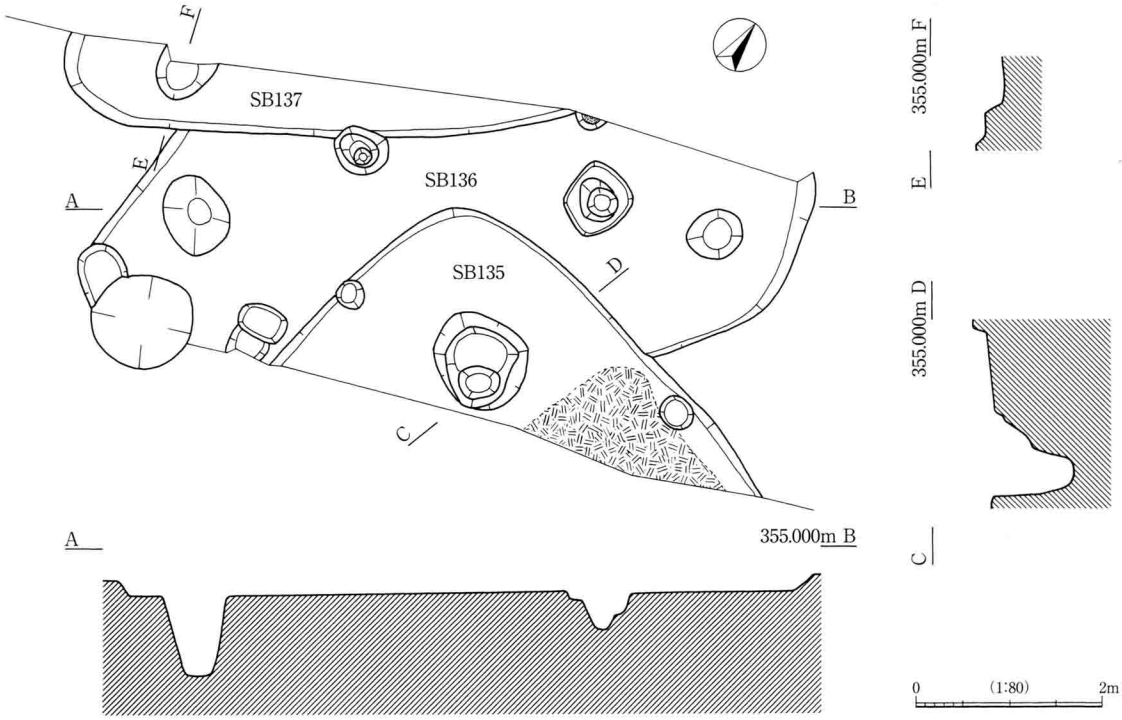


図239　SB135・136・137実測図

き込んだ錆化が著しく、現時点での原形把握は難しい状態である。なお、本住居にはSK162が重複するが、出土位置からは混入品とは考えがたく、本住居に帰属すると考えられる。7は鉄石英製の細形管玉である。このほか、ガラス製小玉が1点出土しているが、破砕片のため、図化できなかった。

以上の様相より、箱清水式新相に該当し、弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる。

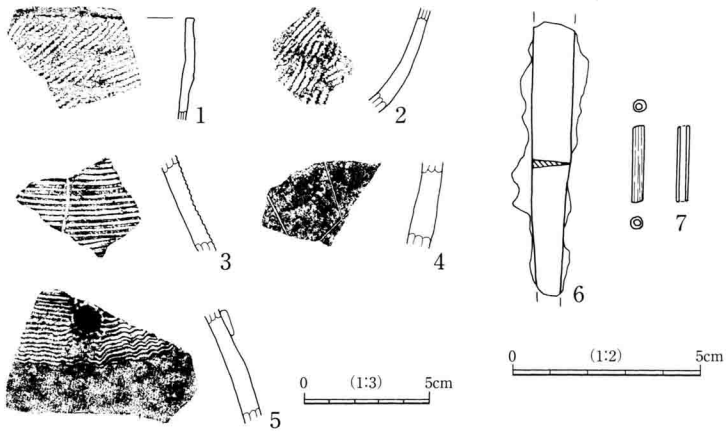


図240　SB135出土遺物実測図

SB139・141・142・143・SZ025（PL－37、PL－A～D）

調査区西端部で重複して検出された竪穴住居群である。各住居の重複部分にSZ025が重なるため、厳密な住居間の前後関係は定かでないが、検出レベルを踏まえた床面の重複状況からはSB143→141→139の順と捉えられる。また、SB139床面下で検出されたSB142とSB141・SB143との前後関係については直接の重複が確認されず、把握できなかった。

SB143　北西隅部を含むおよそ1/4が検出された竪穴住居である。東側でSZ025、SB139、SB141に、西側でSK177に掘り込まれる。

床面は北側を中心に貼床が検出されている。南側は明瞭ではなかったが、部分的に貼床の痕跡が把握でき、全面貼床であったと考えられる。柱穴は検出されなかった。炉跡はSZ025の北側で検出されている。0.45×0.35mほどの楕円形を呈し、浅く凹んだ中央部がよく焼けていた。なお、周辺に炭層は認められなかった。遺物は覆土中より土器が少量出土している。図化・掲載したものはないが、箱清水式を主体とする。時期決定根拠に乏しいが、重複状況などから弥生時代後期・箱清水式期に該当すると考えられる。

SB141　北壁際部で検出された竪穴住居である。南側でSZ025ならびにSB139に掘り込まれており、西壁の一部が確認されたにすぎない。このため、

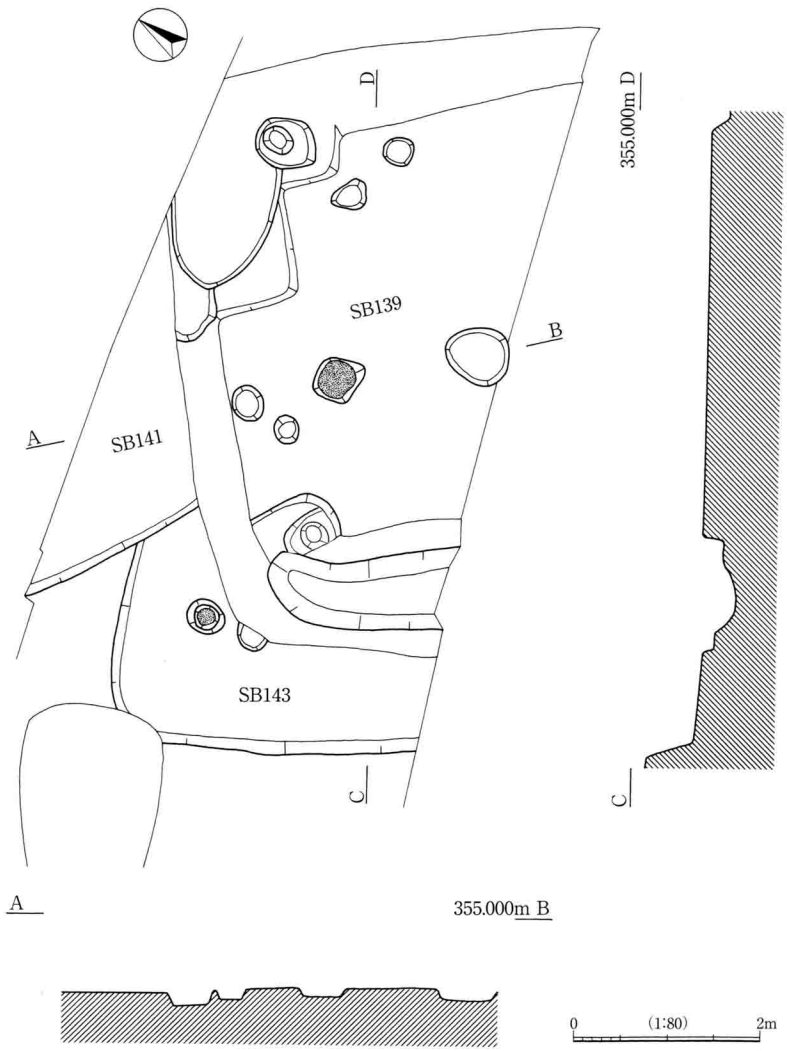


図241　SB139・141・143実測図

規模・形態などは不明である。確認された西壁は北西－南東方向に延び、SB143を掘り込んでいる。床面は貼床が全面で確認されている。柱穴ならびに炉跡は検出されなかった。また、炉跡に伴うと考えられる炭層の確認もない。

出土遺物は床面上で土器が少量出土している。箱清水式を主体とし、古墳時代前期の土師器も若干含まれる。

以上の様相より、弥生時代後期・箱清水式期と考えられる。

SB139　南側は調査区外へと続き、北東西の３方はSZ025によって掘り込まれているため、壁面は確認されなかった。床面は全面貼床である。柱穴は床面上で浅いピットが複数検出されたが、柱穴とできるものは認められなかった。ただし、SZ025周溝内東西角部より柱穴がそれぞれ１箇所ずつ確認されており、あるいはこれが本住居柱穴になる可能性が考えられる。この場合、柱穴間は4.2mを測り、かなりの大型住居跡になる可能性が考えられる。炉跡は北側床面のほぼ中央部で検出された。一辺0.5mの方形を呈し、浅く凹んだ中央付近が非常によく焼けていた。また、北側を中心に炉の周囲では広い範囲に薄い炭層が認められた。

遺物は覆土下層から床面上を中心に多量の土器が出土している。また、覆土中より銅鏃・銅環・土製丸玉が出土している。土器は他住居に比して出土総量が多いものの、出土状況において特定のまとまりを持つような状況は確認されなかった。また、接合による復元率も低く、図化・掲載した個体は８点にすぎない。この８点も全形がわかるものはなく、いずれも部分的で、復元図化によっている。このように、出土状況・接合状況ともに完形あるいはそれに近い土器が床面上に投棄され破片化したという状況は考えづらい。図化・掲載した器種には甕・蓋・高杯・壷がある。４の高杯は二重口縁を呈する特異な形態である。内外面ともに赤彩され、典型的な箱清水式高杯の口縁部を二重にしていて、北陸系土器の影響を受け発生した形態と考えられる。５は古墳時代前期の有段口縁壷である。出土土器群は箱清水式を主体とし、く字形口縁ハケ調整甕など外来系要素が認められる土器が希薄であることから、本資料が共伴するか否かは定かでない。銅鏃は鏃身形態が五角形を呈する小型品が１点覆土中より出土している。鏃身部は鏃身長2.4cm、最大幅1.2cmを測る両鎬造で、関は片側を欠損するが撫関を呈する。茎部は欠損するが、残存部では断面円形が確認できる。銅環は扁平な板状品を環状に丸めて製作されている。直径1.85cmを測る。両端部には円孔等はみられず、接合された痕跡は認められない。土製丸玉は直径1.05cmを測る。円孔は両側より穿たれているが、貫通していない。

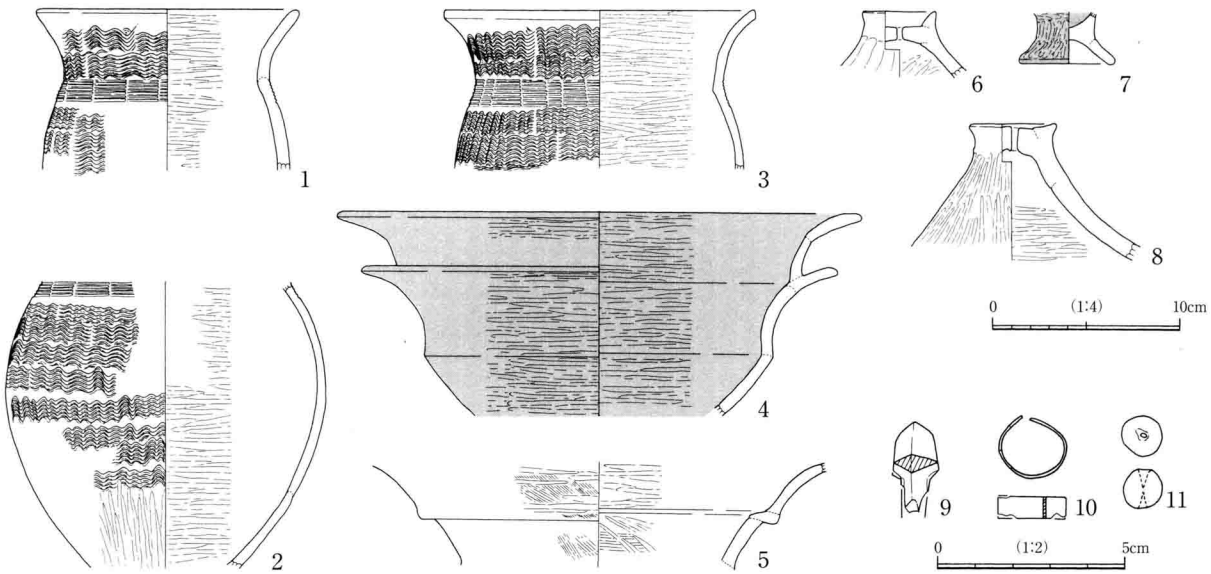


図242　SB139出土遺物実測図

以上の様相より、箱清水式新相に該当し、弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる。

SB142　SB139床面下で検出された竪穴住居である。SB139同様に三方をSZ025に掘り込まれ、南側が調査区外となるため、規模・形態などは不明である。

床面は全面で貼床が検出された。柱穴は２箇所検出された。共に掘方は認められない。炉跡は柱穴間で確認され、周辺に広く焼土の分布が認められる。また、南壁に近い部分でも焼土の分布が認められた。焼土分布域の周囲を中心に広い範囲より薄い炭層が検出されており、炉が作り替えられた可能性が考えられる。

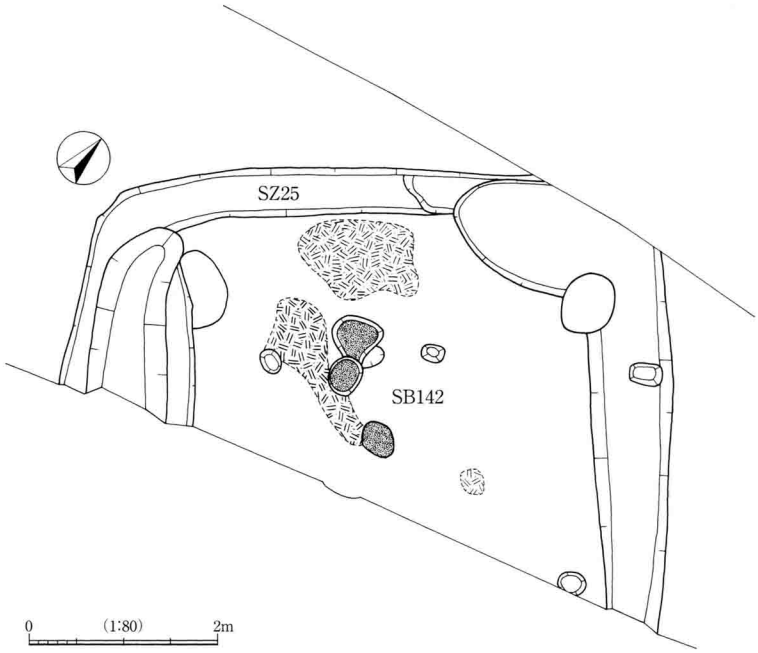


図243　SB142・SZ025実測図

遺物は床面上より少量の土器が出土している。図化・掲載できた個体はないが、破片には吉田式ならびに箱清水式があり、ごく少量古墳時代前期の土師器片がある。また、口縁に凹線文を施す北陸系の土器片も認められる。

床面の重複状況からはSB139建替え前の住居跡である可能性が高く、弥生時代後期・箱清水式期と考えられる。

SZ025　調査区西端部で検出された方形の溝である。SB139ならびにSB142の周囲を囲むように確認され、南側は調査区外へと続く。当初、SB139に伴う溝跡の可能性を考慮したが、貼床が直線的に切り込まれていること、住居壁面がまったく検出されないこと、さらには溝の規模が住居に比して大きいなどにより別遺構の重複と判断した。また、周辺に分布するSB140・SB141・SB143のいずれもを掘り込んでいて、重複遺構中最も新しいと判断される。多くの遺構重複が認められるが、重複関係を有する各住居の貼床が明確に途切れていたことから、把握できた形態は確実視できる。

溝幅は東西辺で0.8～2.0m、北辺で0.5mを測る。掘削は東西両辺が北辺を掘り込むように深く掘削されていて、溝幅・掘削深度ともに東西辺が大きい。隅部で東側は屈曲して、西側は屈曲気味に収束して浅く細い北辺に接続する。なお、北辺と東西辺の覆土は一連で、特に重複とは認識されない。溝の断面形態は東西辺で溝外側がいくぶん緩く、内側に向けて急激に立ち上がる。北辺は内外ともにほぼ垂直に掘り込まれている。

形態上、方形周溝墓の可能性が考えられるが、１次面においても、また、2次面でも墳丘は整地面を含めて確認されなかった。さらに、埋葬施設の痕跡も認められず、方形周溝墓である確定的な要素は見いだされなかった。

覆土中からはごく少量の土器小破片が認められたのみで、図化・掲載できたものはない。このため、遺物からみた遺構の性格考究や時期決定は難しい。ただし、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのSB139を掘り込み、直上で古墳時代前期のSB134が検出されていることから時期は古墳時代前期にほぼ限定される。すると、SB139において混入品かとみられる有段口縁壷（図242－5）などが伴う可能性も考えられる。

以上のように、本溝跡は古墳時代前期に該当すると判断される。形態や時期からは方形周溝墓の可能性が高いと思われるが、墳丘盛土・埋葬施設の痕跡がまったく認められないことや周辺に同様な周溝墓の展開がみられないことから確定するには至っていない。

SB138（PL－37、PL－A－1・A～D）

調査区のほぼ中央、南壁よりで検出された竪穴住居跡である。南側は調査区外となる。東側でSZ025に、また、床面上ではSE038・SE039に掘り込まれている。一方、北側ではSB140の上面に重複する。長軸（北西ー南東）は4.55m、短軸（南西ー北東）の残存長は2.9mを測る。西側がSZ025によって失われているため全体形は不明であるが、SB135と主軸方向を揃えた隅丸(長)方形を呈すると考えられる。床面は全面で貼床が確認された。柱穴は検出されなかった。SE038・SE039の重複により失われている可能性も考えられるが、北東側の遺構重複がない部分を重点的に精査したが、検出することはできなかった。炉は住居のほぼ中央で検出されている。西側約1/3をSE039により掘り込まれて失われていたが、長軸0.5mの楕円形の浅い凹みの中央部がよく焼けていた。炉に伴うと考えられる炭層は南側を中心に分布し、SE039階段状遺構の最上段底面にも認められた。

遺物は床面上を中心に土器・鉄製品が出土している。土器は壷・甕類が南東側のSE038付近の床面上、高杯・小形坩が北西側の床面上を中心に出土している。いずれも横倒しで、土圧により潰れた状況で検出されている。甕には平底のく字状口縁ハケ調整甕と5字状口縁に系譜を持つと考えられる甕が含まれ、外来系統の甕が在地化

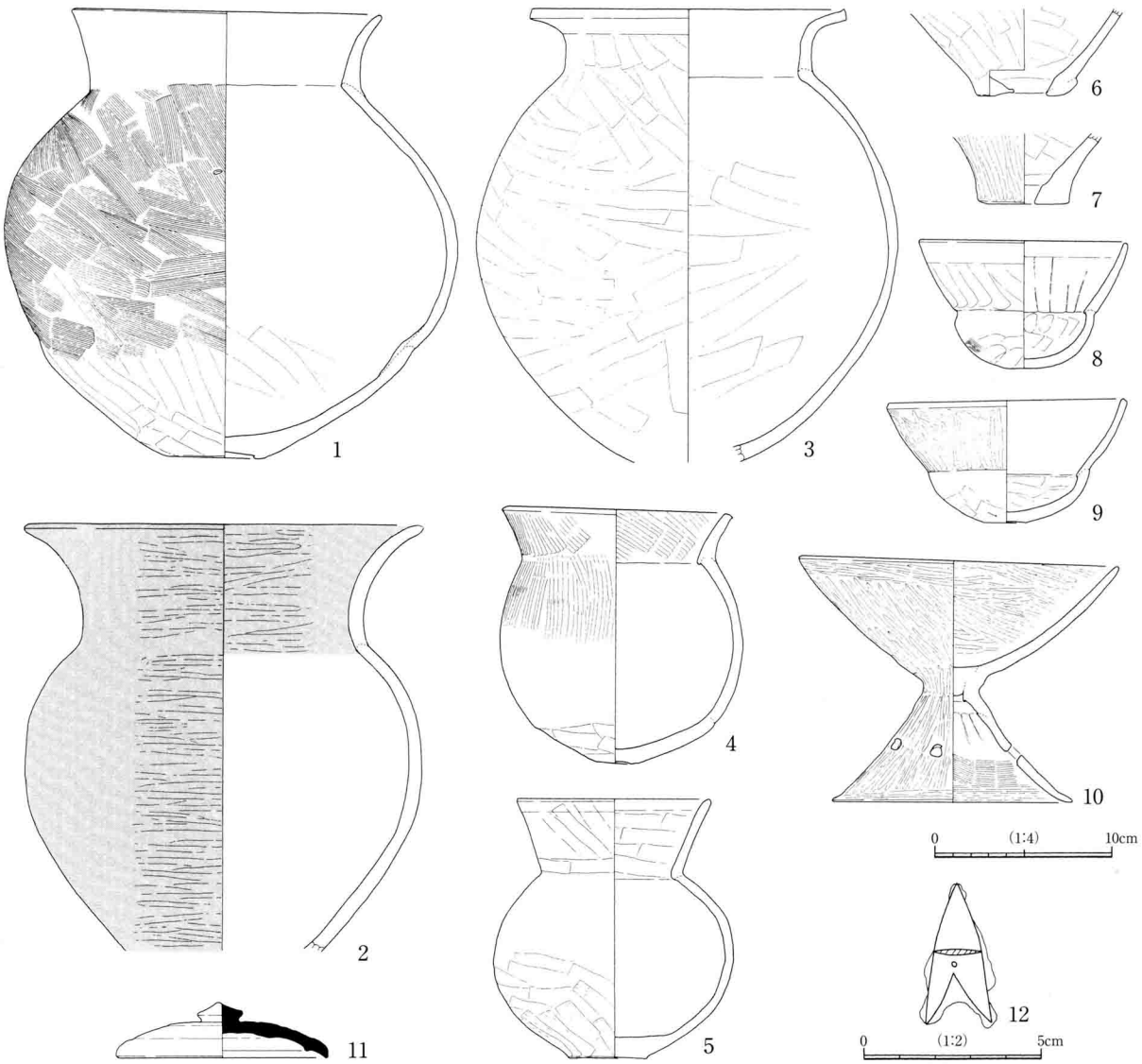


図244　SB138出土遺物実測図

している。小形坩は２点図化・掲載した。半球形の胴部から内面に明瞭な稜線を有して大きく開き、内湾して口縁部へと繋がる。口唇部には面を持つ。高杯は脚部に円孔を四方向に穿ったハ字脚で、杯部は脚接合部より大きく開き、杯下半に稜を持たない。以上の土器群は器形の変容・文様帯の欠落などが著しい３の壷や甕・高杯・小形坩などの新出器種に示されるように、箱清水式の崩壊直後に位置づけられると考えられる。鉄鏃は無茎の三角形鏃が１点出土している。平造で、鏃身部には単孔が穿たれている。錆化が著しく定かではないが、単孔周囲には矢柄装着に関わる木質等の付着は確認されなかった。なお、11の須恵器蓋は古墳時代後期後半代のもので、本住居とは関連しない混入品である。

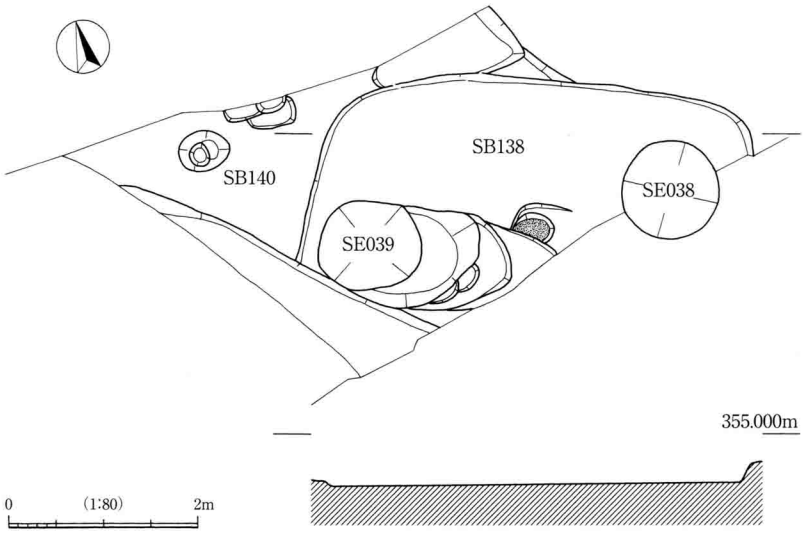


図245　SB138実測図

以上より、古墳時代前期に該当すると考えられる。

SB134（PL－37、PL－A～D）

１次面で検出された竪穴住居である。調査区西側の南壁際で確認されたうえ、SD022やSD024さらにはSX005が重複するなど検出状況はよくない。壁面はまったく確認できず、規模・形態などを把握することはできなかった。柱穴・炉跡などの構造物も確認されなかったが、貼床が確認されている。貼床は東西幅1.8mの隅丸方形を呈し、南側調査区外へと続く。貼床の外側には硬化面状の炭が若干混じる土層が認められ、図246の点線で示した部分以北では黄褐色粘質土へと変化し、ここに北壁が存在した可能性が想定される。東西両側はSX005、SD022に掘り込まれ、北側同様の状況は確認できなかった。貼床の存在ならびに北壁が想定できることから竪穴住居跡と判断した。

貼床上では南壁際付近を中心に堅く焼けた複数の焼土の分布が認められた。いずれも貼床直上で焼土面が盛り上がった状態で検出され、炉跡のように浅い凹みを伴って焼けている状況ではなかった。炭層はほとんどみられなかったが、確認された貼床範囲の東西両端部付近で炭化材が床面上より検出され、焼土層形成に関連する可能性が考えられる。また、二次堆積かとみられる炭混じりの焼土層がSD022確認面で検出されている。検出高は貼床直上の焼土面より若干高いが、東端部で確認された炭化材に繋がり、一連の焼土層である可能性が考えられる。ここであらためて検出状況をを確認すると、SB134は貼床外側の硬化面がSD022によって確実に掘り込まれる一方、SB134貼床上の焼土層とSD022確認面上で確認された焼土・炭層は周辺の状況からも一連の可能性が高く、SB134貼床と焼土層の形成には時間差が存在することとなる。また、焼土層の確認状況は①複数の箇所が非常によく焼けていて、床面上に盛り上がる状況で検出され

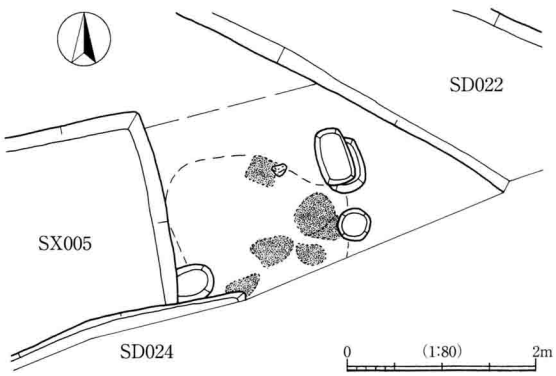


図246　SB134実測図

た、②炭層が床面上に広く認められない、③炭化材がまとまって検出されないなどからは、住居に伴う複数の炉跡、あるいは、火災住居やXII区などで認められた住居廃絶過程での壁材等の焼却結果とは異なる状況が想定される。調査区南壁の土層堆積状況においてSB134の掘り込みがまったく確認できなかったことから別遺構の重複を確認・把握することはできなかったが、SB134と焼土層はまったく異なった時期に形成された、別の性格を有する可能性が高いと判断される。なお、SD022にはごく少量であるが、古代の土師器片が含まれている。

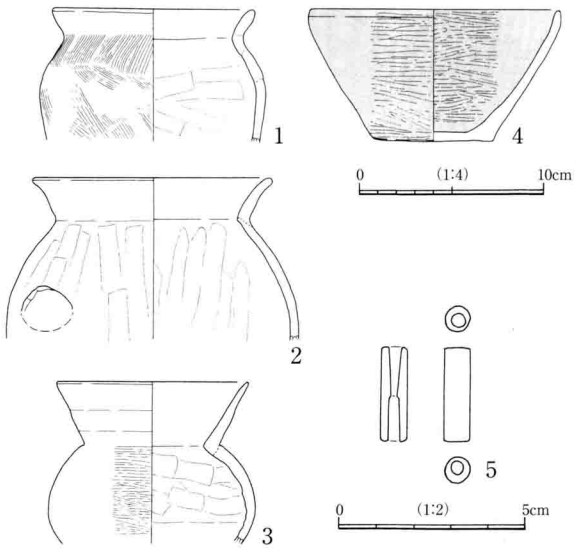


図247　SB134出土遺物実測図

遺物は床面直上を中心とした覆土中より少量の土器と管玉が出土している。出土状況は原位置を止めたものはなく、また、焼土・炭層に直接関わる状況も認められなかった。図化・掲載した土器には甕・壷・鉢がある。4の鉢は内外面赤彩が施され、箱清水式に該当する可能性が高い。壷・甕類は箱清水式系統のものは認められず、いずれも箱清水式以後に該当する。甕はく字形口縁甕で2の体部外面に焼成後穿孔が認められる。玉類は緑色凝灰岩製の管玉が1点出土している。穿孔は両側穿孔である。なお、さらに新しい段階の土器片は含まれておらず、出土遺物から焼土層の形成時期を評価しうる資料はみられなかった。

以上の様相より、SB134は古墳時代前期に該当し、焼土層の形成は古代まで下る可能性が考えられる。

SK162（PL－37）

1次面東端部で検出された不整方形土坑である。東西辺は2.4mを測り、南側は調査区外となる。覆土中位から底面にかけて、東側に焼土、西側に炭が顕著な状況で多量の焼土・炭の堆積が検出された。また、これらの焼土・炭層下の東壁寄りからは非常に堅く焼けた部分を検出している。堅く焼けた部分は炉やカマドの火床とは異なり、焼土の多量分布や熱変部はみられず、堅い貼床状を呈していた。この焼土・炭層にまじって礫の混入もみとめられたが、土器などの遺物はほとんど含まれていなかった。少量の微細片として弥生土器・土師器・須恵器が認められたが、図化・掲載できたものはなかった。

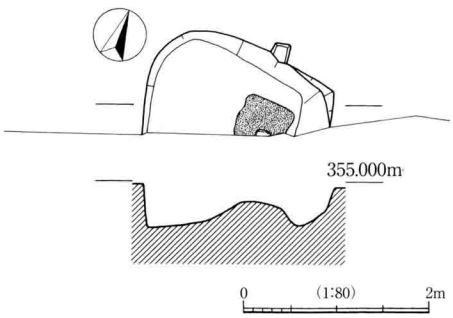


図248　SK162実測図

以上の状況より、土坑内で焼成が行われた可能性が高いと判断されるが、焼成の対象物が何であったのかは明らかにすることができなかった。また、焼成面が東壁側に偏り、西側に炭が多量に認められたことから、上部構造が存在した可能性も考えられたが、これを支える痕跡や調査区壁面における痕跡は確認されていない。検出状況より古代に属すると考えられるが、性格的あるいは時期的に詳細な位置付けについては確定しえない。

Ⅸ　B区の調査

1　B区の概要

B区では、A区１次面に相当する土層堆積は確認されず、部分的に客土もしくは土壌入れ替えがなされたようである。そのためA区２次面およびⅫ区検出面に相当する面まで掘削を実施し、遺構調査を行なった。現地表下1.2mまでは黒褐色の耕作土に覆われ、その下には砂質土層が堆積している。遺構の多くは、現地表下およそ1.8mの砂質土層中で検出された。確認された遺構は時期的にも限られており、おそらく水成堆積層の影響によって検出できなかった遺構も多くあるものと考えられる。

検出された遺構は、古墳時代、平安時代のものを主体としている。詳細をみると、古墳時代前期の住居跡、古墳時代中期の古墳、平安時代の井戸跡・溝・掘立柱建物跡、時期不明の方形ピット群が認められた（図249・250）。

まず時期不明のピット群は、おおよそ一辺25cmの方形を呈する掘り込みであるが、どの遺構にも切られることのないことから、最も新しい遺構であると考えられる。これらのピット群は、他の調査区でも多く確認されており、それらと同様、時期を決定できる事象を見出すことはできなかった。方形ピットは南北方向に直線的に並ぶ箇所がいくつか見られるが、不規則に分布する所も少なくない。

中・近世　中・近世の遺構・遺物は認められていない。とくに当該期の遺物は皆無であり、中・近世の集落としては大規模なものは想定されない。ただし、平安時代の包含層より上は洪水砂もしくはそれに由来すると考えられる砂質土層が堆積しており、客土・土壌入れ替えとともに、遺構の流失といった可能性も考慮に入れておかなくてはならないだろう。

平安時代　平安時代の遺構には明確なものは無く、その可能性のあるものとして井戸跡１基が確認された。住居跡等は確認されていない。その井戸跡SE040は円形を呈する素掘りの井戸である。調査の安全上、確認面下1.8m程度まで掘り下げるに止まったが、湧水点には達していない。出土した遺物は、土師器・須恵器が少量出土しているだけで、その確認面のレベルより平安時代の所産であると考えた。

検出面より四耳壺の体部片が出土している。

奈良時代　奈良時代の遺構はとくに明確なものは無く、その可能性のあるものとして溝が１条確認された。溝SD026は、幅1.2mの南北に走る溝である。その底からは焼土が検出されているが、おそらく下層の古墳時代住居跡に由来するものと考えられる。出土した遺物には、奈良時代所産の須恵器坏があり、おおよそその時期に帰属する遺構であろうと判断した。

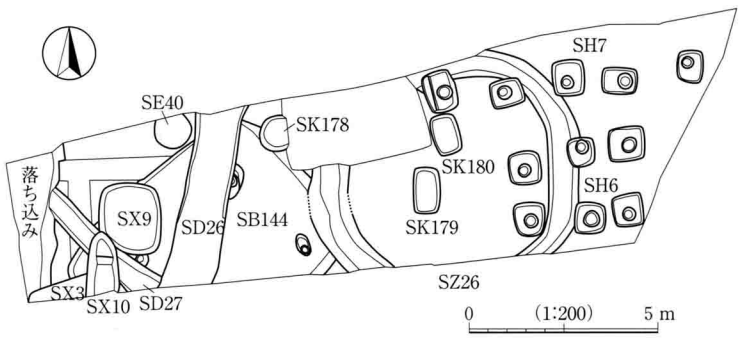


図249　B区遺構分布図

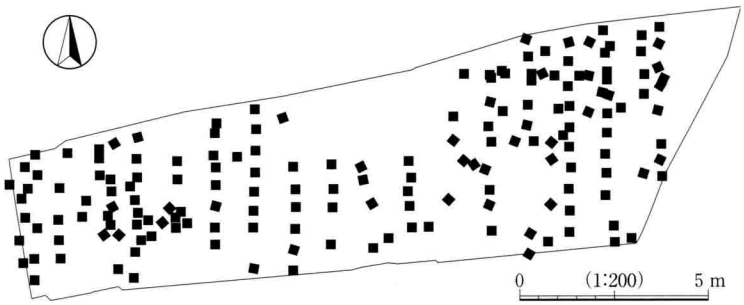


図250　B区方形ピット分布図

その他、奈良・平安時代に属する遺構として掘立柱跡が確認されている（後述）が、概して当該期の遺構は少ないと言える。

古墳時代　古墳時代の遺構には、古墳および住居跡がある。古墳（SZ026）は古墳時代中期後半に属する円墳で、おそらく一連の古墳群（高畑古墳群）の南端域に位置するものと考えられる。また、B区西端にある落ち込み遺構は、後述するC区SZ027の周溝外縁であると考えられる。

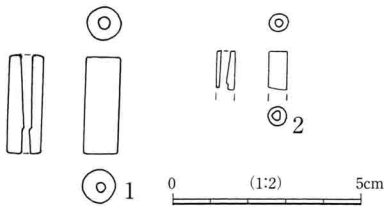


図251　B区出土石製品実測図

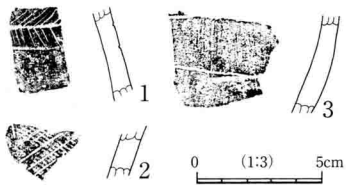


図252　B区出土弥生土器実測図

SZ026の下層からは古墳時代前期の住居跡が２棟確認されている。いずれもおおよそ古墳時代前期中葉から後半に帰属する。SB145はSZ026掘削時に焼土が確認されているが、その規模・形態については不明である。遺物は調査時にはいずれもSZ026出土として取り上げたが、SB145に伴うものと判断した。遺物には小形坩・壷・緑色凝灰岩製管玉（図251―１）が認められる。１は全長2.6cm、径0.9cmを測る。２はSD026より出土した緑色凝灰岩製管玉で、径0.5cmを測る。

このように古墳時代の遺構は、時期的には断続的な展開を見せている。とくに古墳時代後期の遺構・遺物は皆無である。

弥生時代以前　弥生時代以前の遺構は、不明瞭で確認できなかった。ただし弥生後期吉田式・箱清水式に比定される土器片も認められており、当該期に人の営みがあったことは十分想定される。図示したものはいずれも弥生後期・吉田式の土器片である。１はSH006覆土、２は検出面、３はSZ026覆土より出土しており、いずれも遺構には伴わないと判断される。

弥生後期より前の時期にあたる遺物については確認されていない。

遺構番号	形態規模(m)	付属施設				重複関係		土器類		石製品土製品玉類	鉄製品青銅製品	報告頁	時期		備考
		床面	炉・カマド	柱穴	その他	先	後	実測数	重量(kg)				時代	細別	
SB144	方形 6.40×5.00	貼床	炉	2			SB145？SZ026	12	9.35	管玉		229	古墳	前期	
SB145	不明	不明	炉？	なし		SB144？	SD026	0					古墳	前期	遺物はSZ026として取り上げ
SD026	幅 1.20	平坦				SB145		2	5.53	管玉			奈良		
SD027	幅 0.65	平坦						0	0.3						
SE040	1	不明						0	0.11				平安		
SH006	2間×1間	柱穴		6				1	0.89			232	奈良～平安		
SH007	4間	柱穴		5				0	0.92			232	奈良～平安		
SK178	円形 0.90	平坦						0	0.02						
SK179	方形 1.25×0.70m	平坦						0	0.13						
SK180	方形 1.00×0.70m	平坦						0	0.14						
SZ026	円形 溝幅 1.10m	平坦				SB144		1	2.5			231	古墳	中期	
落ち込み		平坦						1	1.8			236	古墳	中期	SZ027 周溝
SX011								0	0.96						

表16　B区検出遺構一覧

2　検出された遺構と出土遺物

1　古墳時代の遺構と遺物

SB144（PL－38、PL－B－1）

6.40×5.00mの方形を呈する竪穴式住居跡である。床面には貼床を施している（点線内側）が、住居中央はわずかに高まりをなしている。また住居北側では壁際に沿って貼床の無い箇所があったが、壁板の痕跡であろうか。なお方形に貼床の欠損している箇所は、上層の遺構によるものと考えられる。側壁は明確ではなく、床面の広がりによって住居規模・形態を確定することが出来た。とくに北東隅はSZ026と重複しており、トレンチによって床面の範囲を把握し、壁面を推定した。柱穴が3基確認され、いずれも底には円形の柱痕を残している。北側の柱穴底からは甕の破片が出土している。炉は地床炉で、住居西側柱間に設けられている。その周囲には炭化物が散在していた。

出土した土器は多く、土師器が主体をなしていた。床面より多くの土器が出土している。とくに北側隅の柱穴周辺より多くの土器が出土している。またそのなかには砥石（13）も含まれていた。南西隅柱穴の西側では管玉（14）が1点出土している。

図化した土器には、土師器の甕・高坏・小形器台・小形坩・ミニチュア土器がある。

甕には単口縁や口縁端部を面取りするものがある。いずれも底部は平底だが、接地面は小さく、尖底気味のもの（4）もある。ただし4は正置できる。外面はハケメ調整を基調とし、ミガキ調整またはナデ調整によって仕上げている。

小形坩（8）は、口縁部が大きく開く鉢形を呈するものだが、若干器高は口縁の広がりに対して高い。その底部は丸底をなし、正置できない。外面にはハケメ

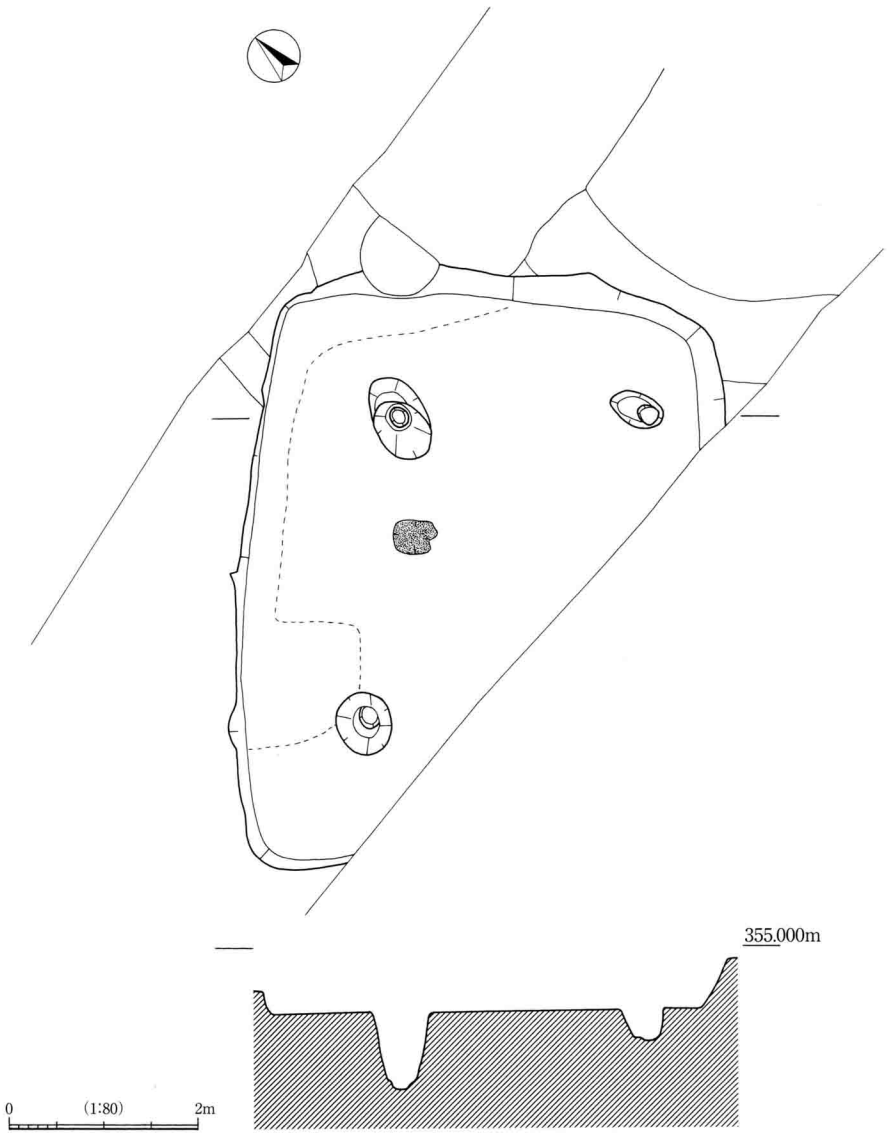


図253　SB144実測図

を残しており、全体的に精製な観はない。

器台は3点ある。その形態は多彩で、9のように脚部の高さが低くなりX字状に近い形態を呈しているものや、11のように長めの脚部を有しそこに円孔を穿つものもある。10は開脚器台であろうか。赤彩を施している可能性がある。

12は柱状屈折脚を有するもので、外面はハケメ調製のち縦位ミガキ調整で仕上げる。内面はヘラ調整を施し平滑な面をなしている。器壁は相対的に厚い。

その他ミニチュア土器（7）が出土している。手ずくねで外面には一部ハケメ調整、内面にはナデ調整を施す。内外面全面黒色を帯びている。

また床面より緑色凝灰岩製の管玉（14）が出土している。下半は欠損しており全長は不明だが、径2.7mmを測る。器面は平滑であるが、研磨によって多面体をなす。孔は比較的大きく、器壁は薄い。

小形坩（8）と脚部屈折高坏（12）が共伴する事例は多く、前期末の年代が与えられる。9のようなX字状に近い器台もそこに伴う可能性は高い。その一方で10のような開脚気味の器台や11のような長脚の器台は前期末には少なく前期中葉以前の様相を呈している。そこで甕をみてみると、丸底を呈するものはないが、底部は小さく接地面は非常に小さい。弥生後期箱清水式の平底甕から古墳時代の丸底化への道程を考えると、この縮小化した

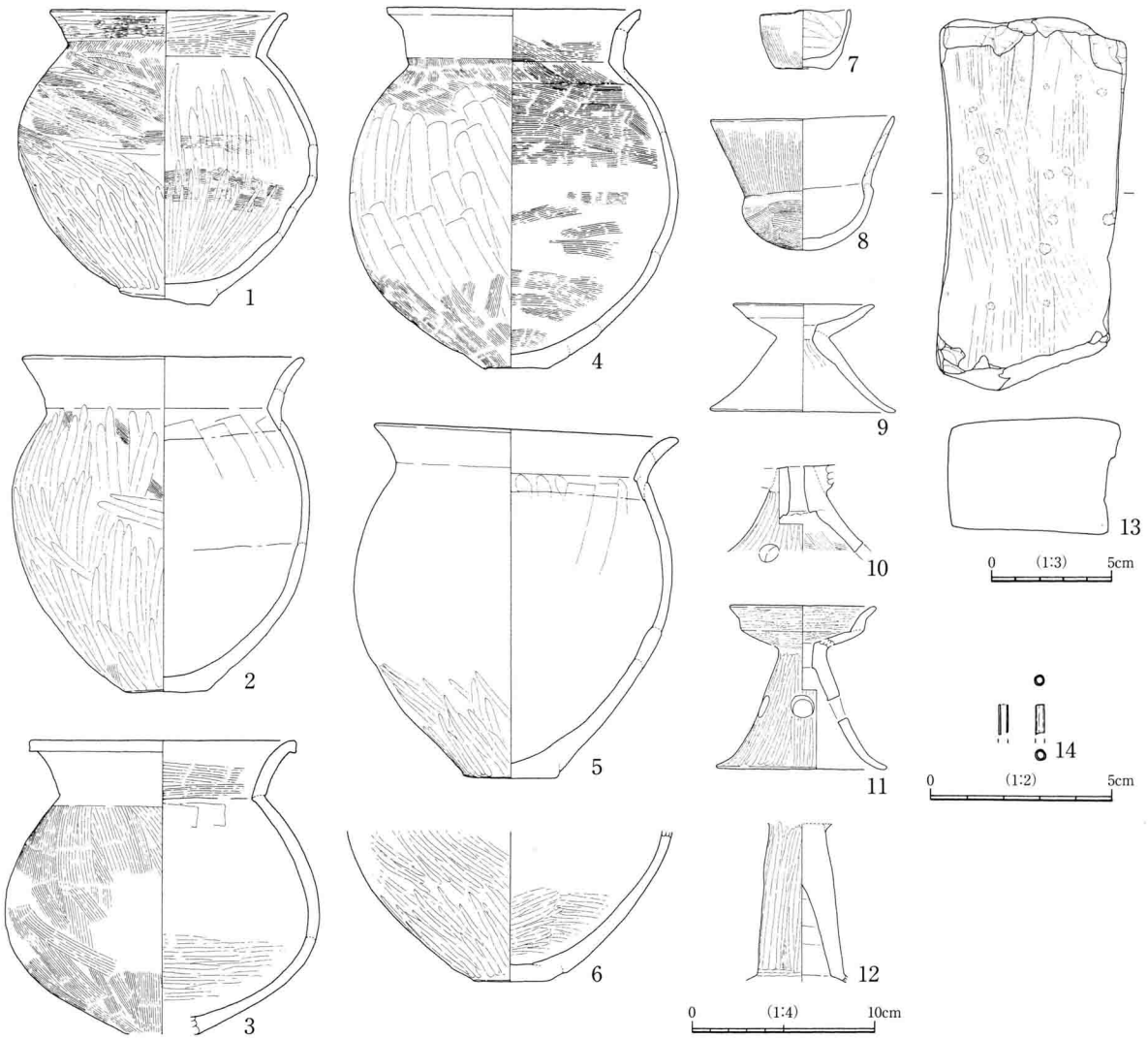


図254　SB144出土遺物実測図

底部は前期中葉以降の年代観が与えられる。以上のことから本住居跡は、古墳時代前期後半～末期に近い所産であろうと考えられる。

SZ026（篠ノ井・高畑26号墳）（PL－38、PL－B－１）

幅1.0m、深さ0.32mの円形にめぐる周溝が確認された。その規模・形態、出土遺物から古墳時代中期後半の円墳であると考えられる。墳丘は北東側が若干張り出しているが、おおよそ円形を呈しており、その規模は周溝を含めて直径7.5mを測る。調査区壁面で層序を観察したところ、墳丘は基盤層のみが残存しており、その上半は削平され埋葬施設も流失していたことがわかった（図257）。洪水砂より下位の層も水平に堆積していることからも、比較的早い段階（平安時代以前）にはすでに削平され、墳丘の高まりを失っていたものと考えられる。

基盤層には古墳時代前期以前の遺構・遺物を包含し、周溝はその基盤層を掘りこんで構築している。土層を確認すると、周溝はいったん基盤層を掘削した後、一部盛土を施してその形態を整えているようである。周溝の形態は、外縁は相対的に緩やかな傾斜をなして掘り込まれ、墳丘に向かって急激に立ち上がる。

遺物は周溝内より出土している。周溝内出土の遺物には、小形坩・小形壷・椀坏・緑色凝灰岩製管玉があるが、椀坏以外は古墳時代前期のもので、下層より検出されたSB145に帰属する可能性が高い。

図化に及んだ土器は椀坏１点に止まる。完形でとくに打ち欠き等の痕跡は認められない。底部は丸底を呈し、口縁部は屈曲して外方へ開く。内外面ともに丁寧なミガキ調整を施し、内面は黒色処理される。

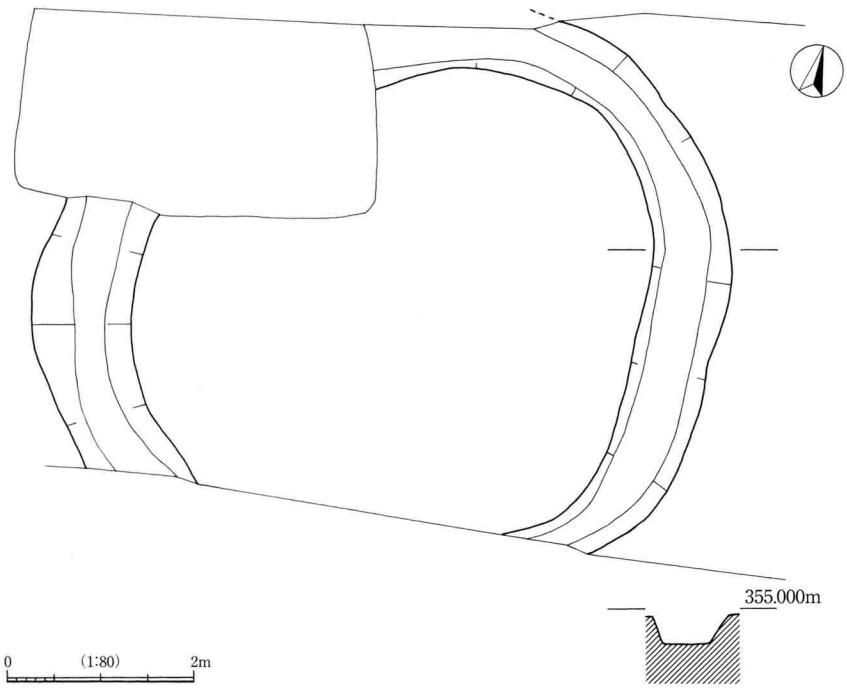


図255　SZ026実測図

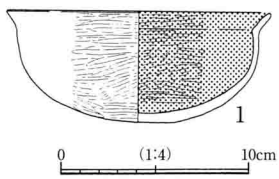


図256　SZ026出土遺物実測図

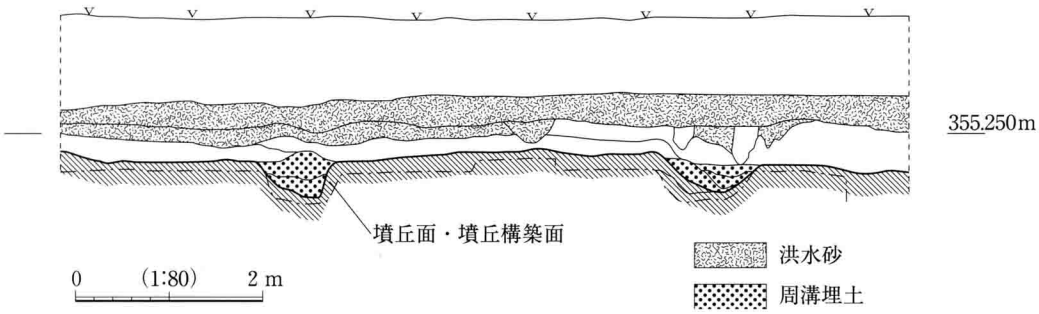


図257　SZ026調査区南壁セクション実測図

2　奈良・平安時代の遺構と遺物

SH006・007（PL－38）

SH006では、一辺0.8m前後の方形土坑が6基検出された。いずれの土坑からも柱痕が確認され、掘立柱建物の存在が想定される。現状で1間×2間が確認されているが、その総規模は把握できていない。

SH007では、一辺1.0m前後の方形土坑が5基検出された。いずれの土坑からも柱痕が確認され、掘立柱建物の存在が想定される。その規模は、現状で4間の柱穴列が確認されているが、その総規模については把握できていない。

覆土中より箱清水式土器や土師器が出土しているが、本遺構に伴うと積極的に言える資料は無かった。

現状では柱穴列の並びによってSH006・SH007と分けているが、本来は一つの掘立柱建物であった可能性は否定できない。また、調査区内においては当該期の竪穴式住居跡は確認されていないが、竪穴式住居跡とセットになっていた可能性は周辺の調査成果からも想定される。

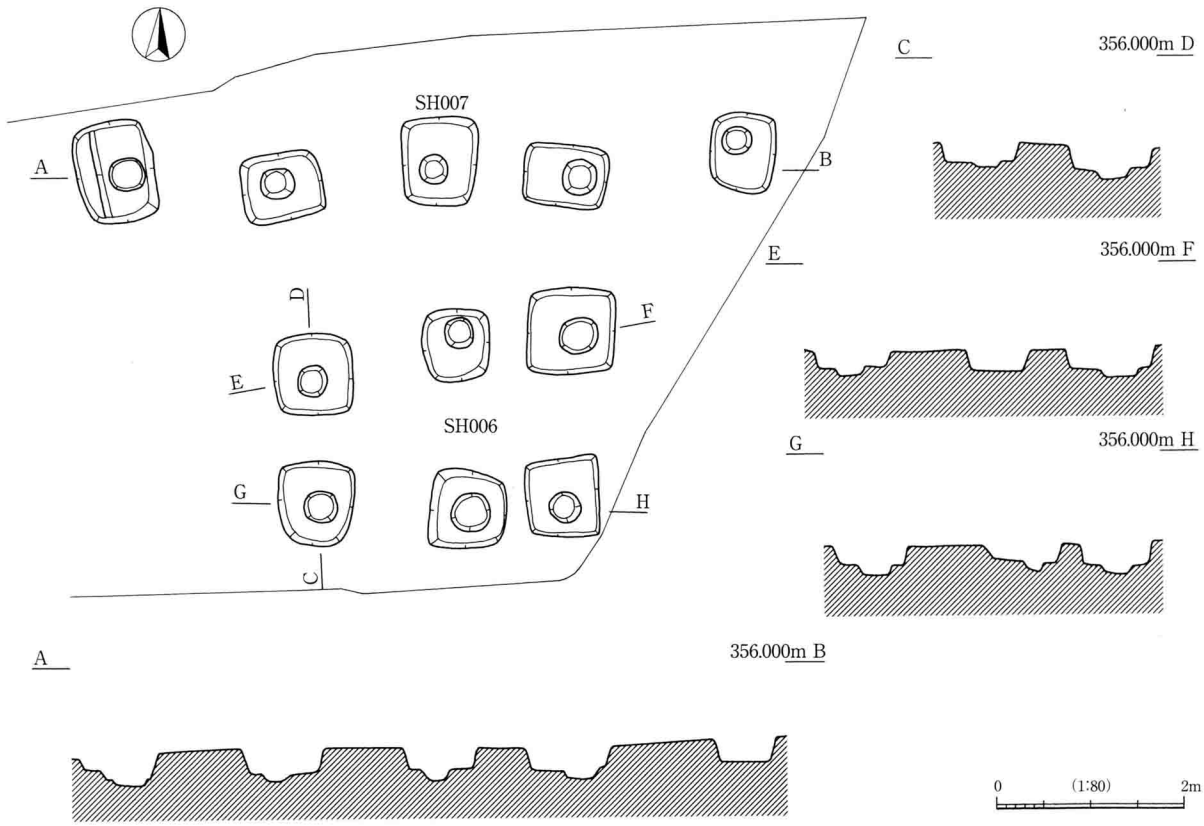


図258　SH006・007実測図

X　C区の調査

1　C区の概要

C区は、現在の聖川に平行する調査区である。目視では平坦な地形をなしているが、字「高畑」の名称から察しても周囲より若干標高が高い位置にあるようである。このC区では、明確な仁和の洪水砂層は認められなかったが、洪水砂に由来すると考えられる砂質土層の堆積が上層で確認された。基本的な土層層序は、表土の耕作土以下おおよそ砂質土層→地山粒を含む粘土質層→地山の順で確認された。遺構は砂質土層の下、粘土質層上面で検出された。調査された遺構は、いずれも検出レベルに大きな差はみられなかった。しかし平安時代の遺構覆土には砂質土層が堆積し、古墳時代の遺構内には粘土質層が堆積するという違いが見られた。遺構の詳細をみると古墳時代前期の住居跡、古墳時代中期の古墳、奈良・平安時代の住居跡、近世の井戸跡があった。

中・近世　中・近世の遺構は、耕作および客土等によって遺構を検出することはできなかった。井戸跡SE042からは近世所産の磁器片が出土している。円形の素掘りで検出面下およそ2mまで掘削し、湧水点に達した。その他の遺構は確認されていないが、後述するように石造物などの存在から当該期の集落の展開が窺える。

奈良・平安時代　奈良・平安時代の遺構には住居跡がある。住居跡は総計6棟を数え、広く点在する。SB149とSB152は、他の住居跡と比べて若干検出レベルが高く、「仁和の洪水」の影響を大きく受けている（後述）。仁和の洪水砂層は、地点によって堆積状況が異なっており、SZ027・SZ028周辺でとくに観察された。SZ028東側

遺構番号	形態規模(m)	付属施設				重複関係		土器類		石製品土製品玉類	鉄製品青銅製品	報告頁	時期		備考
		床面	炉・カマド	柱穴	その他	先	後	実測数	破片重量(kg)				時代	細別	
SB146	方形 3.20	地山	カマド					6	6.39			243	平安	前半	
SB147	方形 5.80	貼床	炉	2			SZ027 SK182	14	8.05			235	古墳	前期	
SB148	方形 4.20×3.70	貼床	カマド			SZ028		12	7.49	臼玉	刀子	243	奈良～平安前半		
SB149	不明	貼床	カマド					4	1.54		鉄滓	245	平安	後半	
SB150	方形 4.20×2.60	貼床	カマド				SB151	10	7.79		刀子	247	奈良～平安前半		
SB151	方形 3.80×3.20	貼床	カマド			SB150	SE042	5	3.35			248	奈良～平安前半		
SB152	不明	不明瞭	不明			SZ027		5	1.48			245	平安	後半	
SD028	幅 0.75	U字				SZ027		0	0.44				平安		
SZ 027 下層溝	幅 4.40	平坦				SB147	SZ027	3	SZ027			237	古墳	前期	
SE041	円形 1.0	未完掘						0	0						
SE042	円形 1.4	未完掘				SB151		0	2.41		釘？		近世		
SE043	円形 0.8	未完掘						0	0.19						
SK181	楕円形 1.80×1.10	平坦						3	0.7						
SK182	方形 0.90×0.80	平坦				SZ027 SB147		0	0.04						
SK184	楕円形 0.80×0.50	不明						0	0						
SK185	不明	不明						0	0.06						
SK186	楕円形	平坦						1	0.06						
SX012	方形?	不明瞭						0	0.01						
SZ027	円形 溝幅 3.60	平坦				SB147	SD028 SK182	5	10.782			236	古墳	中期	
SZ028	円形 溝幅 2.60 直径(13.6)	U字					SB148	8	2.565		鉄滓	238 249	古墳	中期	
pit081								0							
pit082								0	0						

表17　C区検出遺構一覧

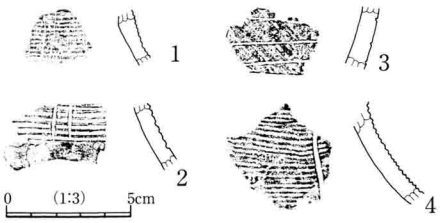


図259　C区出土吉田式土器実測図

周溝の上層では、洪水砂層中より緑釉陶器・灰釉陶器・馬骨が出土している。

古墳時代　古墳時代の遺構には、前期の住居跡・溝がある。いずれも調査区南側に営まれており、当該期の集落が現聖川に沿って展開するという周囲の状況と合致する。

弥生時代後期以前　弥生時代後期以前の遺構は検出されなかったが、覆土中より弥生後期吉田式・箱清水式の土器片が出土している。図示したものは、弥生時代後期・吉田式の土器片である。1はSB148、2・4はSZ027、3はSB150から出土しており、その出土地点は、おおよそ古墳時代の遺構部分布域内におさまっている。

写真44　C区全景

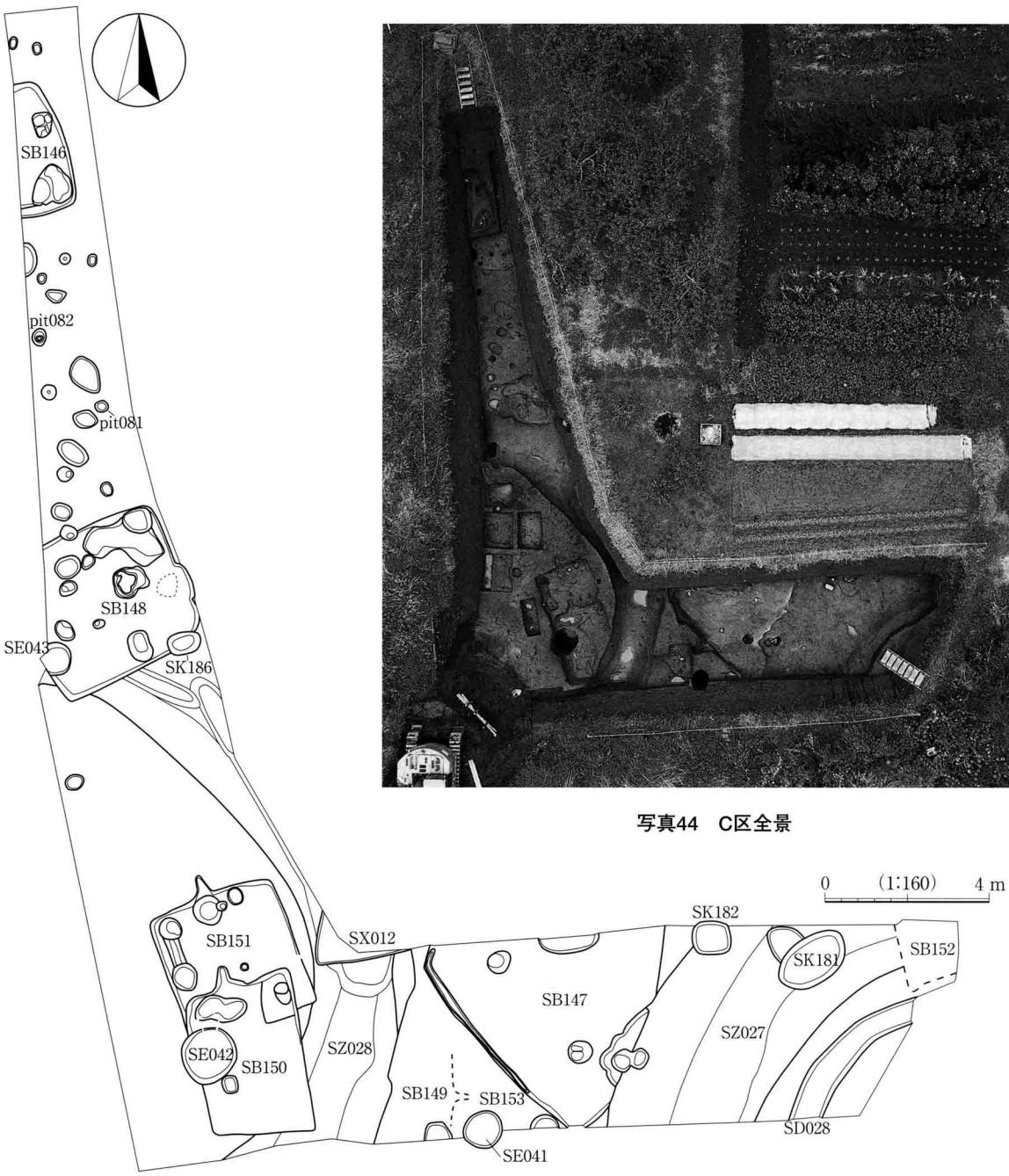


図260　C区遺構分布図

2　検出された遺構と出土遺物

1　古墳時代の遺構と遺物

SB147（PL－39、PL－C－1）

一辺5.8mをはかる竪穴式住居跡である。住居跡の東半は、溝（SZ027下層溝）によって切られているが、おおよそ方形の平面形が想定される。貼床および柱穴2基が確認され、側壁際には溝がめぐらされている。明確な炉は検出されず、多量の焼土もみられなかった。ただし、SK内にはわずかながら焼土塊が認められた。住居跡内北側の床面では、炭化した細い棒状木材が広がっていた。

遺物は、SK周辺で出土したものと、床面上のものとに分けられる。SK自体は床面をわずかに掘り込んだものであるが、その上位の住居覆土中より多量の土器が出土した。調査区北壁のセクションで確認したところ、SK上で住居覆土上から掘り込んだ土坑が数基切りあっているのが確認された。その周囲では、覆土精査中にも円形状の遺構プランもみられたが、明確な検出には至らなかった。

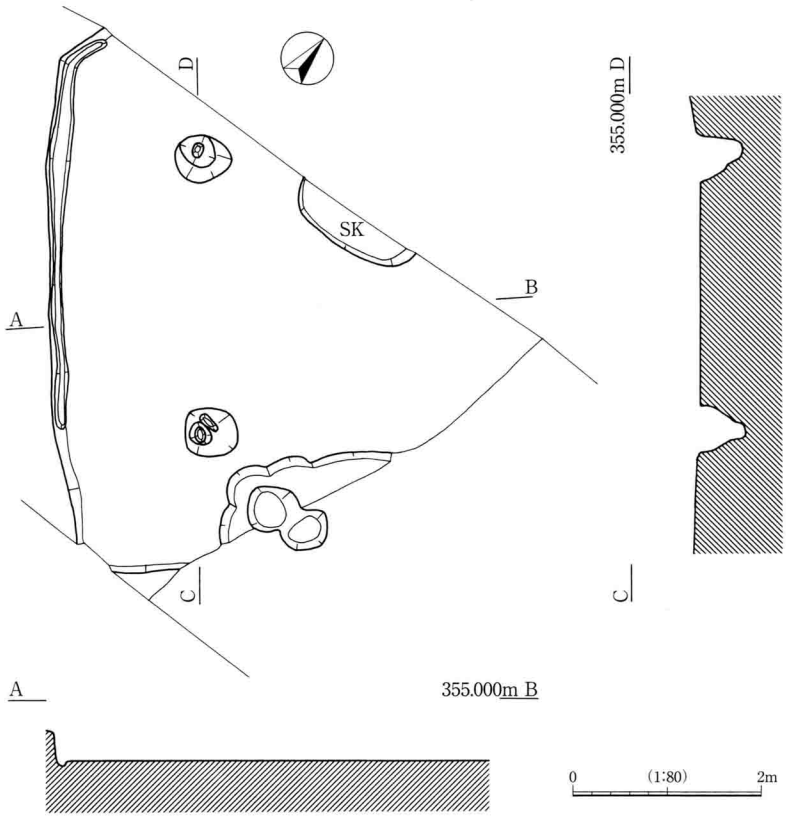


図261　SB147実測図

2・6・9・11・16はSK上層より出土している。甕の台部（8）は、南側柱穴底より出土している。

甕（1～5）は単口縁のものを主体としており、外面をナデ調整によって仕上げている。底部の形態は不明であるが、おおよそ平底と想定される。ただし、甕の台部も認められる。また19・20はS字状口縁台付甕の体部片であると思われる。壷には、有段口縁壷（6）と広口壷（7）がある。有段口縁壷は、口縁部のみが残存しており、内外面ともに赤彩されている。屈曲部は粘土貼付によって垂下させている。小形器種には、小形坩・小形器台・高坏がある。小形坩（9）は、口縁が大きく開く古墳時代前期に特徴的なものだが、外面にはハケメやヘラ調整痕を残しており、精製の観は無い。高坏はその全形がわかるものはないが、13・15のように脚部が中実状をなすものや14のように屈折脚をなすものがある。ただし、13・15は覆土上層より出土しており、その帰属については留意する必要がある。

遺物の出土状況などから小形坩が出現した後の古墳時代前期中葉に帰属する住居跡であると判断される。

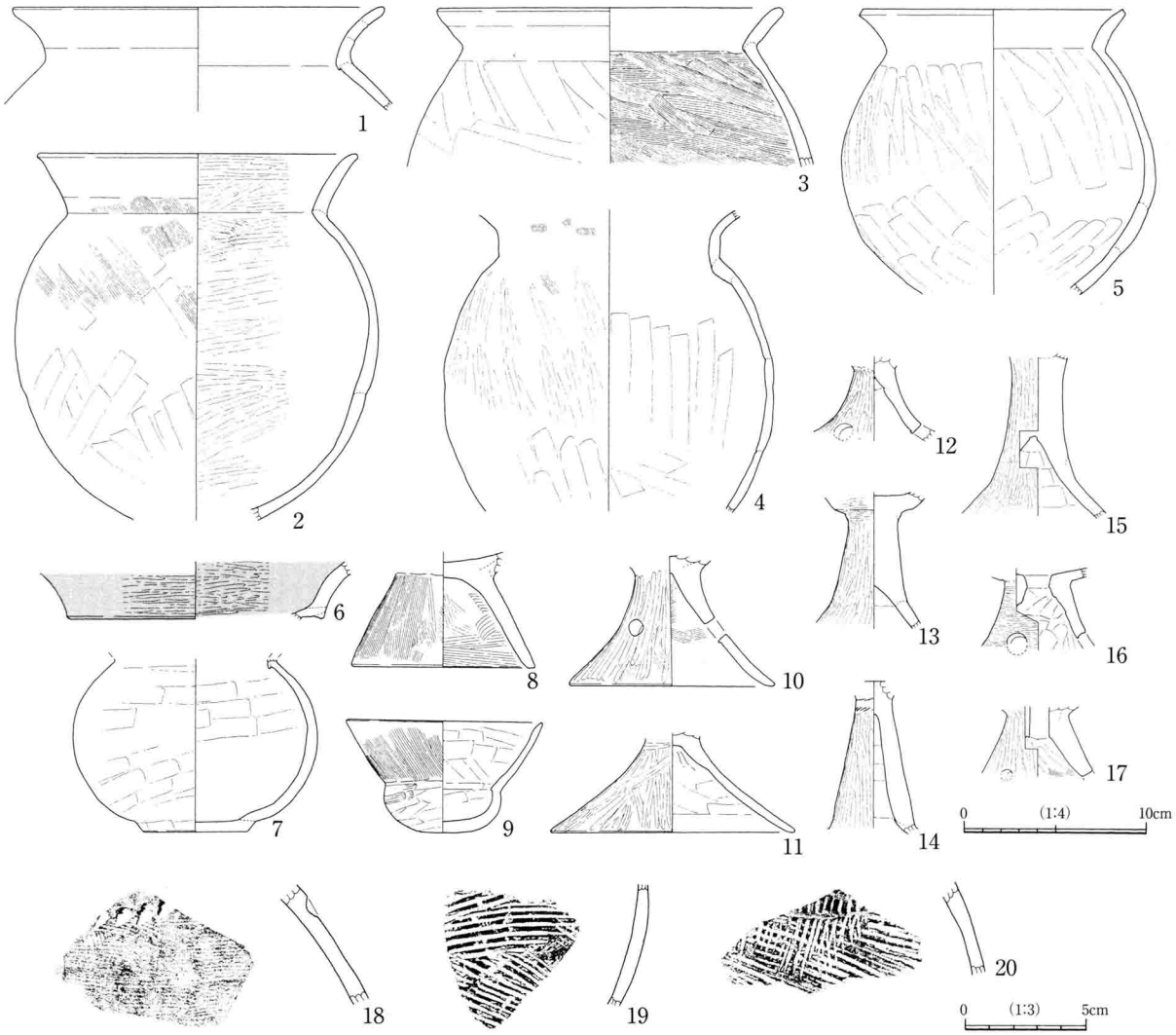


図262　SB147出土遺物実測図

SZ027（篠ノ井・高畑27号墳）（PL－38・39、PL－C－1）

幅3.6mをはかる円形の古墳周溝。調査時にはSZ027下層溝（後述）を検出したが、土層や遺物の出土状況などからそのSZ027下層溝の上に古墳周溝をめぐらせていることがわかった。周溝底は比較的平坦で、周溝外側へは緩やかな傾斜をなすいっぽうで墳丘側へは急激な立ち上がりをみせている。周溝底はおおよそ標高354.200mを測る。墳丘の大半は削平されていたが、地山の上に盛土を施しながら構築していったことがわかった。この周溝底位から出土した壷形土器（1）は、隣接調査区B区の西端で確認された落ち込み遺構出土のもの（2）と近似している。その落ち込み低位面の標高は354.300mを測り、C区周溝底とほぼ一致する。また、想定される墳丘の規模などからもこの周溝とB区で検出された落ち込み遺構は一連の周溝であると考えられる。ただしこのB区で確認された周溝は、南北に真直ぐ走っており、C区側の状況とは大きく異なっている。墳丘形態自体は、C区側では緩やかな弧を描いており、円形基調のものが想定されるが、未調査部分が多く今後の課題となる。

C区側より出土した壷形土器（1）は、単口縁であるが、若干内湾したのち口縁がラッパ状に開く。ナデ調整を基調とし、外面は赤彩される。それと近似するB区より出土した壷形土器（2）は、単口縁で体部は真直ぐ伸びる寸胴形が想定される。同様にナデ調整を基調とし、ヘラナデが多く看取される。外面には赤彩を施す。1・

2のようなで肩で寸胴形の壷形土器は、善光寺平においては大星山古墳群2号墳・地附山古墳群3号墳・土口将軍塚古墳で出土している。いずれも古墳時代中期中葉～後半と位置づけられる古墳で、それらの壷形土器は墳頂部に配していたと想定されている。とくに2は墳丘斜面上より出土しておりSZ027においても墳頂部に壷形土器を配していた可能性が指摘される。周溝からは骨が出土し、不明瞭ながらも素彫りの土坑状の掘り込みも確認された。骨はヒトの臼歯とともにニホンジカの歯（右上顎M2・M3）が出土している。骨の遺存状態は良くなく散在しており、その経緯が留意される。その周囲からは中期後半の椀坏（4）とともに筒状土製品（6）が出土している。その体部上半には突帯を貼り付けていたと思われる痕跡を有し、底部には焼成前穿孔を施している。黒斑がみられることから在地的な製作が想定されるが、儀器的な様相が強く埴輪を模したものとも見てとれる。その他セクションで確認した周溝底より高坏脚部（3）・椀坏（5）が出土している。いずれも古墳時代中期後半に位置づけられる。

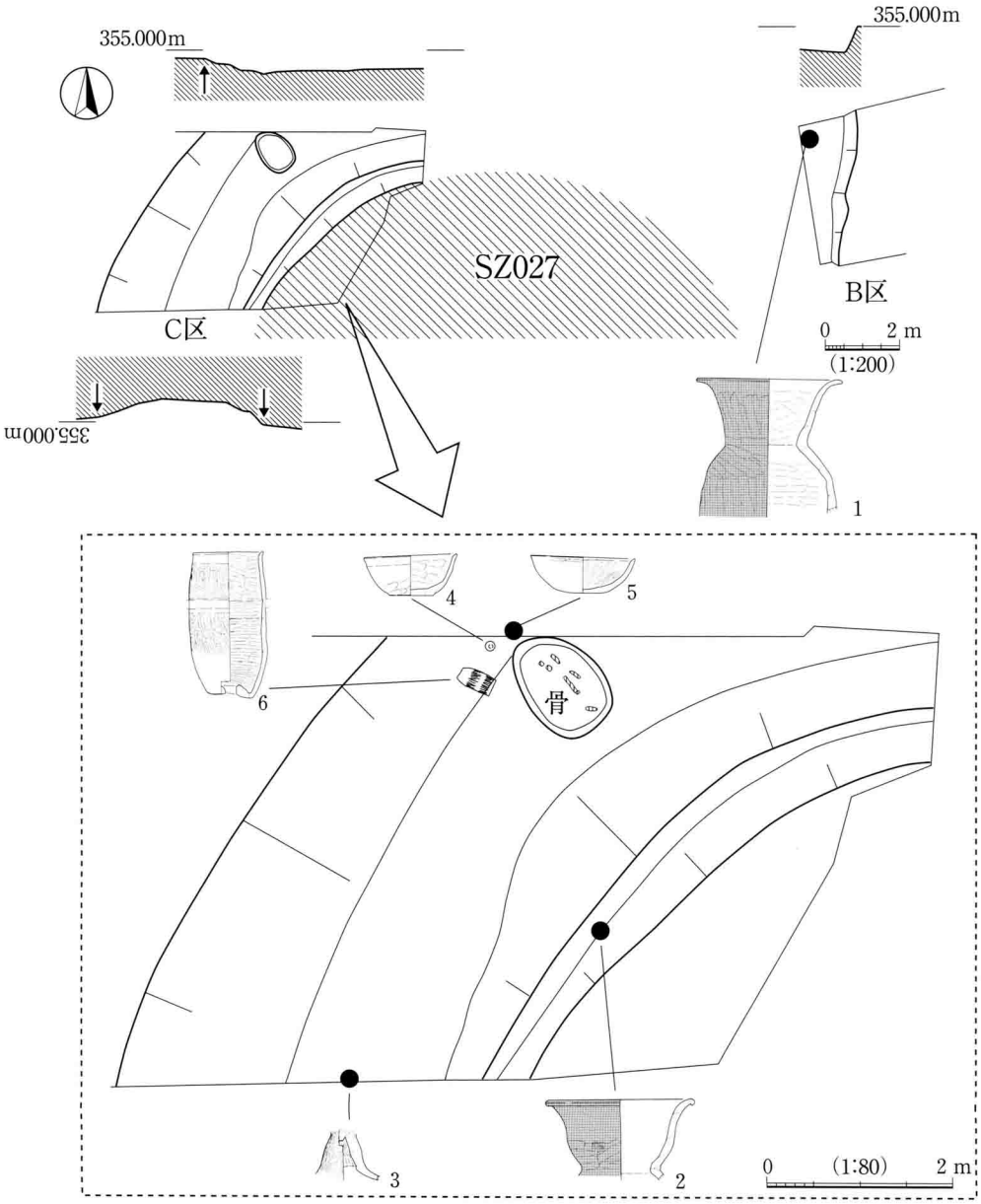


図263　SZ027実測図・遺物出土状況

SZ027下層溝

土層層序を調査区北・南壁で検討した。その検討等によってSZ027周溝構築以前に幅4.40mの南北に走る溝を掘削していたことがわかった。地山層を掘削しており、その底位は標高354.100mをはかる。溝底は若干凸凹な面をなし、外側に向かって急激に立ち上がる。SZ027下層溝覆土（SZ027構築面）とSZ027覆土とは明確に分層される。またSZ027は外縁を緩やかに立ち上げるのに対してSZ027下層溝は両縁が急激に立ち上がっており、その形態は大きく異なる。またB区では下層に同様の溝が確認されないことから時期を異にする別遺構であると判

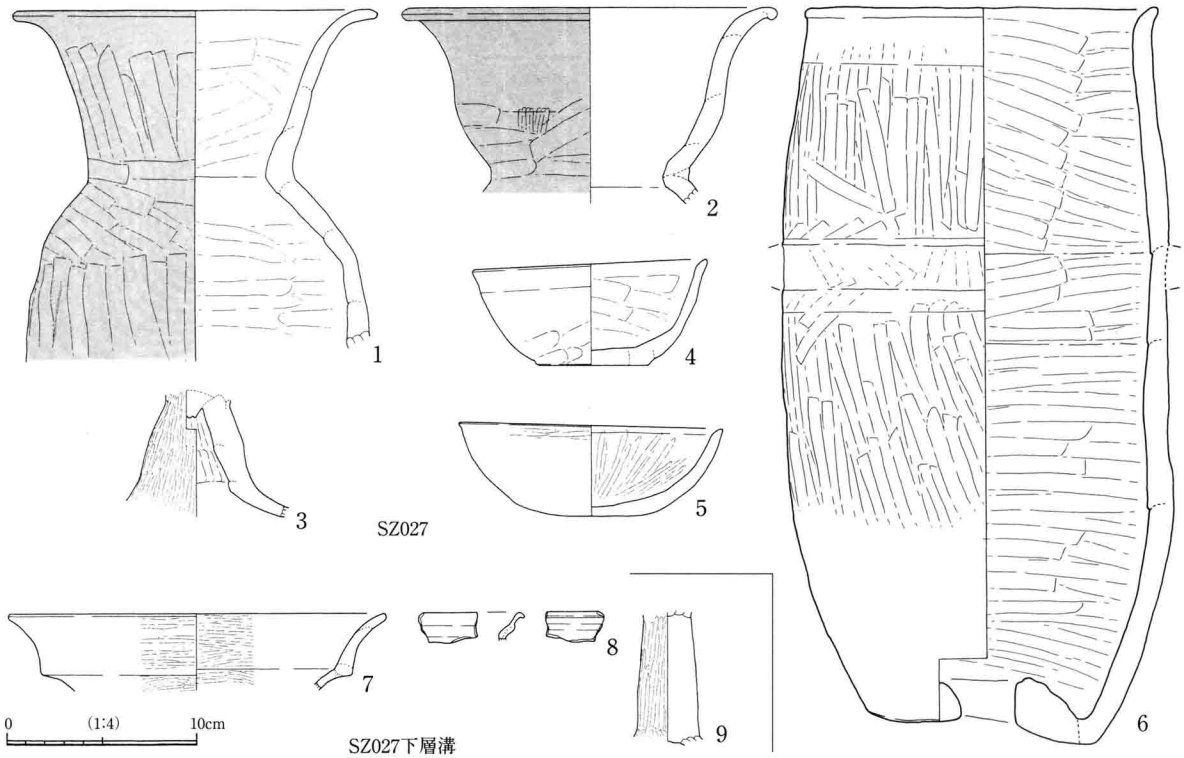


図264　SZ027・SZ027下層溝出土遺物実測図

断した。調査時にはSZ027と明確に区別できていなかったため、出土レベルによって遺物の帰属を判断した。溝底位より出土した土器のうち図化したものは、古墳時代前期の土師器で、有段口縁壷（7）・S字甕（8）・脚部中実柱状高坏（9）がある。このなかで時期の明確な脚部中実柱状高坏は前期末に位置づけられる。S字甕においては、SB147より体部片が出土しており、同一個体か否かは確定しかねるが、SB147からの混入の可能性も考慮しておきたい。なおSB147覆土中より出土した土器のなかにも本遺構出土の土器片と接合するものがある。古墳時代前期中葉のSB147をきっており、脚部中実柱状高坏が伴っていることからも、本遺構は古墳時代前期末に帰属するものと判断される。

SZ028（篠ノ井・高畑28号墳）（PL－40、PL－C－1）

幅3.6mをはかる円形の古墳周溝を検出した。推定される墳丘の直径は13.6mである。周溝はU字形に掘り込まれており、両側縁は急激に立ち上がる。周溝の構築は、まず地山が掘削される。その底は不整形な面をなしており、部分的に盛土を施していると考えられる。また墳丘斜面にはピットが1基認められ、本古墳との関連が考慮される。墳丘は周溝肩のレベルまで地山削り出しであるが、それより上方は削平されており構築方法は不明である。埋葬施設も確認されていない。墳丘上には奈良～平安期の住居跡が認められ、その検出レベルより、平安時代前半以前に埋葬施設および墳丘上半はすでに削平されていたものと考えられる。ただし、周溝上層には洪水砂が堆積しており、周溝部分は平安時代に至っても周囲より低かった状況が想定される。遺物は、平安時代の

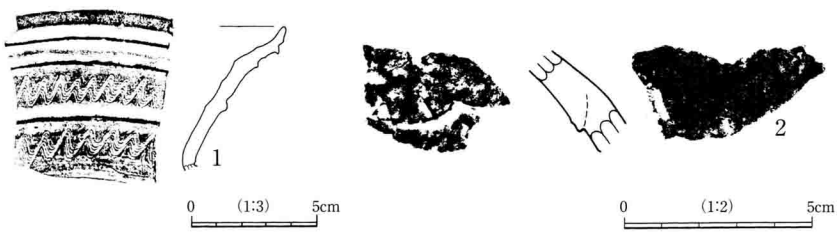


図265　SZ028出土遺物実測図

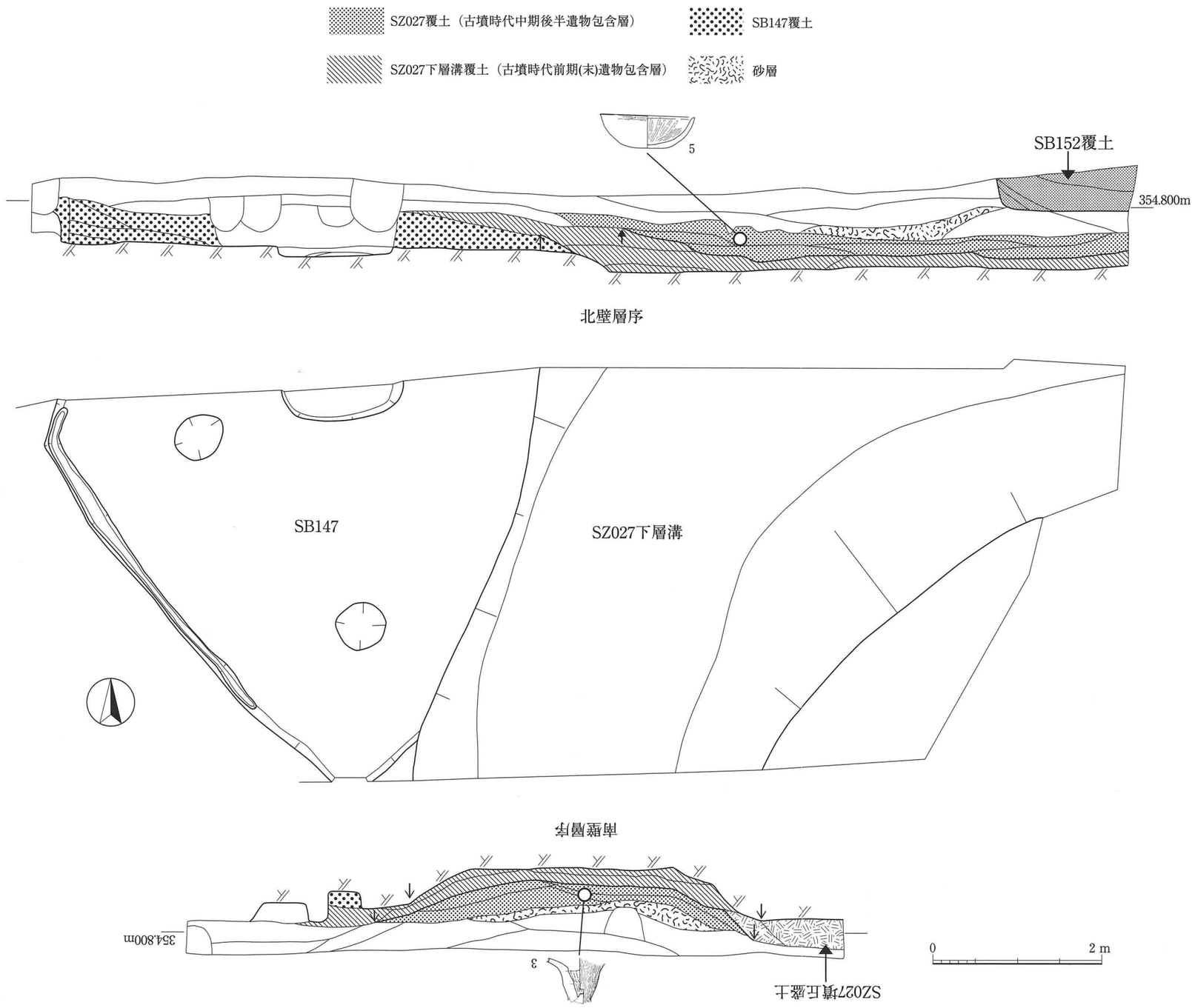


図266　SZ027下層溝実測図

ものが主体となっている。周溝の1/3程度しか調査に及んでいないが、古墳時代の遺物は少ない。それは他の古墳において見られた状況と似ており、未調査部分において土器の集中多量配置が行なわれている可能性もある。そのなかでも古墳時代中期後半の様相をもつ須恵器の甕の口頸部片（1）が出土している。口縁部はその下端に沈線を施し、垂下する。頸部は上下二段に区画され、それぞれに波状文が横走する。またその他、外面に赤彩を施した土器片（2）が出土している。小片ではあるが、内面には輪積み痕を残し、壷形土器の肩部片と推定される。以上の土器片は、いずれも周溝覆土より出土したもので、墳頂部より転落してきたものである可能性が高い。出土した遺物量は少ないが、おおよそ古墳時代中期後半に帰属する古墳であると考えられる。

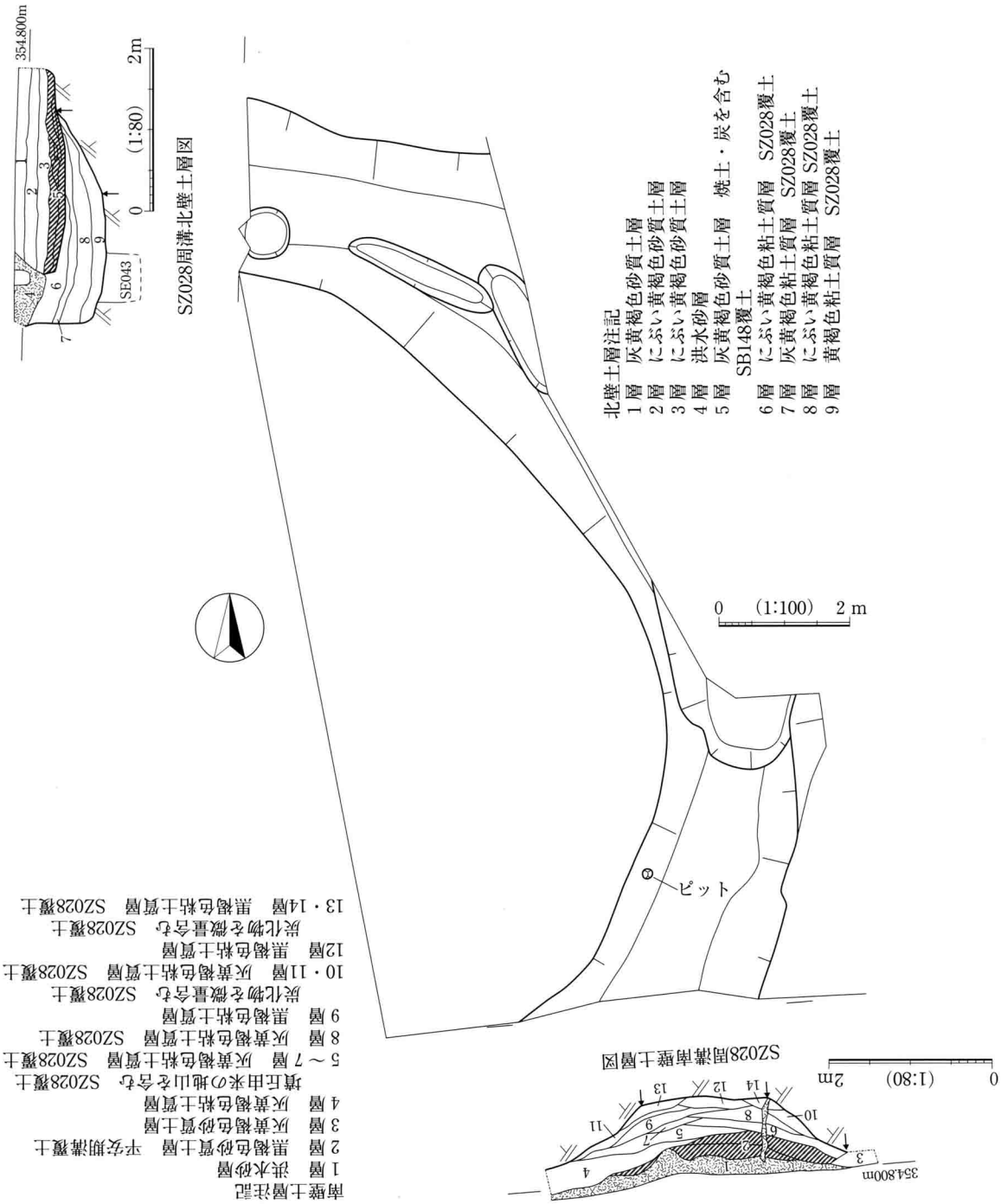


図267 SZ028実測図

2　古墳時代前半期の土地利用の変遷

SB147・SZ027の調査区北・南壁で、土層層序を確認したところ古墳時代を通じて大きな土地利用の転換があったことがわかった。その南北両壁では、同様の堆積状況が確認され、大きく５つの層に分けられた。

まず地山層と呼んでいる基盤層は、黄褐色を呈する粘土質層である。粒子が細かく、しまりも強い。

その上には、SB147の覆土が堆積する。にぶい黄褐色を呈し、しまりの強いのが特徴的である。古墳時代前期中葉の遺物を包含する。

つぎにSZ027下層溝の覆土が堆積する。にぶい黄褐色を呈し、SB147覆土と似るが、地山粒を含むのが特徴的である。古墳時代前期末の遺物を包含する。

そしてその上層にはSZ027覆土が堆積する。黒褐色を呈する粘土層で、SZ027下層溝覆土（SZ027構築面）とSZ027覆土とは明確に分層される。古墳時代中期後半の遺物を包含する。なおSZ027墳丘盛土は、南壁セクションで確認した。地山層に似たにぶい黄褐色を呈し、しまりのある粘土層である。また下から墳丘に向かって急激に立ち上がる点や中に遺物を包含しない点、層序関係などから墳丘盛土と判断した。

SZ027周溝覆土の上には、奈良・平安時代以降と思われる土層が堆積している。砂層はおそらく仁和の洪水砂であると思われるが、大きな広がりを見せない。その他は黒褐色を呈するしまりのない砂質土層である。それらにはSB152といった平安時代の遺構が掘り込まれる。

以上のことからわかる土地利用状況の変遷を時代・時期順に述べていく。

まず古墳時代前期中葉にSB147の住居跡が構築される。B区SB144など周囲に同時期の住居跡があることからも、居住域が展開していたと言える。なお、それ以前のとくに弥生中期以前の遺構は、地山層形成時に営まれた可能性が高く、C区の調査ではその動向はわからなかった。

その後、古墳時代前期末になると、大規模な溝（SZ027下層溝）が掘り込まれる。SB147を損壊しており、その掘削面は地山層にまで達している。その溝の全容は不明であるが、わずかに緩やかな弧を描きながら南西から北東に向かって走っていたものと考えられる。同様の方向に走る溝は、「聖川堤防地点」で古墳時代大溝としてⅡ区SD3が確認されており、その関係性が留意される。B区で確認された古墳周溝の下には、SZ027下層溝は検出されなかったことから、SZ027下層溝は円を描かず走り、さらにその一部を使って古墳周溝が作られたと推定される。

古墳周溝は、その構築にあたってある程度は掘削を行なったと思われるが、その掘削は地山層にまでは達しておらず、SZ027下層溝覆土をその周溝底面としている。また一部SZ027下層溝覆土の上に盛土を施して墳丘を構築している。

その後、時代上のヒアタスはあるが、奈良時代以降は再び居住域になったと考えられ、周囲には当該期の住居跡が展開する。そして888年の仁和の洪水によるものと思われる洪水砂が堆積する。洪水砂はSZ027周溝覆土中さらにはSZ028覆土中にもレンズ状に堆積しており、周溝跡は平安時代に至っても溝状の地形を残していたものと考えられる。そしてこの溝は仁和の洪水以降、平安時代後半には完全に埋没するようである。

このように土地利用のあり方は一様ではなく、時代によって大きく変化していることがわかった。とくに古墳時代前期末の大溝構築は土地開発の大きな進展が予想される。想像をたくましくすれば、そこで育まれた労働編成をもとに中期以降、古墳造営が行なわれたと考えられる。古墳造営以前に土地開発を行なうことは各地でみられるが、本資料も古墳造営の背景を探るうえで重要なものとなろう。

3　奈良・平安時代の遺構と遺物

SB146（PL－39）

一辺3.2mをはかる方形の竪穴式住居跡である。貼床は確認されなかった。不整形な土坑が２基確認されたが、のちに根撹乱を受けていると思われ、本来の形状を留めていないであろう。カマドは北側調査壁内より構築材と思われる礫が出土しており、その位置から北カマドであると想定される。

遺物は須恵器・土師器を主体とする。出土量は少なくないものの、図化したものは限られた。

土師器の坏４点を図化した。１・２は体部側面に墨書を施しているが、文字は不明である。いずれも回転糸切りによって底部切り離しを行ない、１・２・３は内面黒色処理を施す。平均すると口径は12.5cm、底径は5.8cm内外、器高は4.5cm内外におさまる。また須恵器の大甕・横瓶が出土している。大甕の残存率は低いが、住居北側調査壁中より出土したためその多くは未検出であると思われる。

遺物等から奈良から平安時代にかかる時期の所産であると考えられる。

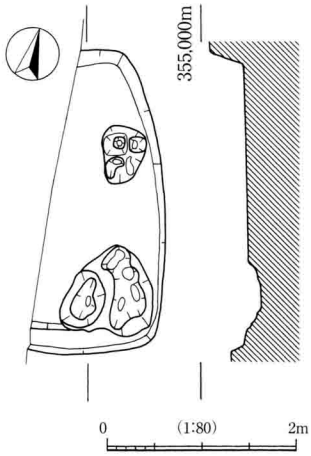


図268　SB146実測図

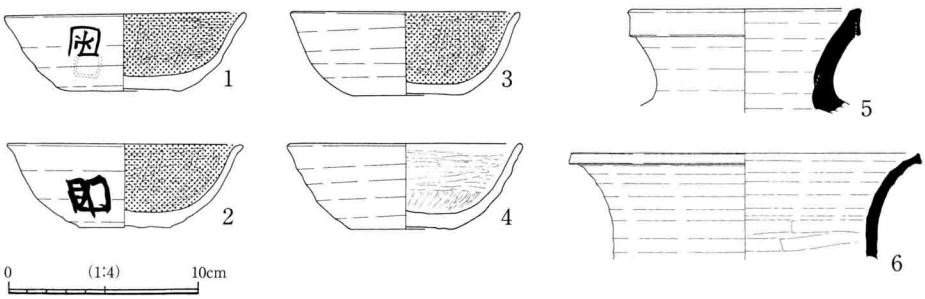


図269　SB146出土遺物実測図

SB148（PL－39、PL－C－１・A～D）

4.2×3.7mの方形の竪穴式住居跡である。住居東側中央にカマドを設置している。貼床を施しているが、床面では焼土が多く検出された。住居中央の掘り込みに伴う焼土を観察すると、床深く被熱を受けており、床面上で火を使用した可能性が指摘される。掘り込みの浅い不整形な土坑が散在するが、いずれもその性格は不明である。明確な柱穴は確認できなかった。

出土した遺物は、土師器・須恵器を主体とする。また床面直上から鹿角が出土している。須恵器には坏・蓋、土師器には坏・甕が認められる。

須恵器の蓋（１・２）は比較的高めの器高を有し、天井部は回転ヘラケズリを施す。１は扁平なつまみを有する。須恵器の坏は、無台のもの（３・４）と高台を付すもの（５）がある。３・４は、いずれも回転糸切りによる底部切り離しを行なう。完形の３は口径13.4cm・底径6.8cm・器高4.2cm、４は口径13.6cm（復元）・底径7.4cm（復元）・器高4.3cmを

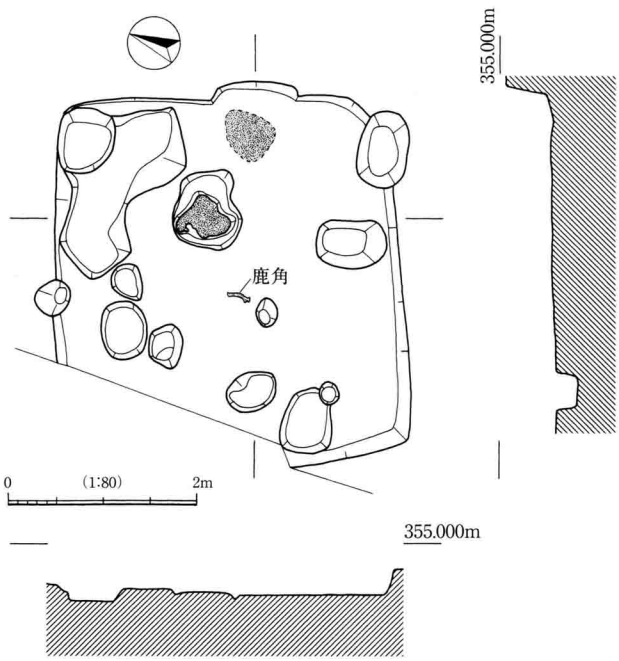


図270　SB148実測図

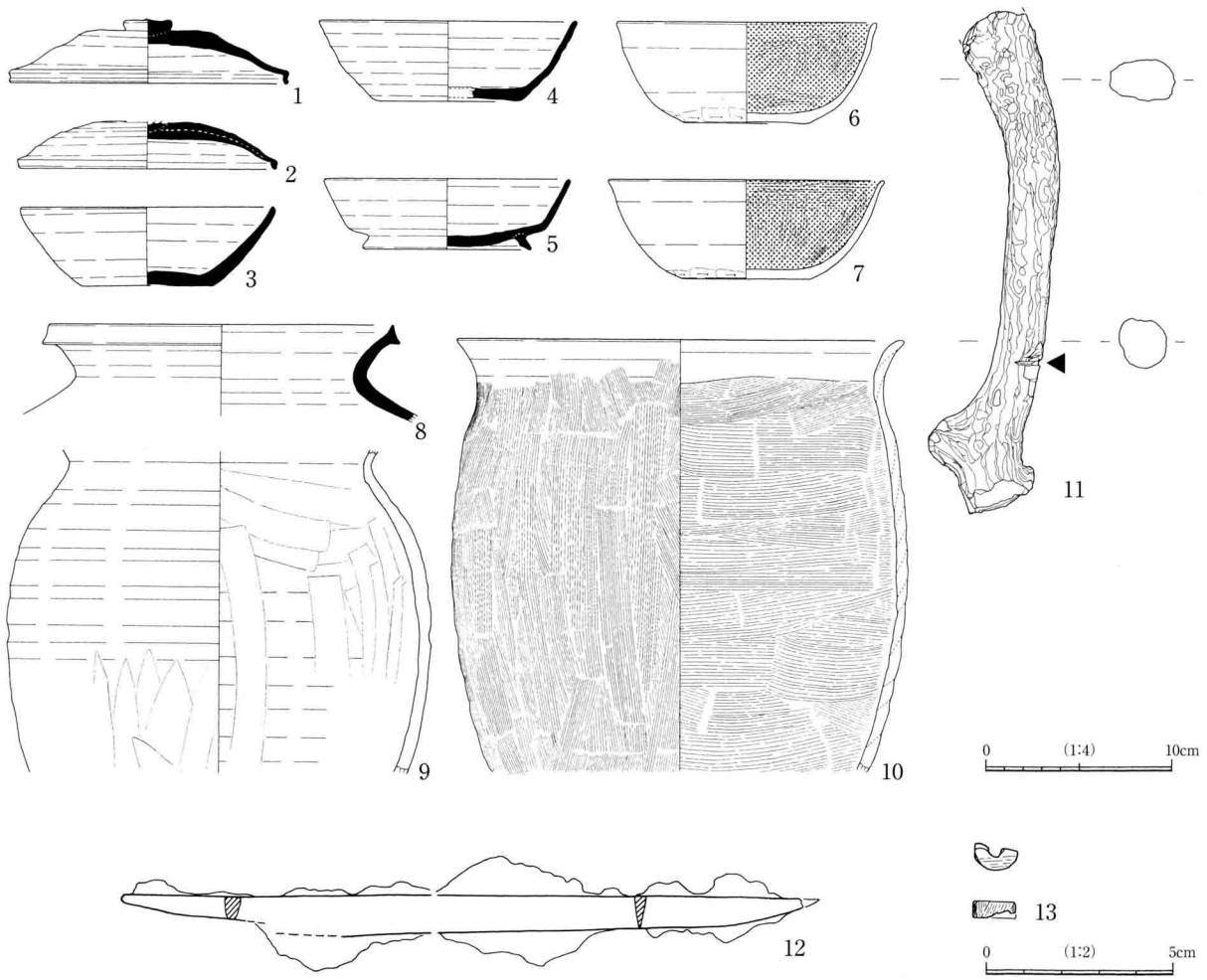


図271　SB148出土遺物実測図

測る。5は口径13.0cm・底径9.0cm・器高3.8cmである。須恵器甕（8）は中形のものと思われるが、その残存度は低い。土師器坏（6・7）は、いずれも内面黒色処理が施され、回転ヘラ切りによる底部切り離しを行なう。また体部下端、底部との境には横位ヘラケズリを施す。完形の6は、口径13.8cm・底径6.6cm・器高5.4cm、7は口径14.6cm（復元）・底径6.6cm（復元）・器高5.3cmを測る。土師器甕は、いずれも長胴形で、9はロクロ成形によるロクロ目を残し、胴部下半にはヘラケズリを施し、10は内外面ハケメ調整を施す。床面より出土した鹿角（11）は、下半部が残存しており支枝部分は切除されている。両端には鋭利な削痕がみられ、刀子等の金属器による加工が行なわれている。また、鋭利な金属器で施したと思われる刻みも一条観察される（矢印部分）。また先端部は一部黒変しており被熱を受けたものと思われる。刀子（12）は住居内土坑中より出土している。おそらく一個体であると推定されるが、接合せず全長は不明である。鹿角等の加工に用いられたものか。臼玉（13）は、滑石製で直径1.2cm、器高4.5cmを測る。上・下面には一方向の、側面には斜位・縦位の研磨を施す。整形・石材ともに精製の観は無い。また、その他牛馬の歯など数種の獣骨が出土している。このSB148は、床面に多量の焼土を有し、鹿角や獣骨が出土するなど他の住居とは様相を異にする。鹿角は多くの線刻・切込みを施すといった加工はなされず、儀器としての様相は薄い。一方で鹿角は現在でも民間療法の薬として用いられ、煎じて飲用されるようである。先端にみられる被熱の痕跡なども考慮すると、薬として加工された可能性も考えておいてもよいだろう。床面に見られる焼土は、その加工作業によるものかもしれない。奈良から平安時代にかかる時期の所産である。

SB149（PL－39）

規模不明の竪穴式住居跡である。カマドと床面のみが確認された。カマドは大きく損壊していたが、焼土とともに構築材と思われる礫が出土している。そのカマドの西側に貼床が広がっていることから東カマドであろう。床面の遺存度は悪く、その範囲は確定できなかった。覆土には洪水砂に由来すると思われる砂質土層が堆積しており、洪水によって大きく損壊したものと考えられる。

遺物は平安時代のものを主体としており、いずれもカマド周辺から出土している。遺物総量は多くないが、2と3は残存度が高い。

図化した遺物は、いずれも土師器坏である。1～3は回転糸切りによって底部切り離しを行なう。1は口径11.4cm・底径4.0cm・器高3.1cm、2は口径11.2cm・底径4.8cm・器高4.1cm、3は口径12.2cm・底径6.2cm・器高3.2cmを測る。4は高台が付く可能性がある。なおカマドより粒状鉄滓が1点出土している

平安時代（後半）に帰属すると考えられる。

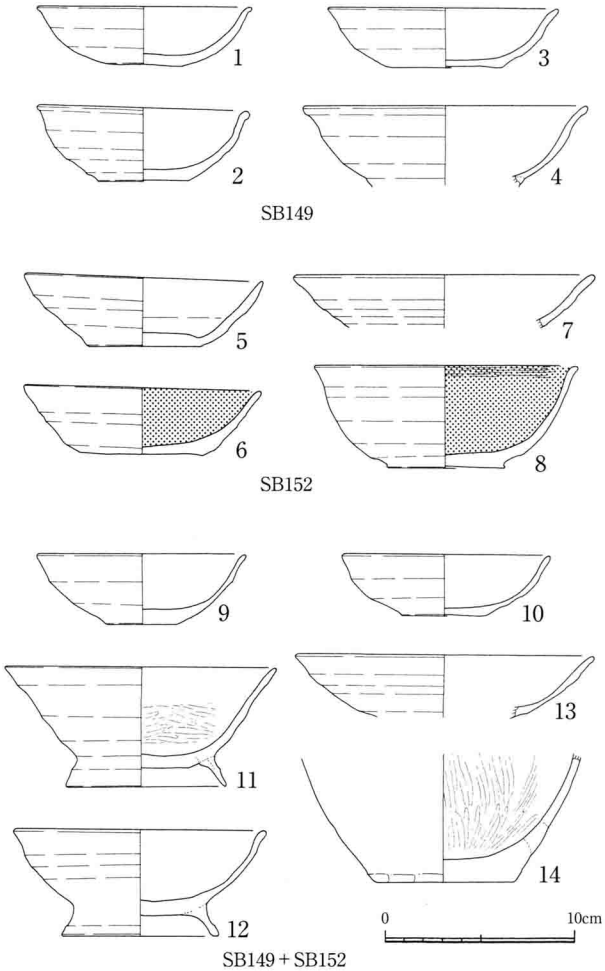


図272　SB149・SB152出土遺物実測図

SB152

規模不明の竪穴式住居跡である。当初、遺構の大半が調査区法面下にあったため、明確な遺構検出に及んでいなかった。しかし、SZ027掘削中に平安時代の土師器が出土し、その周囲で床面と思われる硬化面を確認したため、本遺構の調査に至った。そのため一部壁面を検出することができなかったが、床面および住居南西隅壁面を確認することが出来た。床面は硬化面をなしているが堅緻ではない。ただし、住居覆土中には炭化物を含んでおり、床面とは明確に区別される。

住居中央に調査区壁があたったためそこで遺構の層序関係を把握した（図273参照）。C区では仁和の洪水砂層は地点によって堆積状況が異なっているため容易に確定は出来なかった。しかしSZ027覆土上層に堆積した砂層は、それに由来する砂質土層の堆積の厚さからも仁和の洪水砂であろうと思われる。SB152はその仁和の洪水砂に由来すると考えられる砂質土層（「仁和の洪水」との時期的関係は検討の余地がある）を掘り込んで構築されている。

遺物は平安期のものを主体とし、ほぼ完形の状態で床面上より出土している。遺物総量は多くないが、まとまって平安時代の土師器坏が出土している。図化した坏は4点あり、6・8は内面黒色処理を施す。5・7・8は回転糸切りによって、6は回転ヘラ切りによって底部切り離しを行なう。5は口径12.6cm・底径6.1cm・器高3.9cm、6は口径12.6cm（復元）・底径6.7cm・器高3.7cm、7は口径16.0cm（復元）、8は口径14.0cm（復元）・底径6.3cm・器高5.4cmを測る。いずれもロクロ成形だが、5は1周ごとに静止痕を有しており、回転が連続していないようである。

平安時代後半の所産であると考えられる。

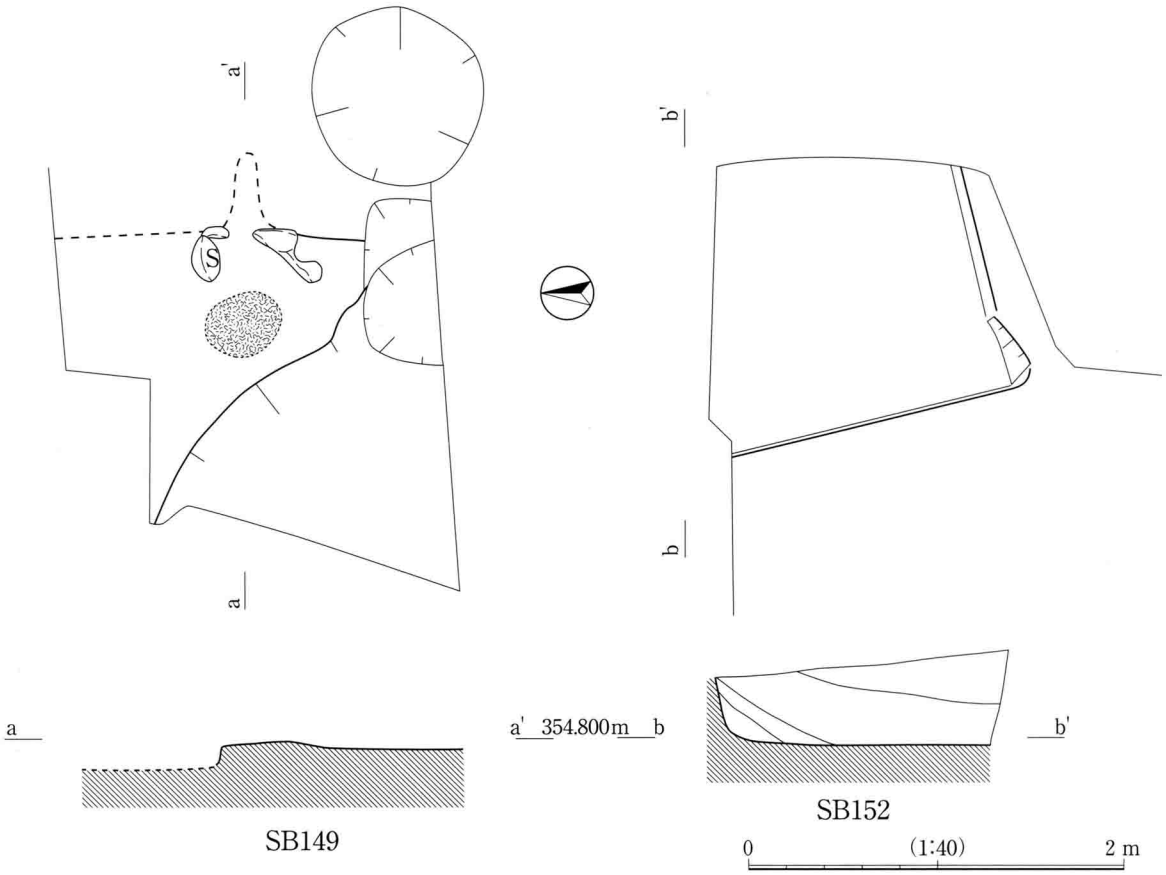


図273　SB149・SB152実測図

SB149＋SB152

SB149とSB152は直線距離にしておおよそ11m離れており、決して近接する遺構ではないが、両者の遺構から出土した土器片どうし接合するものが多く認められた。出土地点によって破片の変色具合が異なるものもあったため、取り上げ時における注記ミスではないと思われる。

接合した土器には土師器の坏・甕がある。土師器坏には平底のもの（9・10）と高台を付すもの（11・12）がある。いずれも回転糸切りによる底部切り離しを行ない、11はそののちナデ調整を施してから高台を付す。9は口径11.1cm・底径3.8cm・器高3.8cm、10は口径11.0cm・底径4.5cm・器高3.3cm、11は口径14.3cm・高台径8.5cm・器高6.5cm12は口径13.4cm・高台径8.3cm・器高5.7cmを測る。甕（14）は長胴甕の底部であろう。外面は縦位ナデ調整、内面は縦位ミガキ調整を施す。いずれも平安時代（後半）の所産と考えられ、SB149・SB152出土土器と大きく時期を違わない。

このSB149・SB152は近接した遺構ではないが、両者ともに遺構の覆土には洪水に由来すると思われる砂質土層が堆積しており、またその住居壁面も明確でないことから洪水の影響を受けたものと考えられる。それら土器の混在は洪水によるものと思われ、その帰属遺構については検討の余地がある。

先述したようにSB152は仁和の洪水砂より上層に構築されており、また両者の床面はおおよそ標高354.800mと共通しており、他の遺構の床面レベルよりも高い位置にある。

つまりSB149とSB152には同時期に並存していた可能性があるが、「仁和の洪水」の後も住居を構築し続けたものの数度の洪水によって流失してしまった状況が考えられる。

SB150（PL－39、PL－C－１・A～D）

4.20×2.60mをはかる方形の竪穴式住居跡である。住居の形態・規模については遺構が密集しているため不明瞭な部分が多い。住居の南東隅は砂層（仁和の洪水砂に由来するものか）によって切られている。カマドを住居北側中央に設けているが、ほとんど残存していない。貼床を施しているが、その大半は土坑などによって損壊しており、その広がりを正確に検出することはできなかった。各所で不整形な土坑が認められるが、いずれも掘り込みが浅く、その性格は不明である。礫が３石、まとまって床面上に配されており、その上には土師器坏（７）が出土しているが、その性格については不明である。SE042は近世のものであり、全く時期を異にする。

遺物は土師器・須恵器を主体とし、カマド周辺で多くの土器が出土している。出土総量は非常に多いものの、全体的に残存度は高くなく、図化した土器は限られた。図化した土器には、須恵器坏・瓶類・甕、土師器坏・甕、灰釉陶器がある。

須恵器の坏は３点ある。１は非常に遺存度が低い。受部は沈線状の鋭い屈曲をなし、底部はヘラケズリを施している可能性がある。口径は8.3cm（復元）を測る。２は回転糸切りによる底部切り離しを行なう。底には草本系植物の圧痕を多く残す。口径12.8cm（復元）・底径5.8cm（復元）・器高3.4cmを測る。SZ028出土土器片と接合する。３は高台を付す坏で、体部から口縁にかけてあまり大きくは開かない。内面の底部と体部との境には沈線状の鋭い屈曲をなす。口径12.6cm（復元）・底径9.1cm・器高3.8cmを測る。須恵器にはその他、瓶類・甕があり、甕（４）はSB151出土土器片と接合する。

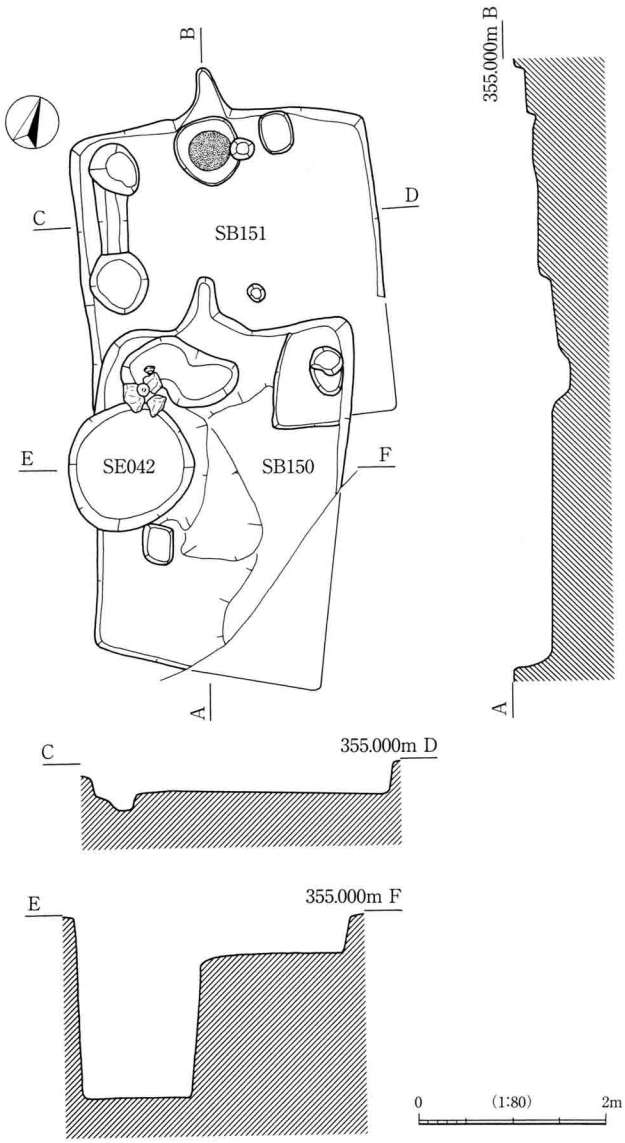


図274　SB150・SB151実測図

土師器坏（６）は、内面黒色処理を施す。回転ヘラ切りによる底部切り離しを行ない、体部下端には回転ヘラケズリをめぐらす。口径13.1cm（復元）・底径6.0cm（復元）・器高5.0cmを測る。灰釉陶器（７）は、北側壁際より出土している。口径15.0cm・器高5.0cm・底径7.6cmを測る。灰釉は口縁内外面に施される。また器種不明であるが、外面に叩き目のある土器片（９）が出土している。全体的に薄手で内面には黒色処理が施される。

10は金属器で刀子の可能性が高い。詳細な形状は不明である。また図化には及んでいないが、鉄片が１点出土している（鎌か）。

11は鹿角製の骨角器である。完存しないが、側面に幅１mm前後の切込みを幾条も施している。切込みを施している面は、摩擦によるものであろうか、平滑である。ササラか。

奈良から平安時代にかかる時期の住居跡と考えられる。

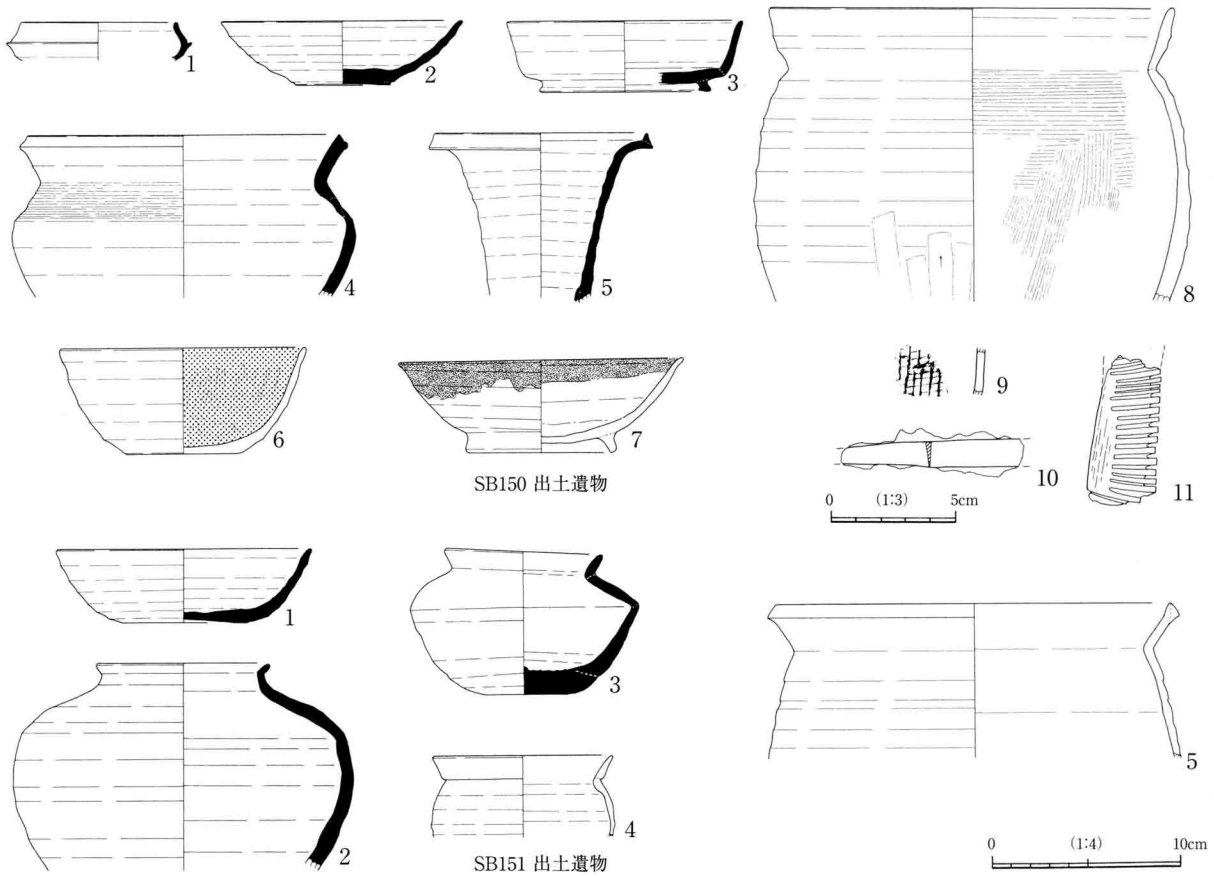


図275　SB150・SB151出土遺物実測図

SB151（PL－39）

3.8×3.2mをはかる方形の竪穴式住居跡である。南側をSB150によって切られている。遺構が密集しているためか住居の形態・規模については不明瞭な箇所が多かった。とくに住居南東隅については明確に検出できなかった。カマドを住居北側中央に設けているが、ほとんど残存していない。また貼床を施しているが、その大半は土坑などによって損壊しており、その広がりを正確に検出することはできなかった。住居内東側には円形の２つのピット間を結ぶ溝が検出されたが、とくに遺物も包含しておらず、その性格については不明である。床面の下には、焼土・炭化物・土器片を包含しており、建て直し等の可能性が考えられたが、とくに硬化面などは確認されなかった。

遺物は土師器・須恵器を主体とする。ただし床上だけでなく、床下からも多くの土器が出土している。図化した遺物には、須恵器の坏・壷および土師器の甕がある。須恵器坏（１）は体部と底部との境が明確でなく、底部は回転糸切りによって底部切り離しを行なう。口径13.5cm・底径6.6cm・器高3.9cmを測る。須恵器の短頸壷は中形のもの（２）と小形のもの（３）がある。その他、土師器の甕は、小形（４）と大形（５）のものがある。いずれもロクロ成形で体部外面には水挽き痕を残す。

SB150・SB151両者の出土遺物に目立った時期差はなく、遺構の切り合い関係からSB151→SB150の順に構築されたと考えられる。なおSB151先述のように床下には焼土・炭化物・土器片を包含しているが、その性格およびSB150との時期的関係などその詳細についてはわからなかった。

SZ028周溝覆土上層出土の平安時代遺物（PL－A～D）

SZ028周溝上層には洪水砂が堆積しており、平安時代所産の土器を包含していた。洪水砂はおおよそ周溝に沿って堆積しており、平安時代に至っても溝状の落ち込みをなしていたことが窺える。平安時代に限って言えば、SB150・SB151ののちに洪水砂が堆積し、その後SB149が構築された可能性が考えられる（図267SZ028南壁セクションの第３層はSB149の覆土か）。

出土した遺物には、土師器の坏が多いが、緑釉陶器（１）や灰釉陶器（２・３）も含まれている。また馬の左下顎骨（８）が出土している。多くの遺物が周溝南東側より出土しており、その混入経緯が留意される。とくに緑釉陶器の傍からは馬の下顎骨が出土しており、両者の関係性が考慮される。周囲には平面方形の遺構プランが検出された（SX012）が、その遺構の性格および遺物との関連については分からなかった。

緑釉陶器（１）は、濃緑色の緑釉を坏部内面および外面全面に施す。底径は6.4cmをはかる。灰釉陶器は２点あり、皿（２）と椀（３）がある。２は粘土貼付による短小な高台を付し、灰釉は口縁内外面のみに施される。口径12.0cm（復元）・器高2.5cm・底径5.4cmを測る。３は口縁内面にのみ灰釉が施される。残存率は高くなく、口径17.4cm（復元）に復元される。土師器坏には無台のものと高台を付すものがある。無台のもの（４・５）はいずれもロクロ成形ではあるが、水挽き痕は顕著ではなく、回転も連続せず一周ごとに静止痕を残す。底部は回転糸切りによって切り離しを行なう。４は口径11.4cm・器高3.4cm・底径4.6cmを測る。５は口径12.9cm・器高5.2cm・底径5.7cmを測る。６・７は高めの高台を付しており、とくに７の高台は外反して端部を丸くおさめる。いずれも内面は黒色を帯びている。６は底径8.0cm、７は底径9.3cmを測る。

おおよそSB149・SB152と同様の土器様相を示しており、平安時代後半に帰属する土器群である。これらの状況から「仁和の洪水」以降間もなく集落を営もうとしていたことがわかる。しかし、その規模は徐々に縮小傾向にあったものと推定される。

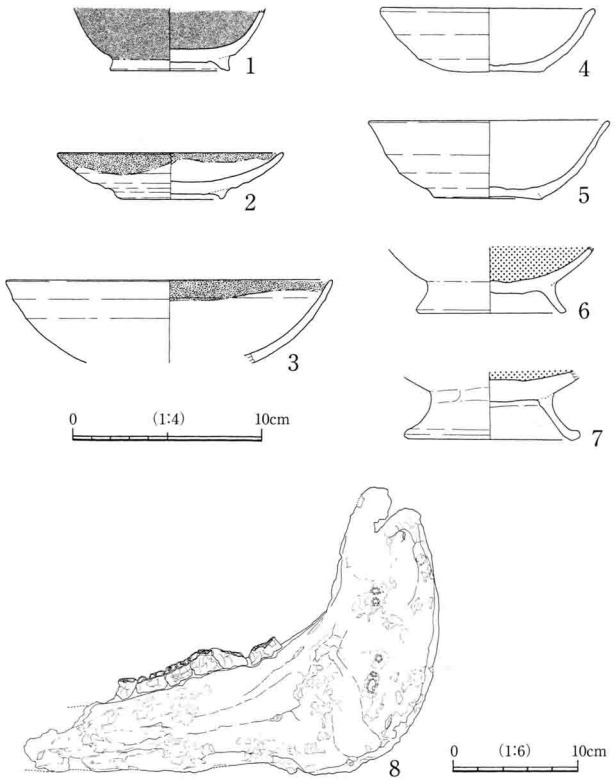


図276　SZ028上層出土遺物実測図

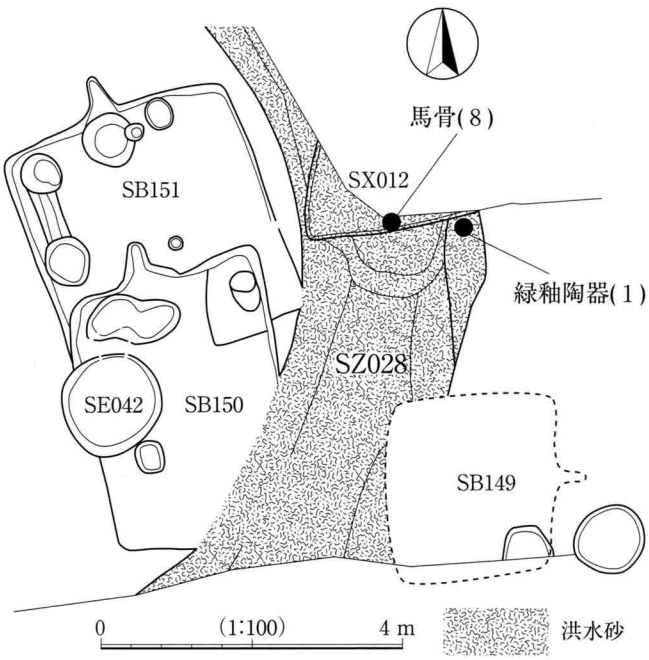


図277　SZ028周辺状況図

4　中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構・遺物は稀少であった。遺構は近世の井戸跡と思われるSE042だけである。

調査区外ではあるが、堤防方面に石塔が2基安置されていた。本来は約10m南側にあったようだが、堤防の改修に伴って移築されたようである。今回、側道の建設によって現地保存が不可能となり移築されることになったため、記録保存を行なうこととした（現在は、橋の側に移築されている）。2基いずれも宝筐印塔の部材をメインとしているが、本来のセット関係は有していない。

1は東側に位置していたもので、3つの部材からなっている。最上部は宝筐印塔の相輪である。高さ25.5cm・最台径11.0cmを測る。断面は隅丸方形で正面観をもつ。その下には宝筐印塔の笠がくる。頂部にホゾ穴を有し、相輪のホゾとあう。相輪と笠は一体のものであると思われる。風化が著しいため形状や意匠の詳細については不明瞭な部分がある。頂部幅8.8cm、高さ13.0cm、底部幅15.0cmを測る。笠は階段状に刻まれず、隅飾りは外方へ開く。塔身にあたる部位には、正面一面のみ枠が形どられ半肉彫りの地蔵が彫られる。幅11.0cm・高さ17.0cmの長方形を呈する。風化が激しいため詳細な意匠、銘の有無はわからなかった。上部の宝筐印塔とはセットをなさないようである。さらに下に別の部材があるようだが、露出しておらず、形状等は不明である。

2は2つの部材からなっている。上部は宝筐印塔の相輪である。高さ24.0cm・最大幅9.0cmを測る。断面は隅丸方形を呈し、正面観をもつ。ホゾは無い。下部は正面一面のみ枠が形どられる。その下半は地中に埋もれており、意匠・銘等の詳細は不明である。幅11.5cmを測る。

周辺には字「五倫」「堂前」といった地籍があり、それらとの関連が考慮される。

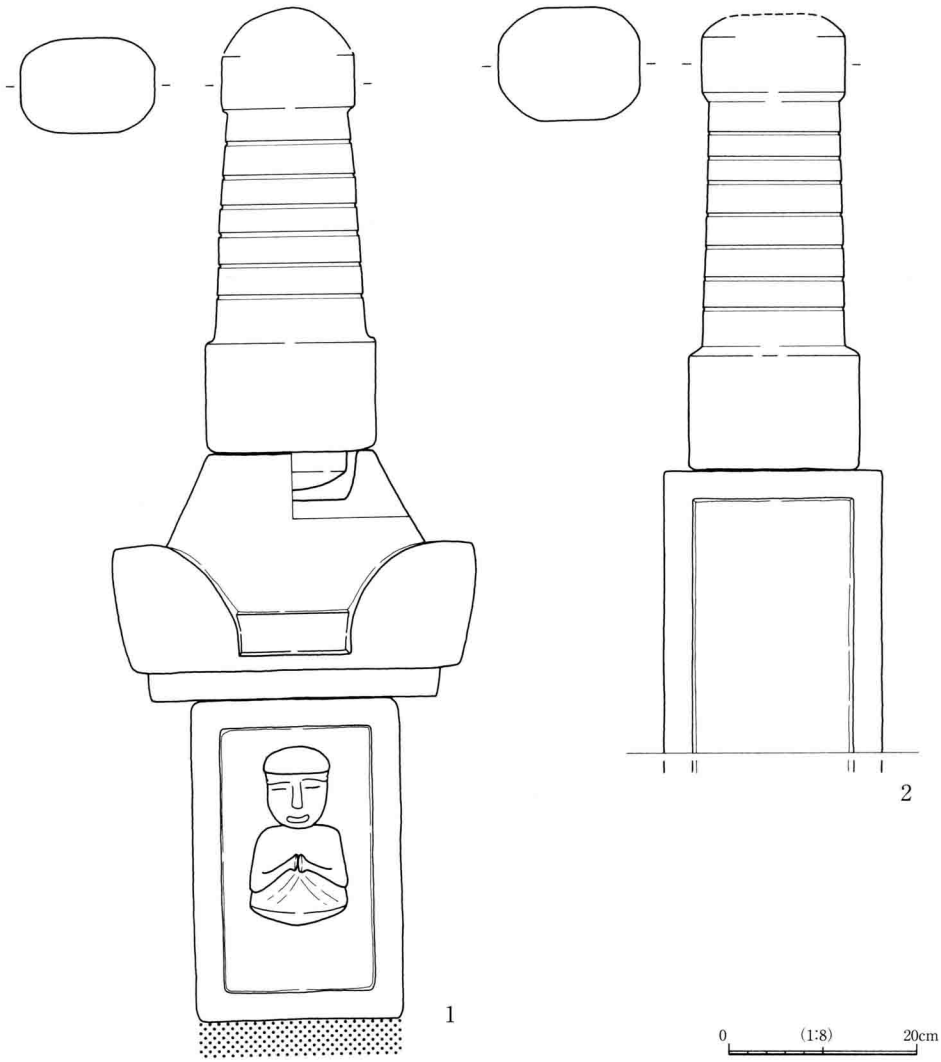


図278　C区南側所在石造物

XI　D1区の調査

1　D1区の概要

D区は、D1区・D2区・D3区に分割して調査を実施した。D1区ではC区と似た土層の堆積状況が確認され、ここでも顕著な仁和の洪水砂はみられなかった。またD1区北側を掘削中に比較的浅いレベルで湧水が認められた。

調査中、台風による増水で地下水位が上昇し、多くの住居跡で湧水が起こった。しかし、弥生時代後期の住居跡SB159だけは、他の住居跡より床面レベルが高く、湧水は起きなかった。当然、水位・水脈は時代によって異なるであろうが、その相違は住居使用の季節性もしくはその時代別変遷といった低地域集落の実態を考えるうえで参考になろう。

調査された遺構には、弥生時代、古墳時代、平安時代のものがあるが、検出レベルに大きな差は認められなかった。遺構の詳細をみると、弥生後期の住居跡、古墳時代前期の住居跡、平安時代(前半)の住居跡がみられ、そのほか時期不明の土坑、溝が検出された。

遺構は、調査区南側に集中しており、湧水のみられた北側には少なかった。全体的に北側へ向かって傾斜しているようである。

中・近世　中近世の遺構は確認されなかった。おそらくC区同様、耕作土・客土等によって撹乱を受けたものと考えられ、検出に至らなかった。井戸跡も確認されていない。唯一SD029上層より石臼片が出土しているが、帰属する遺構は不明である。A・B区等で見られた方形ピット群は、ほとんど確認されず調査対象としなかった。

奈良・平安時代　奈良・平安時代の遺構には、住居跡3棟・掘立柱建物跡1棟・溝1条・土坑1基がある。住居跡・掘立柱建物跡はいずれも調査区南側に集中している。調査区北側には平面方形の土坑SK213とそれに付随する溝SD029が認められた。掘削中には比較的浅い所でも地下水がしみ出してきており、本遺構

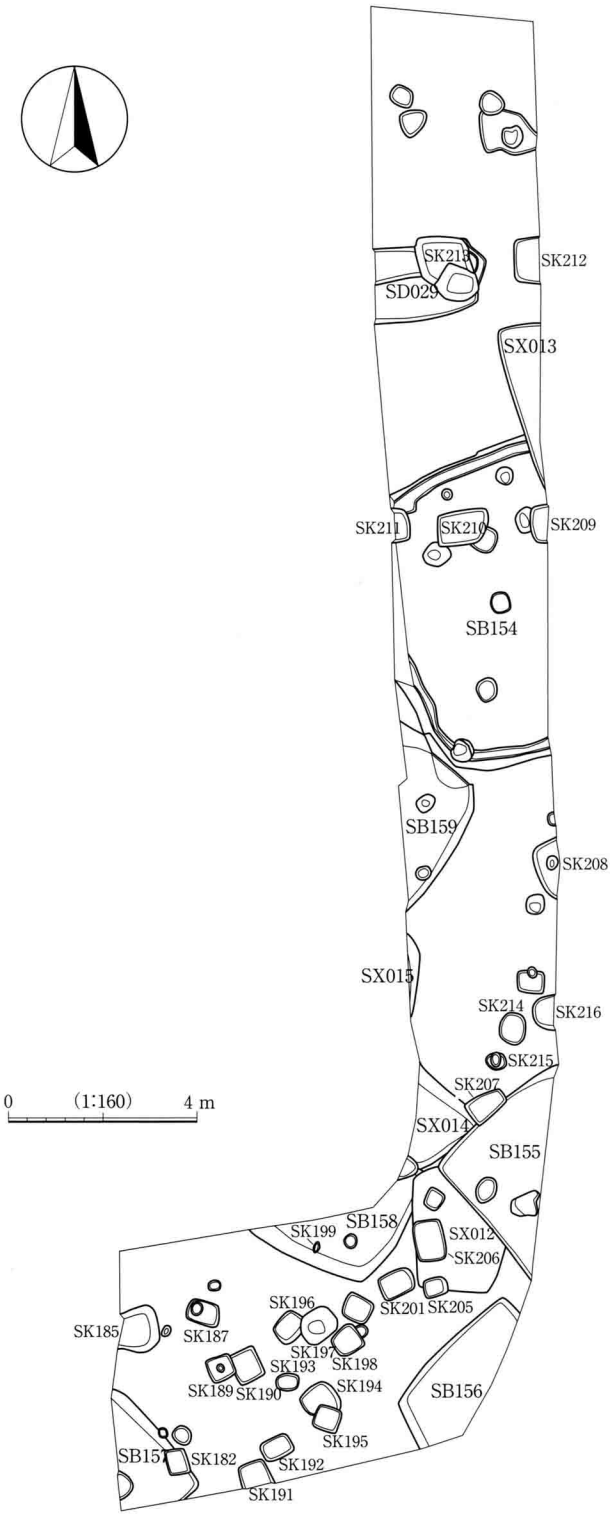


図279　D1区遺構分布図

とこの水脈が関係している可能性は十分考えられる。ただし出土遺物は無く、土坑の東から土師器甕（1）が1点出土しているだけである。

弥生時代後期の住居跡SB159の上層には調査区壁より煙道の先端部が確認され、調査区外、西側にカマドを有する住居跡が展開するものと考えられる。C区では調査区北側にまで広く住居跡が展開するのに対し、D1区では南側に集中するということは、集落域を把握するうえで重要な資料となる。SB155・SB156は、出土遺物量こそ多いものの、その遺存状態は悪く、住居廃棄のあり方が注目される（後述）。

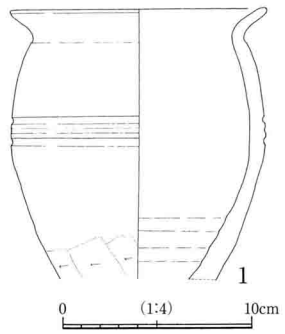


図280　SK213出土遺物実測図

掘立柱建物跡は、調査区南端部の土坑群から想定した。SK187・SK189では方形の掘り込みの中心に円形の柱痕を残している。土坑は整然と並んでおらず、どのような構造の建物であったのか、もしくは複数の建物跡によるものなのか明らかにできなかった。遺物の出土状況は、遺構の帰属時期を示すような良好なものではなかったが、検出レベルから本遺構は奈良・平安時代の所産であろうと考えた。なお、調査区北側にSK209・SK210・SK211と直列する方形土坑が確認され、検出レベルより奈良・平安時代に帰属する可能性が考えられる。しかし、柱痕は認められず、土坑底も不明瞭であった。

弥生時代後期～古墳時代前期　弥生時代後期・箱清水式期から古墳時代前期にかけての遺構には、住居跡２棟・土坑１基がある。SB154は遺存状態の良い住居跡であるが、これまでの調査成果とは異なり、現聖川より若干離れた位置にある。微細な比高差ではあるが、D1区西側には聖川沿いから続く低地域が谷状に入り込んでおり、旧地形と集落域との関係が注目される。SB158は、調査区南側に位置し有段口縁壷が出土しているが、住居跡としての様相は薄く、より広域な調査を必要とする。

箱清水式期の住居跡はなく、土坑が１基（SK208）確認され、その覆土中より１個体に復元される甕が出土している（図281）。

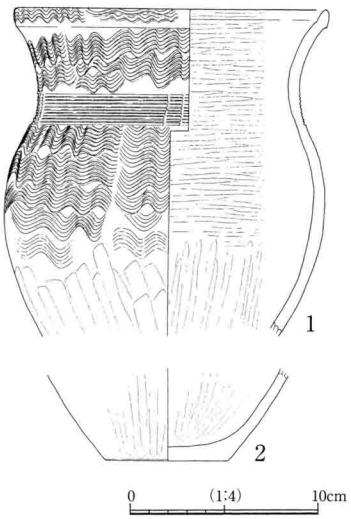


図281　SK208出土遺物実測図

弥生時代　弥生時代後期・吉田式の住居跡が１棟（SB159）検出された。壷２点が床面直上より出土しており、良好な出土状況を呈しているが、本住居跡の検出レベルは他の住居跡より高い。また、図282－２はSB158覆土出土の吉田式の土器片である。

弥生時代中期以前の遺跡は確認されていないが、SK193覆土より弥生時代中期・栗林式土器が出土している（図282－１）。壷の体部片と思われ、外面は沈線文によって区画し、縄文を充填する。

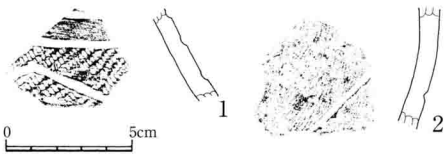


図282　D1区出土弥生土器実測図

遺構番号	形態規模(m)	付属施設				重複関係		土器類		石製品土製品玉類	鉄製品青銅製品	報告頁	時期		備考
		床面	炉・カマド	柱穴	その他	先	後	実測数	破片重量(kg)				時代	細別	
SB154	方形 6.40	貼床	炉	3		SB159	SK209 SK210 SK211 SX013	8	7.295			255	古墳	前期	
SB155	方形	一部貼床	不明					4	2.055			257	奈良～平安		
SB156	方形 3.50	一部貼床	不明					7	3.61			257	奈良～平安		
SB157	方形	貼床	不明					2	0.705			258	不明		
SB158	方形 2.80	地山	不明					2	2.54			256	古墳	前期	
SB159	隅丸方形	貼床	不明				SB154	3	3.43			254	弥生	後期	
SD029	幅 1.60	平坦			SK213			0	0				平安？		
SK182	方形 0.70×0.50	平坦						0	0.01						
SK185	不整方形 1.0	平坦						0	0.16						
SK187	方形 0.70×0.50	柱穴		1				0	0.11						
SK189	方形 0.55×0.55	柱穴		1				0	0.02						
SK190	方形 0.70×0.65	平坦						0	0.08						
SK191	方形 0.70	平坦						0	0.003						
SK192	方形 0.70×0.50	平坦						0	0.02						
SK193	円形 0.25	平坦						1	0.01						
SK194	不整方形 0.80	平坦						0	0.075						
SK195	方形 0.50	平坦						0	0						
SK196	方形 0.70×0.55	平坦						0	0.11						
SK197	方形 0.80×0.70	柱穴						0	0.07						
SK198	方形 0.60×0.60	平坦						0	0.09						
SK199	方形 0.50×0.40	平坦						0	0						
SK201	方形 0.75×0.55	平坦						0	0.002						
SK203	円形	平坦						0	0.09						
SK204	円形	平坦						0	0.02						
SK205	円形 0.45	平坦						0	0						
SK206	方形 0.90×0.65	平坦						0	0.04						
SK207	方形 0.80×0.55	平坦						0	0.045						
SK208	円形?	円形ピット						1	0.635				弥生	後期	
SK209	方形 0.80×0.80	不明瞭				SB154		0	0.17						
SK210	方形 1.00×0.75	不明瞭				SB154		0	0.17						
SK211	方形 0.75	不明瞭				SB154		0	0.13						
SK212	方形	平坦						0	0.002						
SK213	不整方形 1.10×1.00	不整形			SD029			1	0.405				平安		
SK214	楕円形	平坦						0	0.01						
SK215	円形 0.75	円形ピット						0	0.01						
SK216	方形 2.60×2.00	平坦						0	0						
SX012	方形	平坦						0	0.74						
SX013	方形	平坦				SB154		0	0.15						
SX014	不整方形	平坦						0	0.04						
SX015	楕円形 0.50×0.40	平坦						0	0.015						

表 18　D1 区検出遺構一覧表

2　検出された遺構と出土遺物

1　弥生時代後期の遺構と遺物

SB159（PL－41）

平面方形を呈する竪穴式住居跡である。古墳時代前期に位置づけられるSB154（後述）に切られているが、その構築面は本住居跡の方が上位に位置する。床面は地山を整地して構築し、堅緻な面をなしている。柱穴と思われるピットを１基確認した。炉およびそれに伴う焼土、炭等は確認されなかった。

遺物は、弥生後期・吉田式土器が床面および壁際においてまとまって出土した。１は肩部に櫛描きによる横線文を施し、弥生後期・吉田式である可能性が高い。残存度が低いため文様構成は把握できなかった。２は肩部に櫛描きによる横線文が施された後、２条一単位の縦位線刻を４単位配する。２条一単位の線刻は鋭利な金属器で施されたと想定され、その間は赤彩される。器面には、アワかヒエの圧痕と思われる小孔が観察される。蓋（３）が１点出土しており、外面には穿孔を施しているが、貫通していない。

報告した土器は限られたが、住居跡の大半が調査区外にあることを鑑みると、良好な依存状況を示す吉田式期の住居跡であるといえよう。

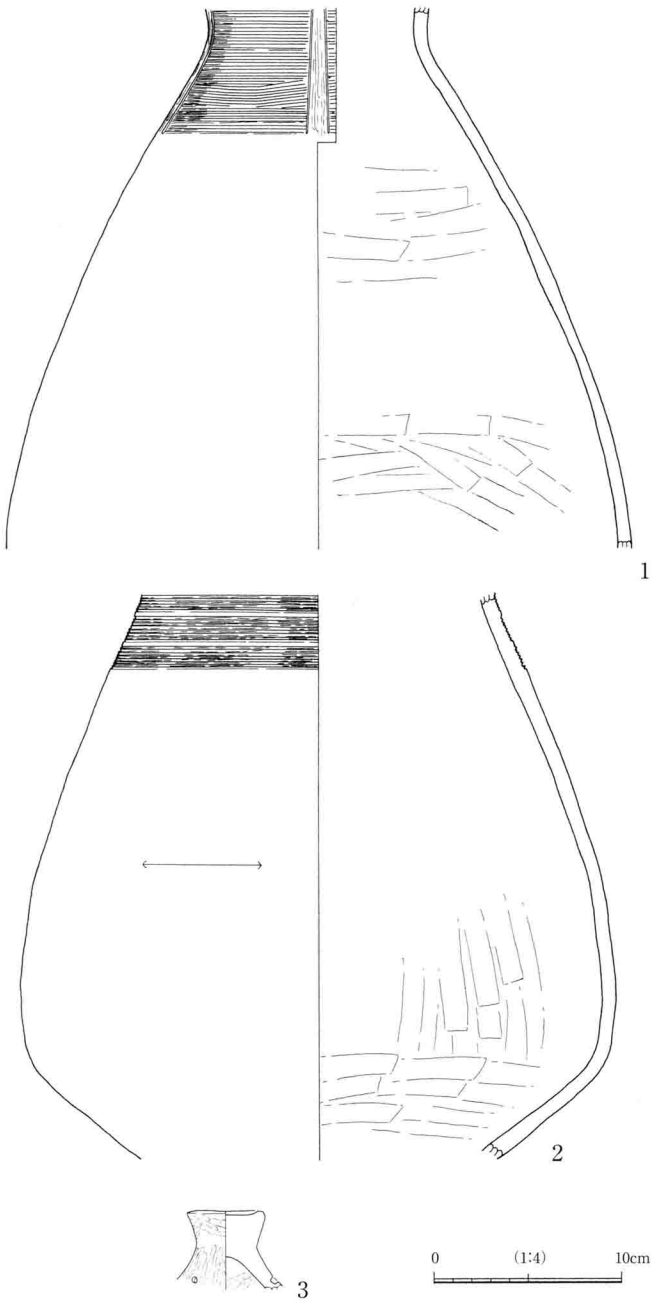


図283　SB159出土遺物実測図

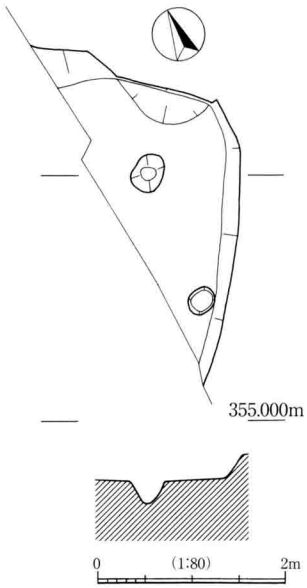


図284　SB159実測図

2　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物

SB154（PL－40）

長軸を南北にもち一辺6.4mをはかる方形の竪穴式住居跡である。床には貼床を施しており、3基の柱穴が確認された。柱穴は東西間より南北間方が大きくあいており、南北に長軸をもつ長方形の住居形態が想定される。炉を住居内北側に設けており、その周囲には炭が広がっている。側壁内側には壁板を設置したと考えられる溝がめぐっている。壁際には黒色粘土層が堆積しており、壁板の痕跡である可能性がある。住居西側では、方形に貼床の無い部分があり、別の遺構によって損壊したものと考えられるが、その詳細を把握するまでには至らなかった。貼床下は地山であり、とくに先行する遺構は存在しないようである。

遺物は、炉周辺でまとまって出土した。おおよそ古墳時代前期の所産である。

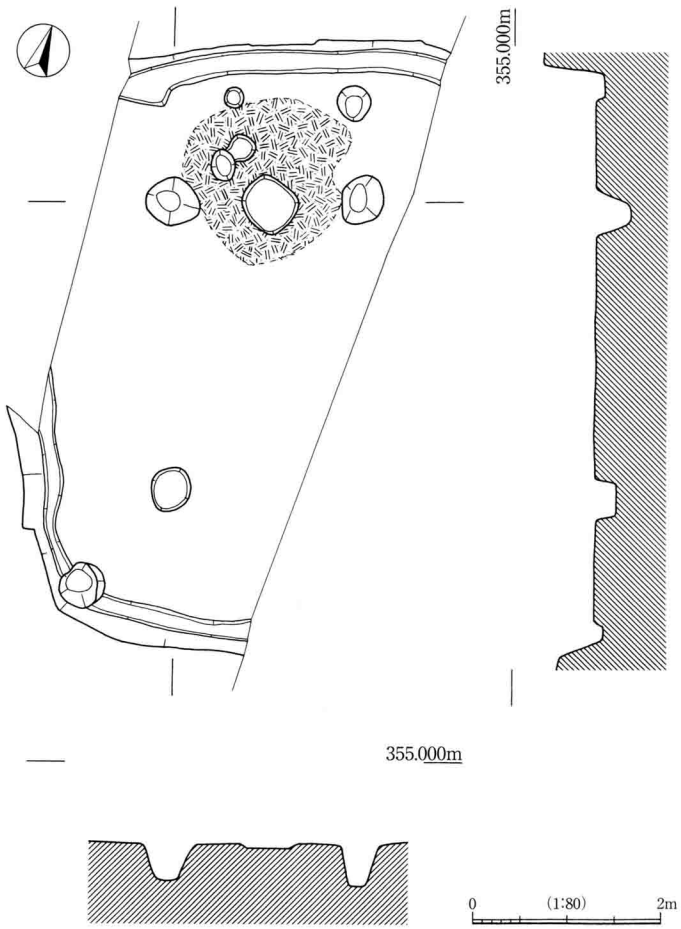


図285　SB154実測図

1は、炉南東側より出土している。正面円形の体部を有する中形の単口縁甕である。底部は輪台状に成形され、口縁部は内削ぎ状になる。胴部中位外面にはススが付着する。S字甕の肩部片（8）は、羽状のハケメののちに横位ハケメが一帯施される。横位ハケメは鮮明ではない。内面はナデ調整。器面はにぶい赤褐色を呈する。

直口縁甕が2点確認される。3は、外面ハケメ調整を基調とし、球形の体部が想定される。一方5は、外面ミガキ調整を基調とし、長胴気味の体部が想定される。扁平な体部を有する4は、外面ハケメ調整を基調とし、下半にはナデおよびまばらなミガキ調整を施す。底部は輪台状をなさず、一枚の粘土板で成形され、器壁は薄い。

小形高坏（6）は、炉北側より出土している。椀形の坏部を有し、赤彩される。脚部は大きく欠損しているが、残存箇所から判断して、開脚する脚部が想定される。

鉢（7）は、体部高と比して口縁部が大きく開く浅鉢である。底部は輪台状に成形される。また底部にはアワもしくはヒエかと思われる粒状の圧痕が観察される。

1のように底部を輪台状にする技法は、箱清水式には見られないもので新しい要素が看取されるが、横位ハケメを施すS字甕（8）や6のような高坏を伴うことから古墳時代前期前半に位置づけられよう。

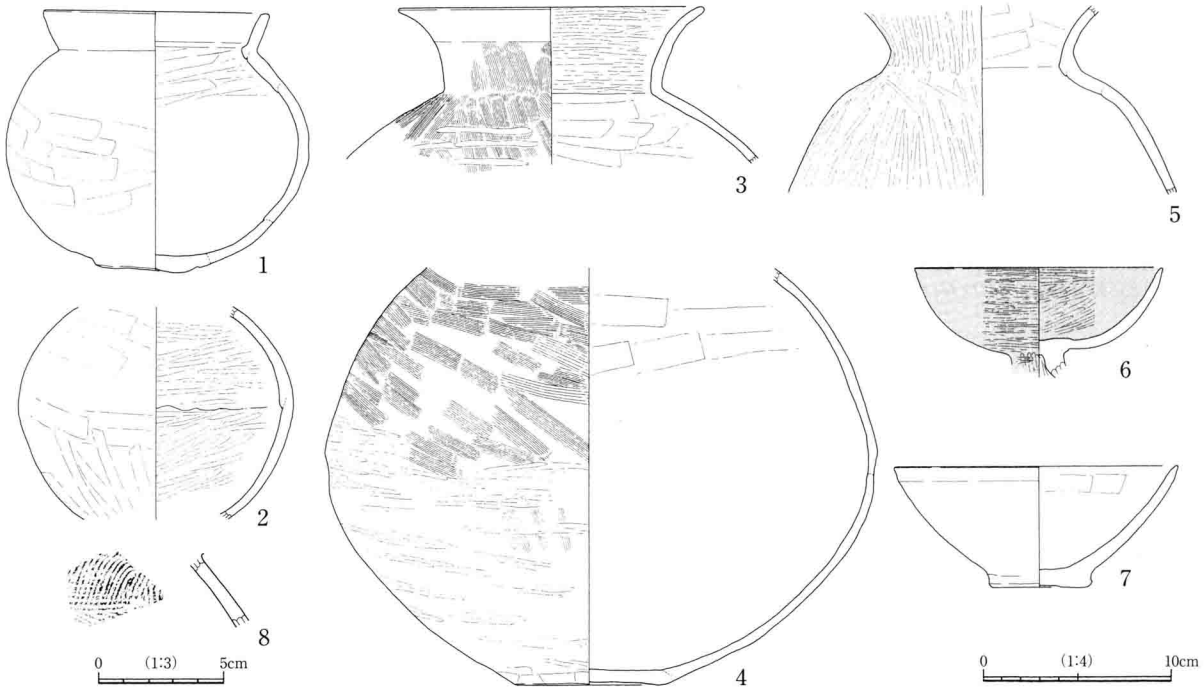


図286　SB154出土遺物実測図

SB158（PL－40、PL－D－1）

平面方形を呈する竪穴状遺構である。明確な壁面、床は確認されなかった。炭の有無といった覆土の目安となるものも無かったため、土の硬軟によって遺構の掘削を行なった。床面は地山を整地して構築しているが、とくに堅緻な面はなしていない。柱穴、炉および焼土、炭等は確認されなかった。遺物は、弥生後期・箱清水式土器が認められたが、その残存度の低さからも本遺構に帰属する可能性は低いと思われる。東壁際より有段口縁壷（1）がほぼ完形で出土した。最大径を胴部上半にもち、肩が強く張る。頸部は外反しながら立ち上がり、受け部・口縁屈曲部はシャープな屈曲をなす。底部は体部よりわずかに突出し平底をなすが、安定せず一部は摩滅している。また底部は接合し、完存するが、打ち欠いたと思われる痕跡を残す。

遺構表示はSB（住居跡）としているが、遺構の大半は調査区外にあり、その性格については検討の余地を残している。遺構南西隅に調査区壁に沿ってトレンチを入れたところ、地山が南西方向すなわち遺構の外側に向かって落ち込んでいたことを付記しておく。他に共伴する遺物がないため、時期比定は困難であるが、最大径を胴部上半にもつことなどからおおよそ古墳時代前期の所産であると考えられる。

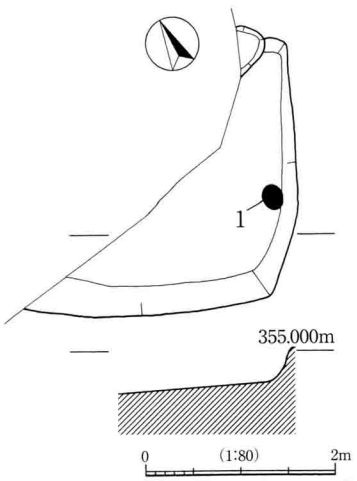


図287　SB158実測図

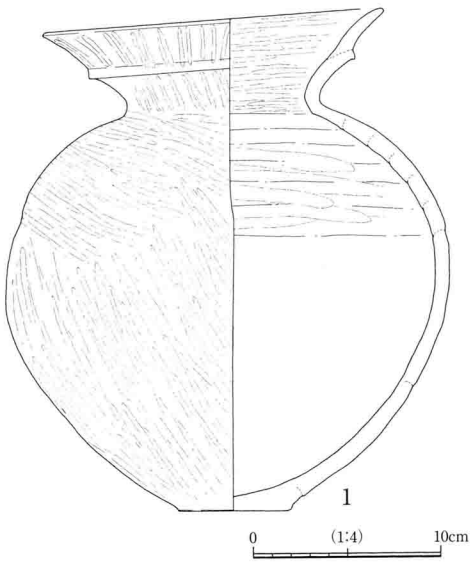


図288　SB158出土遺物実測図

3　奈良・平安時代の遺構と遺物

SB155（PL－40）

平面方形を呈する竪穴式住居跡である。主軸方向をSB156と同じくする。とくに住居壁際の覆土より多量の炭化材が検出された。検出された炭化材には木材は無く、草本系植物と思われる。床面の遺存状態は悪く、貼床がわずかに観察されるに止まった。貼床は地山を掘り込み、整地した上に施されている。カマドまたはそれに伴う焼土等は認められなかった。柱穴は確認されなかった。

出土した遺物は多くなく、図化された土器も限られた。図化した土器はすべて炭の中から出土したものであるが、いずれも被熱の痕跡は認められなかった。須恵器蓋（1）は、完存する個体で、その形態は宝珠形のつまみを有し、かえり部分はシャープな面をなす。口径15.8cm・器高3.2cmを測る。須恵器坏（2）は、回転ヘラ切りされた底部に高台が付されており、体部は比較的シャープに屈曲して立ち上がる。器壁表面はにぶい橙色を帯び、断面内側は灰色を呈するサンドイッチ状になる。口径12.0cm（復元）・底径8.4cm（復元）・器高3.5cmを測る。須恵器甕（3）・土師器甕（4）はいずれも残存度が低く、全体の2割に及ばない。

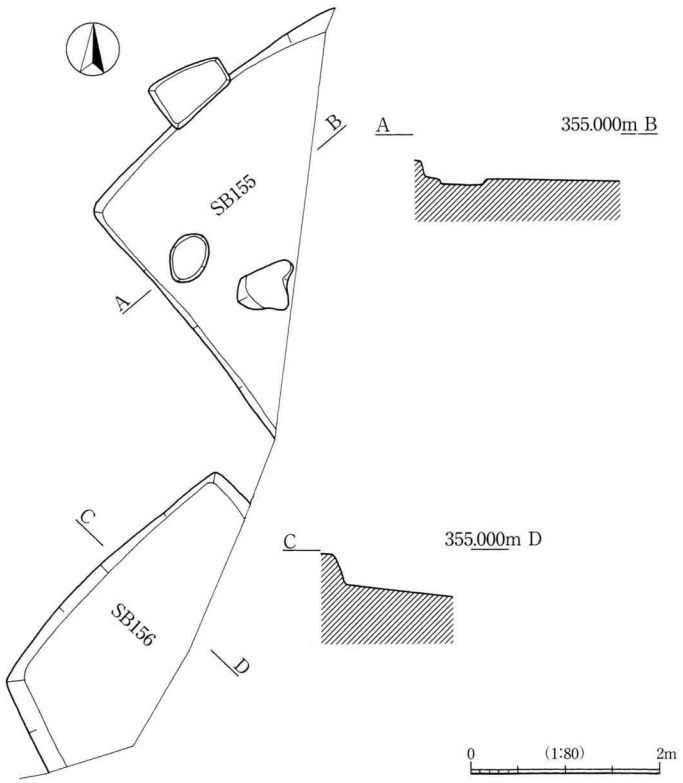


図289　SB155・SB156実測図

図化した遺物はおおよそ奈良時代末～平安時代初頭に位置づけられる。

SB156（PL－D－1）

一辺3.5mをはかる方形の竪穴式住居跡である。主軸方向をSB155と同じくする。わずかに貼床が認められたものの、遺存状態は良くなく、その広がりを確認するまでには至らなかった。草本類とおもわれる炭化材が多量に検出され、その中にも土器片が伴っていた。カマドおよび柱穴は確認できなかった。

出土した遺物には、土師器・須恵器があり、図化した遺物には須恵器の蓋・坏、土師器の甕がある。

須恵器蓋（1）は、器高が比較的高く、つまみは扁平なボタン状を呈する。頂部には回転ヘラケズリを施す。口径14.0cm・器高3.4cmを測る。須恵器坏には、無台のもの（2・3・4）と高台を付すもの（5）がある。無台のものは、いずれも回転糸切りによる底部切り離しを行ない、その形態は底部から緩やかに屈曲しながら立ち上がる。2は完存で、口径12.8cm・底径6.4cm・器高3.7cmを測る。3は全体の1/2が残存し、口径13.0cm（復元）・底径6.0cm（復元）・器高4.8cmを測り、器面には井桁状の火襷痕を残す。4は全体の1/4が残存し、口径12.6cm（復元）・底径7.0cm（復元）・器高4.1cmを測る。高台を付す5は、深めの坏を有する。暗灰色を呈し、他の須恵器とは様相が異なる。SB155出土の須恵器蓋（1）と色調、釉の付着具合などが類似しているが、一つのセットとしては組み合わない。口径14.8cm（復元）・底径9.4cm・器高5.9cmを測る。土師器甕にはハケメ調

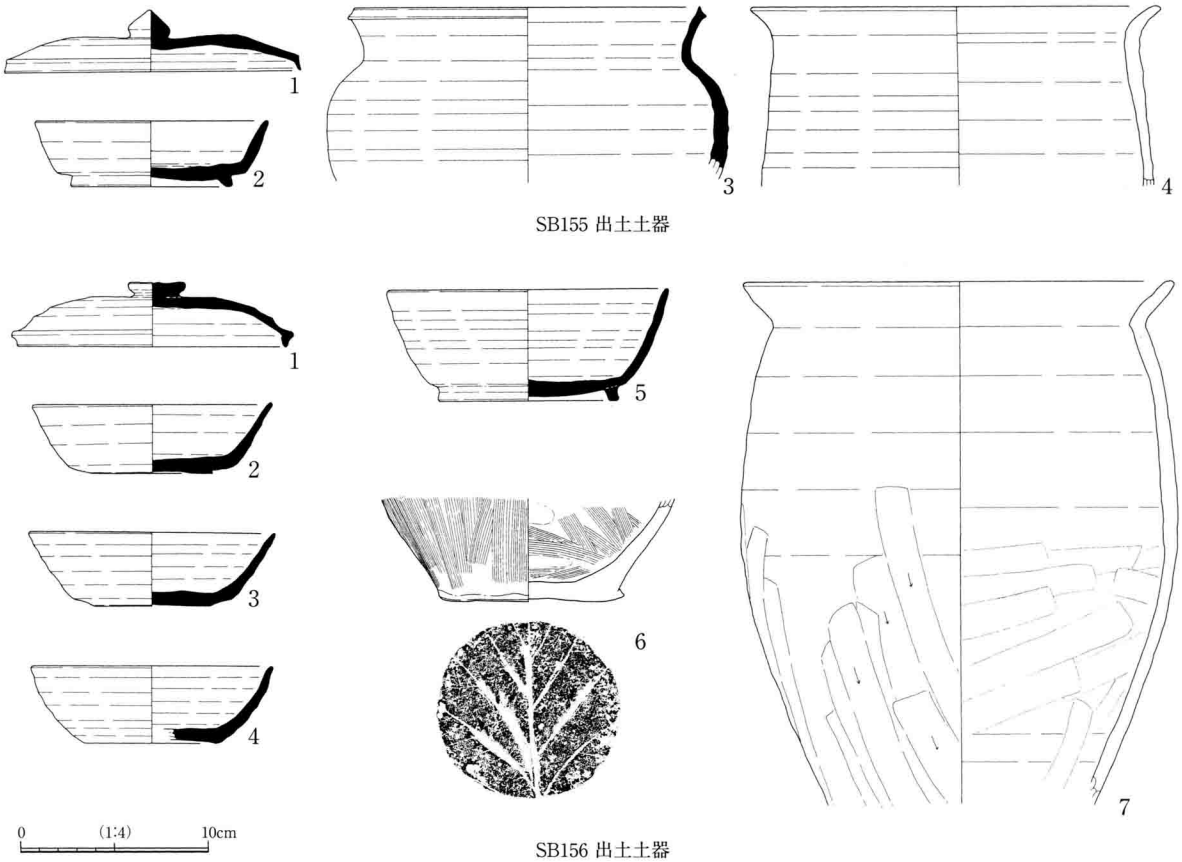


図290　SB155・SB156出土遺物実測図

整を施すもの（6）とロクロ成形のもの（7）がある。土器は炭化材の上面、炭化材の中、炭化材の下、いずれからも出土しているが、その3者の間でも接合関係をもっている。図化した土器は、須恵器を主体とし、おおよそ奈良時代末～平安時代初頭に位置づけられる。

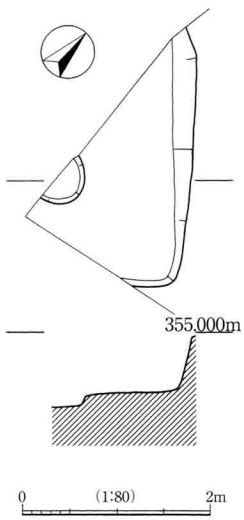


図291　SB157 実測図

SB157（PL－40）

平面方形を呈する竪穴式住居跡である。遺構の大半は調査区外であるが、残存状況の良好な住居跡である。床面は貼床を施し堅緻な面をなす。ピットが1基確認されたが、その性格については不明である。炉およびそれに伴う焼土、炭等は確認されなかった。遺物は、まとまっては出土せず、覆土中から古墳時代前期および奈良・平安時代の土師器および須恵器が出土している。図化できた土器は限られた。1は須恵器高坏の脚部で、不整円形の透かしを3孔施している。脚端部は面をなし、全体的にシャープな作りである。2は盤の高台部かと思われる。端部は面をなしシャープなつくりである。その他、骨片も少量出土した。図化した須恵器は、まとまって出土しておらず、その帰属については検討の余地を残している。住居廃棄のあり方は、カマド・貼床を大きく破壊する奈良・平安時代のものとは異なり、良好な遺存状況を呈している。

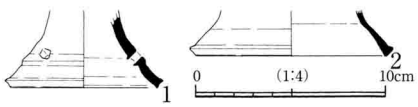


図292　SB157出土遺物実測図

XII　D2区の調査

1　D2区の概要

D2区では隣接するD1区・D3区の調査成果をふまえ表土掘削作業を実施した。表土より砂質土層、黒褐色土層、黄褐色土層、地山層と続き、おおよそ他の調査区の層序と同じであった。地山層がD1区よりも高い位置で認められ、また調査区南側では黒褐色土層が南へ向かって落ち込んでいるのを確認した。層位は全体的にD1区よりも高い位置にあるが、とくに調査区南側においてD1区に向かって傾斜していることがわかった。D1区北側には地下水脈が通っている可能性があり、それに向かって傾斜しているものと思われる。

中・近世　中・近世の遺構には井戸跡１基がある。その他の遺構は、現耕作土中レベルにあると考えられ、明確には検出できなかった。井戸跡（SE044）は素彫りで平面円形を呈する。その覆土には、砂層が厚く堆積しており、その中より鉄鎌が出土している。作業の安全上完掘までには至らなかったが、標高353.740ｍの高さまで掘削したところで湧水が認められた。

平安時代　平安時代の遺構には住居跡２棟・性格不明土坑１基がある。いずれも調査区中央に集中しており、D1区とD3区の平安時代住居跡群と大きな空閑地を挟む。住居跡２棟（SB167・SB168）は、カマドの位置・主軸方向は大きく異なるが、床面レベルに大きな差はなく、出土遺物には特に目立った時期差はない。SX025性格不明土坑もこの住居跡の傍らに営まれ、その関係性が注目される（後述）。

掘立建物跡の柱穴と思われる方形の土坑が６基確認された。そのうちSK236・SK237以外の４基は、おおよそ等間隔に並んでおり、一棟の掘立柱建物が想定される。SK236・SK237は、おおよそ検出面より深さ１ｍと深く、先の４基とは大きく異なる。いずれも時期比定出来るような出土遺物は無いが、少なくともSB168とSX025より後のものであり、平

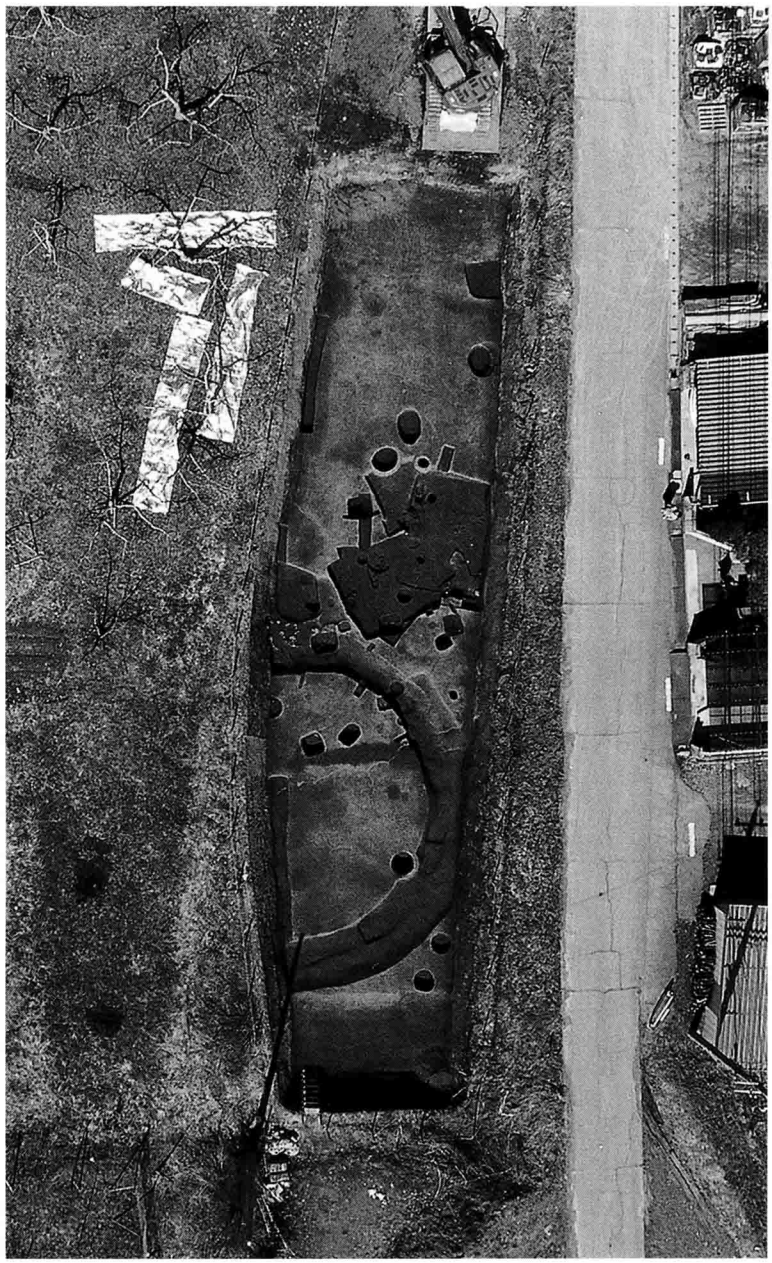


写真45　D2区全景

安時代以降に帰属する。

表土掘削中に瓦・瓦塔片がSZ029付近上層で出土している。それに伴う遺構は認められなかった。

古墳時代　古墳時代の遺構には、中期の円墳１基がある。SZ029の南北には古墳は展開せず、また西側には谷状に低地域が入り込んでいることからも本古墳は古墳群の中でも西端域に位置するものではないかと考えられる。その他の遺構は確認されなかったが、覆土中より古墳時代前期の遺物が出土している。とくにSB167カマド上より器台片などが出土している。

弥生時代　弥生時代以前の遺構は、確認されていない。しかし覆土中より箱清水式土器が散見され、当該期に

遺構番号	形態 規模(m)	付属施設				重複関係		土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅製品	報告頁	時期		備考
		床面	炉・ カマド	柱穴	その他	先	後	実測 数	破片 重量 (kg)				時代	細別	
SB167	方形 5.00	貼床	カマド					11	12.715		刀子？	266	平安		
SB168	方形 3.60	貼床	カマド			SZ029	SK249	6	3.487			267	平安		
SE044	円形 1.00	未完 掘				SZ029		0	0		鉄鎌				
SK233	円形 径 0.90	平坦						0	0.05						
SK234	円形 径 2.3							1	0.128						
SK235	円形 径 0.96	平坦						0	0.017						
SK236 (SH009)	方形 1.22×0.64	平坦						0	0.111						
SK237 (SH009)	方形 0.80×0.64	平坦				SX025		0	0.095						
SK238	不整形 1.14m	不整 形				SZ029		0	0.111						
SK239	楕円形 1.42×1.10	平坦						0	0.1						多量の炭を包含
SK240	円形 1.16	平坦						0	0.246						
SK241	円形 0.94	平坦						0	0.007						
SK242	円形 0.52	平坦						0	0.008						
SK243	方形 1.12×0.92	平坦				SZ029		0	0.074						
SK244	方形 0.66	平坦				SZ029		0	0.005						
SK245	方形 1.04×0.84	平坦						0	0.07						
SK246 (SH009)	方形 0.60×0.44	平坦						0	0.237						
SK248	楕円形 1.46×1.00	平坦						0	0.145						
SK249 (SH009)	方形 1.00×0.84	平坦				SB168		0	1.125						
SK250 (SH009)	方形 1.04×0.98	平坦						0	0.038						
SK251	楕円形 0.91×0.53	平坦						0	0.022						
SK252	円形 0.55	平坦						0	0.02						
SX024	方形	平坦						0	0.073						
SX025	方形 1.4×0.8	平坦	煙道				SK237	0	0.111			268			多量の炭を包含
SX026	不整形 2.40	平坦				SZ029		0	1.894						SZ029
SZ029	円形 墳丘直径 14.8 溝幅 2.3						SB168 SE044 SK238 SK243 SK244 SX026	19	7.903		石鏃	262	古墳	中期	埋葬施設検出できず

表 19　D2 区検出遺構一覧表

人の営みがあったことが窺える。

その他・時期不明　土坑・掘り込み等が多く確認されたが、時期の確定できるものは限られた。SK239は炭を多量に包含している。焼土は確認されておらず、燃焼の痕跡は見出せなかった。遺物総量は少なく帰属時期を特定できる遺物は無かった。

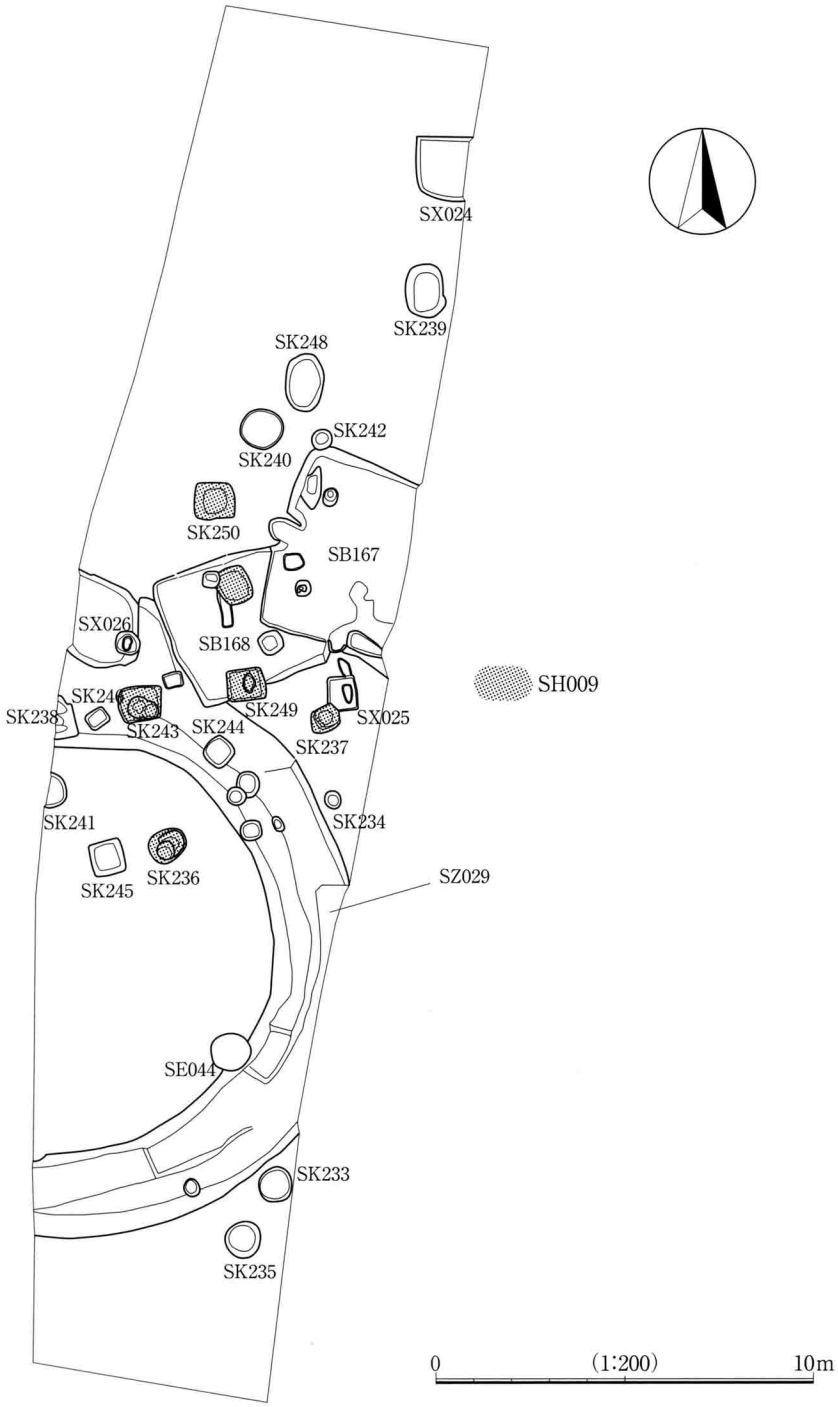


図293　D2区遺構分布図

2　検出された遺構と出土遺物

1　古墳時代中期の遺構と遺物

SZ029（篠ノ井・高畑29号墳）（PL－41、PL－D－1）

墳丘直径14.8m・溝幅2.3mをはかる円形の周溝を確認した。周溝は円形で、外側は段をなして掘り込まれ、底はU字状になり、墳丘に向かって急激に立ち上がる。調査では地山面まで掘り下げたが、その底は凸凹しており不整形であった。周溝底は、一度深く掘りこまれ周回するにつれ徐々に浅くなっていく箇所がいくつかあった。おそらく一度に周回して掘削したのではなく、いくつかの部分に分けて分担して掘削していったものと考えられる。後述するが、周溝北側の土器集中区では地山の上に盛土を施して整地しており、周溝底も地山掘削後、盛土を行なって整地している可能性が高い。

その形態からも古墳の周溝と判断されるが、埋葬施設は削平されており残存していない。一部墳丘を断割ったところ、墳丘は周溝掘削に伴う地山削り出しの上に盛土を施して構築していることがわかった。

周溝内からは古墳時代中期後半の土器が出土している。とくに周溝北側で古墳時代中期後半の坏や高坏がまとまって多量に出土しており、その出土状況から周溝内に設置・供献されたものと考えられる（後述）。この土器集中区では、外側は段をなして掘り込まれていなかった。後世の撹乱によって詳細はわからなかったが、この土器集中区は周溝低位のレベルまでは掘り込まれておらず、ブリッジ状に平坦面を構築していた可能性がある。また断割調査を行なったところ、この平坦面は、地山掘削ののち盛土を施して構築し、その上に土器が設置・供献されていることがわかった。

土器は、周溝北側の土器集中区以外ではほとんど出土していない。図化した土器は、すべて土器集中区からのもので、土師器の坏・高坏・壷がある。いずれも精製の観があり、画一性も高く古墳供献のために製作されたものと思われる。

土師器坏は大きく二つの形態に分けられる。一つは1・2・3のように口径が器高よりも大きいもので、全体的に浅い皿形を呈するものである。もう一つは4・5・6のように比較的器高が高く、鉢形を呈するものである。両者はいずれも丸底で、内面は黒色処理を施す。また出土位置も両者に目立った違いは認められない。

高坏は、いくつかの属性が指摘される。まず、坏部と脚部を貫くホゾは、7・8・9・10のように脚部内面に押し付けてしまうものと、11・12のように突出しないものと13のように短小で未調整のままにしておくものがある。そして脚部は8のように中位が強めに湾曲し裾との境が屈折するものと、7・9・10・11・12のように中位がやや内湾し屈曲したのち裾は緩やかに開くものと、13のように八の字状に脚部が開くものとがある。これらの属性は必ずしも対の関係はなしていないが、13は坏屈曲部に稜をもたないなど他と若干様相を異にしている。

壷（19）は有段口縁壷で、口縁屈曲部は明瞭な稜をなす。内外面ともにミガキ調整を密に施している。破砕の痕跡を顕著に残す。

また東側周溝内からヒトの臼歯と思われる歯が一点出土しており、本墳被葬者のものもしくは周溝内埋葬の可能性も考えられる。

2　古墳に供献された土器

土器集中区は、古墳北側周溝内に認められる。土器はいくつかのまとまりをなしており、大きく西・中央・東の3群に分けられる（西群はさらに南北に分かれる）。この土器集中区は、さらに西側、調査区外にもわたるようでおそらくその中心は西群付近になるであろうと想定される。周溝覆土中にほとんど土器を含まないことから、おそらく墳丘上から転落したのではなく、周溝内に置かれたものと想定される。

出土した土器の接合関係は、それぞれの群内におさまっており、群をまたいで接合していない。西群は高坏と

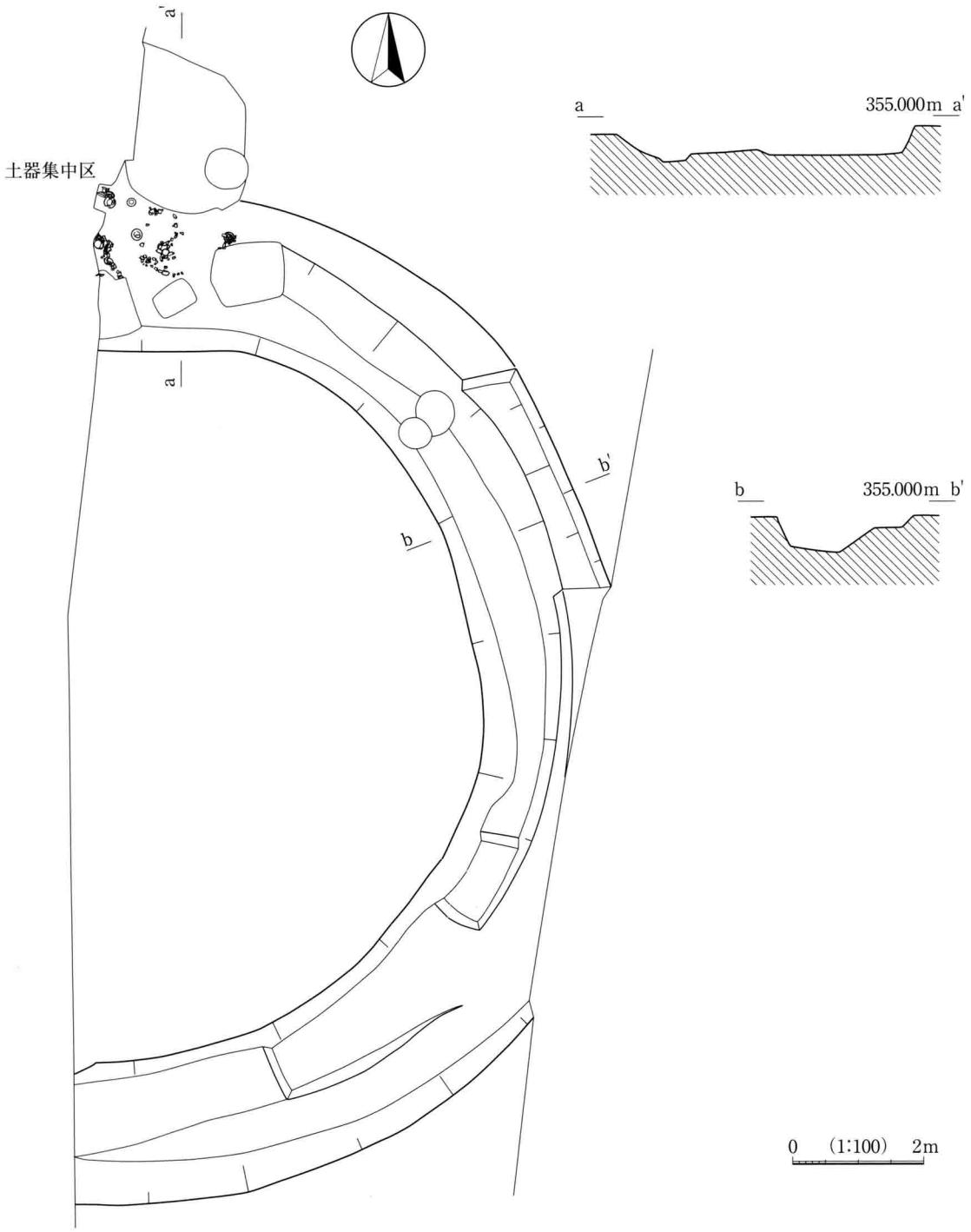


図294　SZ029実測図

坏が混在し、中央群は高坏を主体とし、東群は壷１点のみである。主体となる器種は、土器配列の中心と思われる西群から東に向かって坏→高坏→壷と徐々に器高のより高いものに代わっている。おそらく正面観を意識したものと考えられ、同様の状況はXII区、水内坐一元神社遺跡山二小島団地地点１号性格不明遺構などにみられる。このようにこの土器集中区は土器埋納ではなく、周溝内に祭壇状の平坦面を設けて土器を配した状況が想定される。

土器は破砕痕が多く観察され、複雑な儀礼行為をともなったものであることが窺える。相対的に東側すなわち土器配列の外側の方が破砕痕が顕著で、西側すなわち中心の個体ほど破砕痕は少なく完形に近い形に復元される。西群の４・５・７には破砕痕が認められない。

この状況は儀礼行為そのものに大きく関わっているものと考えられるが、群をまたいで接合しないなど広く土

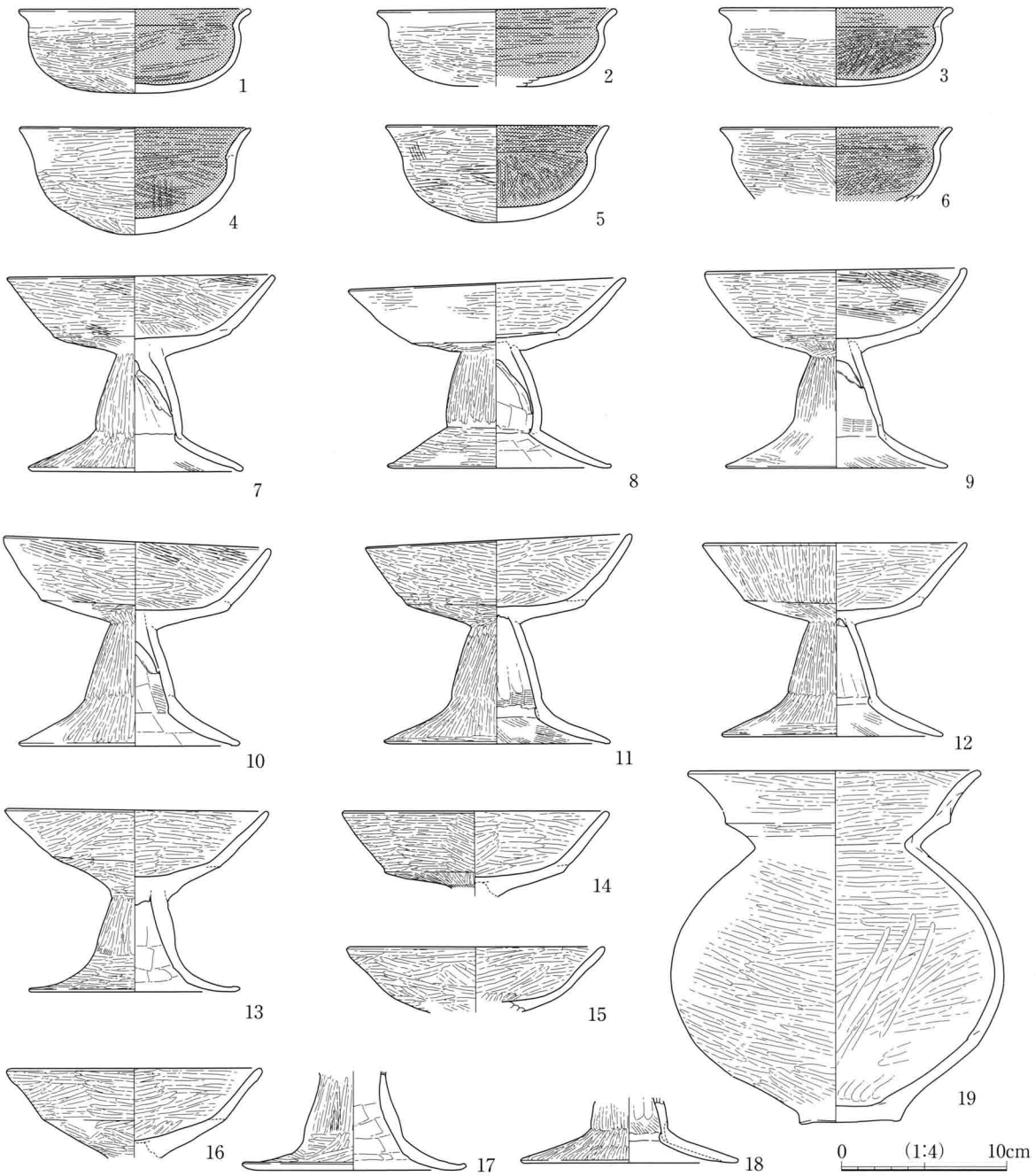


図295　SZ029出土遺物実測図

器片が散在する状況がみられないことから、ばらまき行為ではなく、土器配置後に破砕行為を行なったものと想定される。そのため土器配列の外側の方がより破砕痕を有するのかもしれない。

また、微細な点に目を向けると、横倒しになった9の脚部の上に4の坏が伏せて乗っていた。単に打ち欠き行為だけではない複数の儀礼行為が行なわれたと推測される。

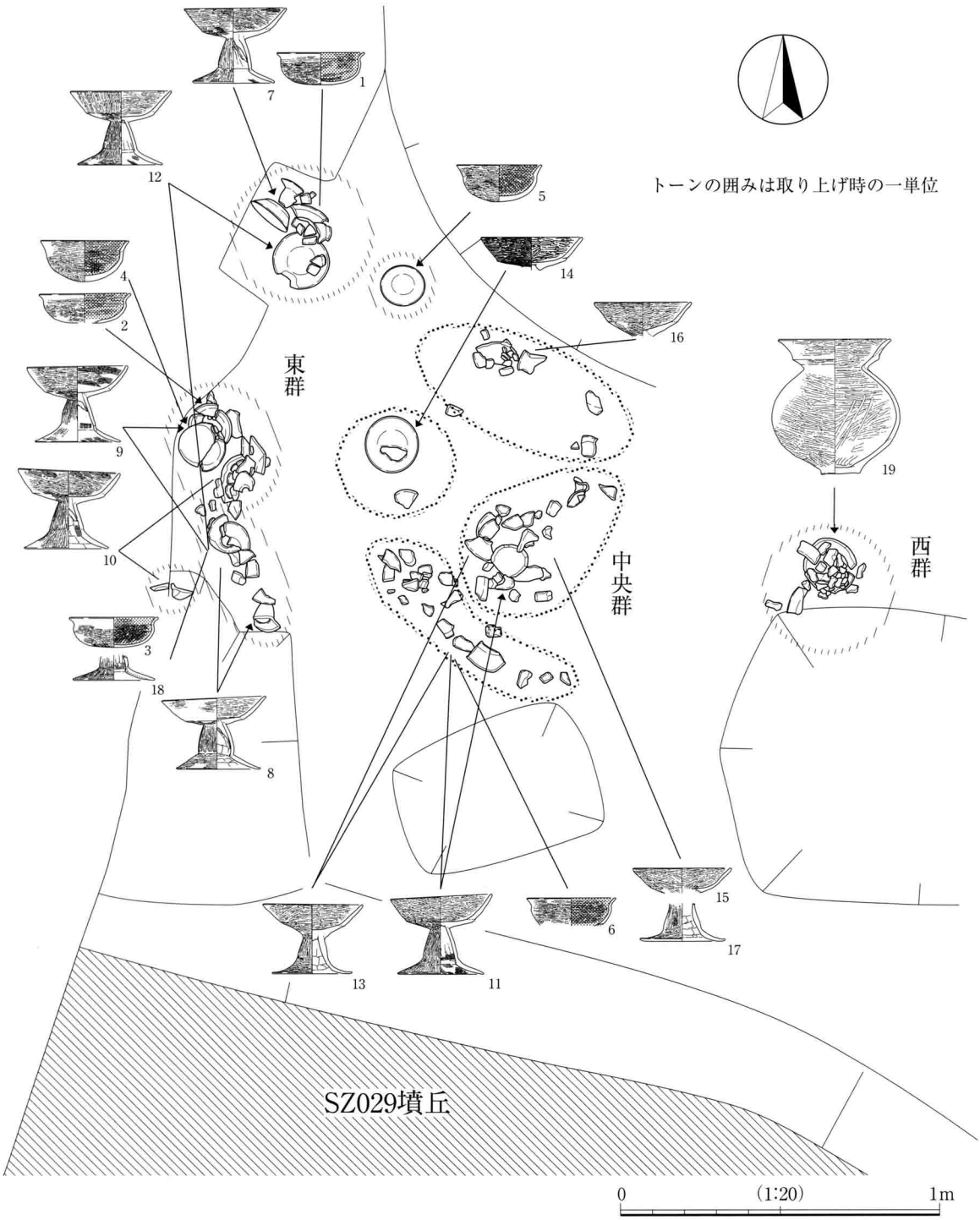


図296　SZ029土器出土状況図

3　奈良・平安時代の遺構と遺物

SB167（PL－42、PL－D－1）

一辺5.0mをはかる平面方形の竪穴式住居跡である。住居北西側にカマドを設けている。床面には貼床を施しているが、遺存状態は良くなく相対的に堅緻な面をなしていなかった。住居北側の壁面は明確に検出できたが、南西側はSB168によってきられており、5cm前後の側壁の立ち上がりを確認するに止まった。柱穴を2基検出したが、幾分カマド寄りである。

出土した遺物は、非常に多く土師器・須恵器を主体とする。とくにカマド前面で多くの遺物が出土した。覆土に古墳前期の土器片を若干伴っている。図化した遺物には、土師器の坏・鉢・甑・甕、須恵器の坏がある。

坏の多くは体部側面に墨書が施されている。6は「因」だが、その他は判別できなかった。須恵器坏は、いずれも回転糸切りによる底部切り離しを行なう。規格性はあまり感じられず、とくに4は胎土に白色礫を含み、焼成も良くなく、他とは様相が異なる。1は口径12.7cm・底径5.2cm・器高4.4cm、2は口径12.8cm・底径5.7cm・器高4.4cm、3は口径13.3cm・底径5.8cm・器高3.7cm、4は口径13.2cm（復元）・底径6.8cm（復元）・器高4.2cmを測る。土師器坏はすべて内面黒色処理を行なっている。6・7は回転糸切りによる底部切り離しを行ない、5は切り離し後、手持ちヘラケズリを施す。5は口径12.7cm・底径5.8cm・器高4.1cm、6は口径13.4cm（復元）・底径6.8cm・器高3.8cm、7は口径13.8cm・底径5.5cm・器高4.1cmを測る。

甕（9）は外面ハケメ調整を施す。橙色を帯び二次的被熱を受けたと考えられる。カマドにかけられたものか。鉢（10）は内外面ともにミガキを施す。甑（11）の器高は、おおよそ15～14cmと推定され、小形である。

12は刀子の茎か。

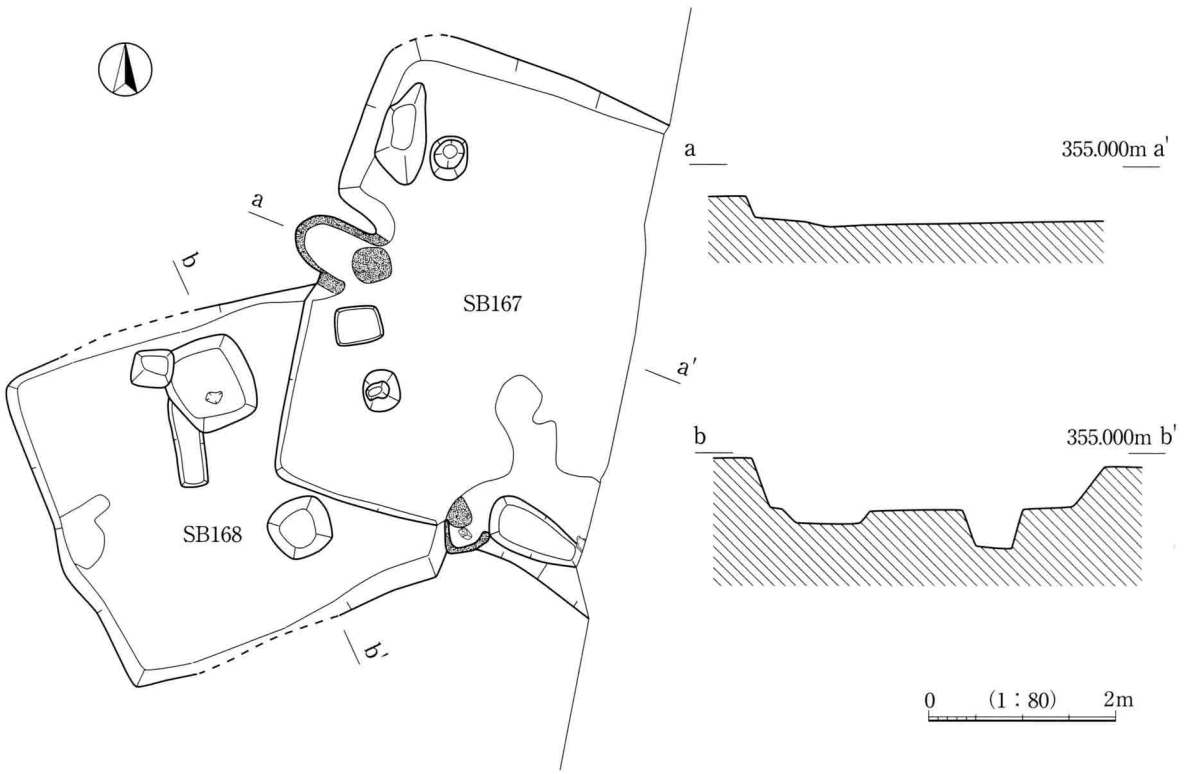


図297　SB167・SB168実測図

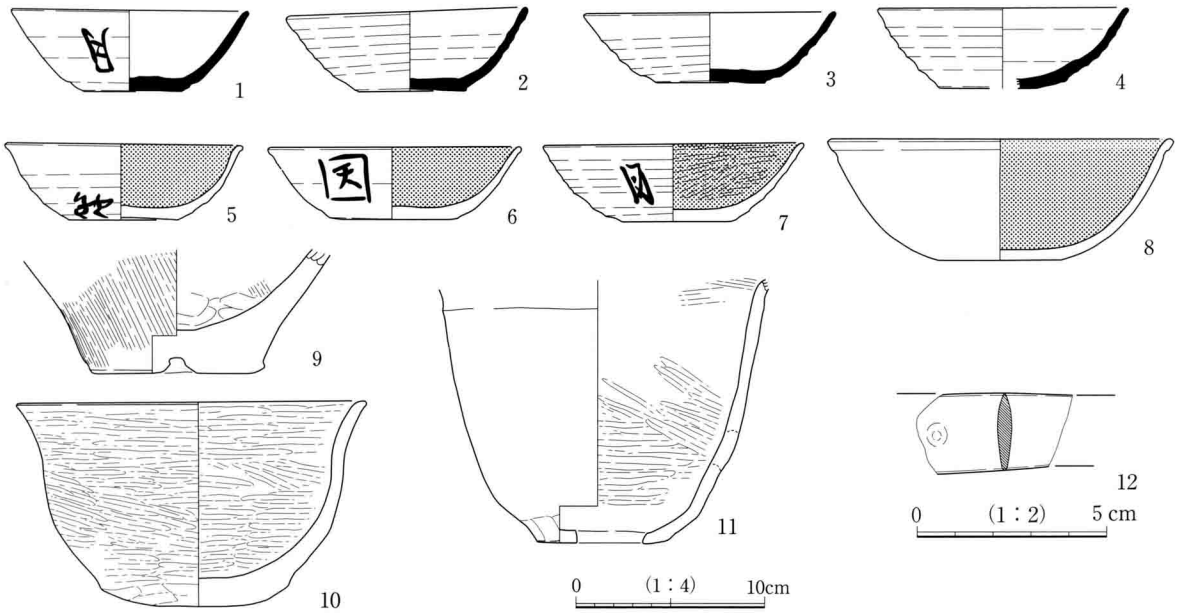


図298　SB167出土遺物実測図

SB168（PL－42、PL－D－1）

一辺3.6mをはかる平面方形の竪穴式住居跡である。住居南東側にカマドを設けている。本カマドは、先行して検出したSB167掘削時に確認したものだが、そのカマド底面から走る床面が後に検出したSB168へ続くことから、SB168に帰属するものと判断した。カマド前面に貼床を検出したが、それ以外の床面はさほど堅緻ではなかった。柱穴と思われる土坑が1基認められた。住居西側ではまとまって炭化物を検出したが、大きく広がる状況はみられなかった。

出土した遺物は、あまり多くなく土師器・須恵器を主体とする。図化した遺物には土師器の坏、須恵器の坏、緑釉陶器、灰釉陶器がある。土師器坏は、いずれも内面黒色処理を行なっている。1・3はカマド前で重なって出土している。1・2は回転糸切りによる底部切り離しを行ない、2はそののち一部手持ちヘラケズリを施す。3は回転ヘラ切りによって底部を切り離す。1の体部側面には「岑」の文字が2箇所墨書される。口径13.0cm・底径6.0cm・器高3.8cmを測る。2は体部下端にも横位手持ちヘラケズリをめぐらせる。口径12.7cm・底径5.6cm・器高3.6cmを測る。3は体部下端に回転ヘラケズリを施す。口径12.8cm・底径5.2cm・器高4.3cmを測る。須恵器坏（4）は、全体の1/3程度が残存する。回転糸切りによって底部切り離しを行なう。胎土には白色礫を含み精製の観は無い。口径13.2cm（復元）・底径6.2cm・器高2.4cmを測る。

5は緑釉陶器の皿で、SB167出土片と接合する。淡緑色の緑釉を内外面全面に施している。器質は脆く器面は斑状に剥離する。口径13.2cm（復元）・器高2.4cm・底径6.2cmを測る。6は灰釉陶器の皿で、その残存度は径の1/8程度で非常に低い。口径16.8cm（復元）を測る。

平安時代前半の所産である。遺構の切り合い関係からSB167→SB168の順に構築されたと思われるが、両者の出土遺物に目立った時期差は認められない。

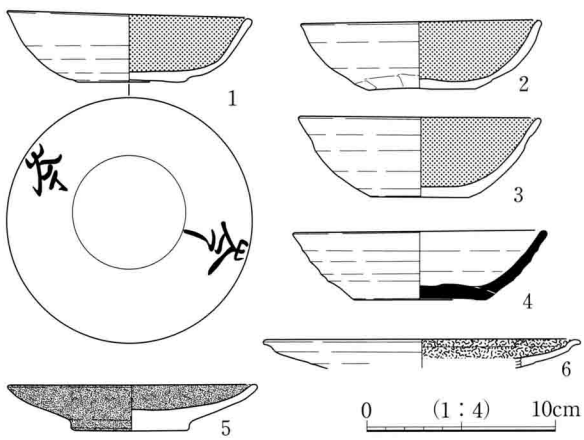


図299　SB168出土遺物実測図

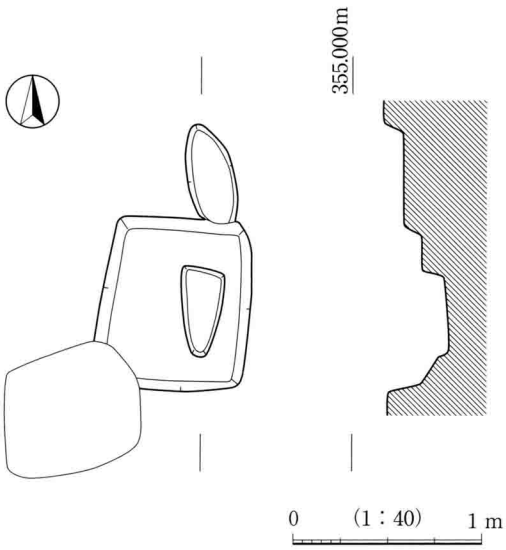


図300　SX025実測図

SX025（PL－42）

性格不明の遺構である。長軸1.40×短軸0.8mを測り、平面方形の土坑に煙道が付設されている。土坑の深さは最大30cmと浅く、その底面はほぼ平坦である。覆土には多量の焼土および炭化物を包含している。底面および壁面には、焼土や炭化物が多量に付着しており、燃焼作業が行なわれていたと思われる。それら焼土は比較的厚く堆積しており、複数回にわたって使用されたものと想定される。おそらく上屋を伴うものであろうが、その構造を窺えるような状況は認められなかった。とくに掻き出し口も認められなかった。遺物はほとんど無く、どのような作業を行なっていたのかは不明である。

検出したレベルからおおよそ平安時代以降のものと推測される。

検出面出土の瓦・瓦塔

検出面より平瓦が２点出土している。１は、厚さ2.2cm、色調は凸面が橙色（Hue7.5YR6/6）、凹面が橙色（Hue5YR6/8）を呈する。凸面は格子目状のタタキメを残す。凹面には若干の凹凸が認められるものの、布目痕を確認することはできなかった。側部、端部は共に破損しておりその形状は不明である。２は、厚さ1.6cmを測り、色調は橙色（Hue5YR7/8）を呈する。２も１同様に、凸面は格子目状のタタキメを残すが、凹面に布目痕は確認できなかった。側部は１度のケズリ整形が行われている。

この平瓦２点は、いずれも凸面に格子目叩き具による整形を行なうが、凹面には布目痕が確認できない。凹面に布目痕が確認できないのは、布目痕を整形時に削り消してしまった可能性があると思われる。

３もSZ029付近上層の検出面より出土しており、その形状からして瓦塔の基壇部であると推定される。高さ1.4cmと小さく、明瞭な段は成していない。外面はケズリ調整と思われ、平滑な仕上がりである。

現在、瓦塔が出土した遺跡は、長野市内では４遺跡を数える（篠ノ井遺跡群北陸新幹線地点、稲添遺跡、田牧居帰遺跡、善光寺門前町遺跡竹風堂地点）。それら瓦塔の基壇はすべて２段構成であり、１段構成のものはない。３が瓦塔の基壇部であるとすれば、１段構成のものは初めての出土となる。しかし、帰属遺構が明確でないことや残存率の低さからも検討の余地を残している。

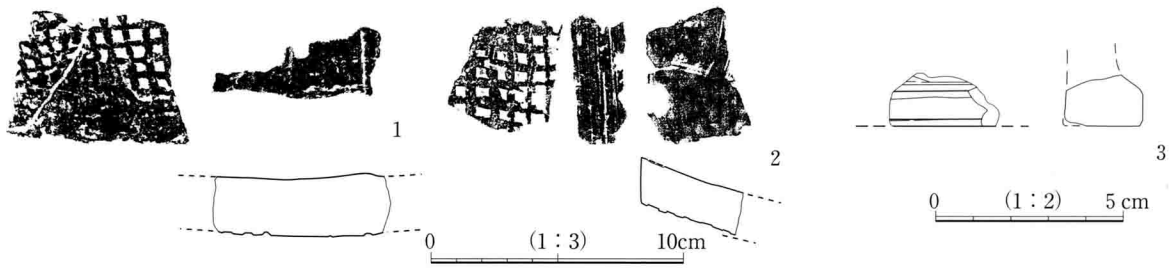


図301　D2区出土瓦・瓦塔実測図

XIII　D3区の調査

1　D3区の概要

D3区ではD1区の調査成果をふまえ、表土掘削作業を進めていった。のちに調査することになったD2区を挟んでいるが、おおよそ同様の堆積状況が観察された。調査区北側で洪水砂（仁和の洪水砂）がわずかに堆積しており、そのレベルより上層では目立った遺構は認められなかった。調査された遺構はいずれも洪水砂下のものである。

調査された遺構には、弥生時代、奈良・平安時代のものがあったが、いずれも検出レベルに大きな差はみられなかった。時期の確定できた遺構はいずれも住居跡で、調査区北側に集中している。調査区南側では時期不詳の土坑やピットが多く見られたが、その性格は把握できなかった。おそらく不整形な土坑の形態からも風倒木痕なども含んでいると思われる。隣接するD2区北端部も遺構は少なく、居住域には向かない環境であったものと想定される。今後は旧地形の微細な把握が必要となってくるだろう。

中・近世　中・近世の遺構は確認されていない。井戸跡も見られなかった。おそらく中・近世の遺構面は、現耕作土となっており、検出できなかったと思われる。遺物もまとまっては出土していない。

奈良・平安時代　奈良・平安時代の遺構には住居跡５棟がある。住居表示「SB」は６つあるが、そのうちSB162は平面方形に掘り込まれるものの、床面・側壁などは明確でなく、住居跡としての様相は薄い。また遺物も少量しか出土していない。その他住居跡５棟は調査区北側に集中している。それらは奈良時代末～平安時代初頭に位置づけられ、「市道山崎唐猫線地点」の東側一帯（A区）で確認された住居跡群と一連のものであると考えられる。住居跡は大きく損壊しているが、それらは後世の遺構・撹乱によるものだけではなく、住居廃棄行為に伴うものもあると考えられる。

遺構番号	形態規模(m)	付属施設				重複関係		土器類		石製品土製品玉類	鉄製品青銅製品	報告頁	時期		備考
		床面	炉・カマド	柱穴	その他	先	後	実測数	破片重量(kg)				時代	細別	
SB160	方形 4.30×4.00	貼床	カマド（石芯材）	なし		SB165か	SB163か SD030	12	5.7			273	奈良末～平安初		
SB161	方形	貼床？	火床	なし				2	0.8				不明		
SB162	方形 3.80×3.80	地山	なし	なし				2	0.13				不明		住居跡でない可能性
SB163	方形？	貼床	煙道	なし		SB160か	SD030	4	1.7	黒曜石製石鏃		274	奈良？		帰属時期は要検討
SB164	方形？	地山	なし	なし			SD031	4	1.52			272	弥生	後期	
SB165	方形？ 5.10	貼床	カマド	1		SB166か	SB160か	14	13.105			274	奈良		
SB166	方形？	貼床	焼土	なし			SB165か SD032 SX021	9	9.601			276	奈良		
SD030	幅 0.55	不明瞭				SB160 SB163		1	1.105						出土遺物はSB160のものか
SD031	幅 0.30	不明瞭				SB164		0	0.18						
SD032	幅 1.30	不整形				SB166		0	0.65						SB166廃棄に伴う？
SD033	幅 0.40	U字状						0	0						SB165に付帯？
SD034	幅 0.30	不明瞭						0	0						
SD035	幅 0.35	不明						0	0						
SD036	幅 0.50	不明						0	0						

表 20　D3 区検出遺構一覧表（1）

古墳時代　古墳時代の遺構は確認されていない。とくに目立った当該期の遺物も認められない。「市道山崎唐猫線地点」においても本調査区に近い東側一帯には当該期の住居跡はない。

弥生時代　弥生時代の遺構には住居跡１棟がある。SB164は調査区北端で確認され、出土遺物より弥生時代後期・箱清水式期に比定される。しかし土器はまとまって出土しているものの、床面・側壁などは明確ではなかった。周辺に当該期の遺構は確認されておらず住居跡群をなしてはいないが、「市道山崎唐猫線地点」においても散漫な分布を呈しており、当時の集落のあり方を反映しているのであろう。また調査区中央より弥生後期・箱清水式の壷が出土した。しかし、それに伴う遺構は認められなかった。

その他弥生後期・吉田式の土器片が出土している（後述）。いずれも出土遺構には帰属しないが、当該期に人の営みがあったことが窺える。

遺構番号	形態規模(m)	付属施設				重複関係		土器類		石製品土製品玉類	鉄製品青銅製品	掲載図版番号	時期		備考
		床面	炉・カマド	柱穴	その他	先	後	実測数	破片重量(kg)				時代	細別	
SK216	方形 0.50	平坦						0	10						
SK217	方形 0.60×0.50	平坦						0	0.002						
SK218	不整形 0.70	平坦						0	0.01						
SK219	円形	平坦						0	0.36						
SK220	円形 0.55	平坦						1	0.16						
SK221	不整楕円形 0.70×0.50	平坦						0	0.04						
SK222	不整形 0.55	平坦						0	0.04						
SK223		平坦						0	0.07						
SK224	円形 0.80m	平坦						0	0.03						
SK225	0.65×0.60 方形	平坦						0	0.002						
SK226	1.60×1.65 不整形	平坦						0	0.14						
SK227	0.60 長方形	平坦						0	0.06						
SK228	方形 0.70×0.60	平坦						0	0.005						
SK229	不整形 0.90	不整形				SB166		0							SB166を損壊 出土遺物はSB166として取り上げ
SK230	隅丸 1.25	平坦						0	0.05						
SK231	楕円形 1.00	柱穴		1				1							
SX017	不整方形 2.10×1.60	平坦						0	0.02						
SX018	不整方形 2.00	平坦						0	0.33						
SX019	1.8	平坦						0	0.01						
SX020	不明	平坦						0	0.03						
SX021	不整形 幅 1.80	平坦					SB166	0							SB166を損壊 出土遺物はSB166として取り上げ
SX022	不明							0	0.05						
SX023	方形	平坦						0	0.2						
pit087	0.4	平坦						0	0.001						
pit088	0.2	平坦						0	0						

表 21　D3 区検出遺構一覧表（2）

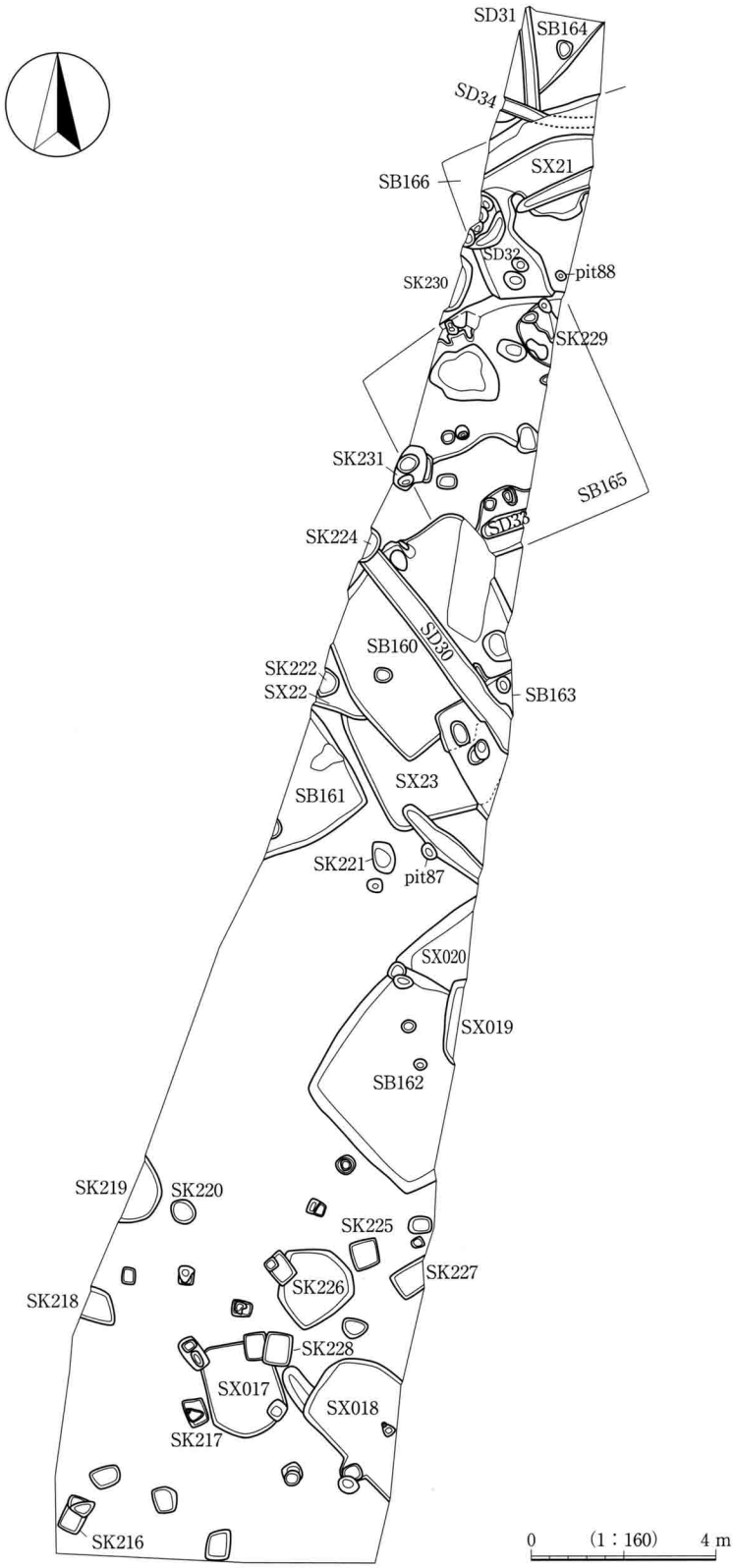


図302　D3区遺構分布図

2　検出された遺構と出土遺物

1　弥生時代後期の遺構と遺物

SB164（PL－43）

規模不明の竪穴式住居跡である。検出された側壁は真直ぐ走り方形の住居形態が想定されるが、床面からの立ち上がりはあまり明確ではなかった。床面は整地されているものの、堅緻ではない。柱穴、炉およびそれに伴う焼土、炭等は検出されなかった。

床面より弥生後期・箱清水式の甕・ミニチュア土器が出土している。

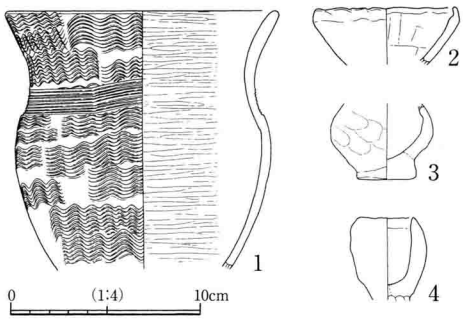


図303　SB164出土遺物実測図

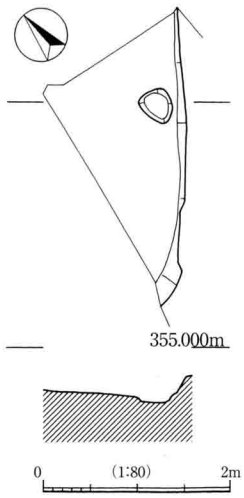


図304　SB164実測図

甕（1）は、胴部最大径より口径の方がわずかに大きい。短いスクロールの櫛描波状文を上から下の順に施文したのち、櫛描横線文を頸部に一帯めぐらせる。ミニチュア土器は、いずれも手づくねである。2は径の1/3程度しか残存しておらず，器種は不明である。3は壷形で、4は脚部を付すものと想定される。

弥生時代後期・箱清水式期の所産である。

検出

弥生時代の遺構は先述のSB164以外には認められなかった。しかし、調査区中央部において壷（8）が出土している。外面上半は赤彩されており、最大径を胴部下半の屈曲部にもつ。その形態から弥生時代後期・箱清水式の所産であると考えられる。体部下半を地山中におさめ直立した状態で出土した。遺構の有無を確認するため、周囲にトレンチを入れてみたが見当たらなかった。とくに撹乱を受けた状況も認められなかった。ただしその性格については分からなかった。壷内部の土を水選法によって遺物等の含有物を調べたが、何も検出されなかった。その他、弥生時代後期・吉田式の土器片が出土している。1はSB160、2・6はSB162、3はSB161、4はSK220、5・7は検出面より出土している。いずれも出土遺構には帰属しないが、調査区北側に比較的多い点は留意される。

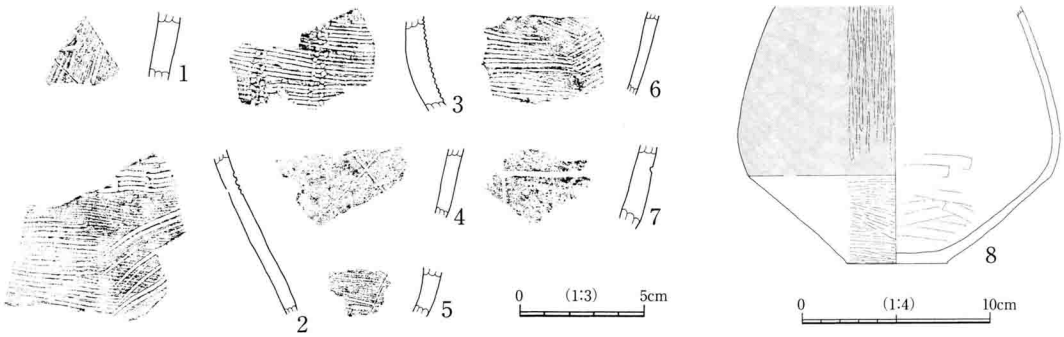


図305　D3区検出面出土遺物実測図

2　奈良・平安時代の遺構と遺物

SB160（PL－42、PL－D－1）

4.30×4.00mをはかる方形の竪穴式住居跡である。床面には貼床を施すが、小規模な遺構によって一部損壊している。住居南西側には貼床は無く、壁面も明瞭に検出されなかった。図示している平面形態は遺構検出時に確定し実際に掘削したものだが、とくに南壁の位置については明確ではなかった。柱穴は確認されていない。カマドは、北東側に設けているが、上層のSD030によって大きく壊されている。その袖部からは構築材と思われる円筒形の礫が出土している。出土した礫は長辺を垂直にして直立しており、原位置を留めているものと思われる。

遺物は、おもにカマド周辺で出土し、土師器の坏・甕、須恵器の坏・蓋がある。

須恵器蓋（1）は、高い器高を有し、かえりは内面に強い屈曲をなす。頂部には回転ヘラケズリを施す。口径は18.6cm（復元）と大きく、本遺構出土の坏と合うものはない。須恵器坏には無台のものと高台付のものがある。2・3・4・5は、類似した形態を呈している。いずれも回転糸切りによる底部切り離しを行なう。2は口径13.2cm（復元）・底径6.2cm・器高3.1cm、3は口径13.7cm・底径5.6cm・器高3.8cm、4は口径12.8cm・底径6.3cm・器高3.7cm、5は口径13.1cm・底径5.2cm・器高3.9cmを測る。高台を付す6は、口径11.9cm（復元）・底径8.5cm・器高3.8cmを測る。

土師器坏は2点図示され、いずれも回転ヘラ切りによる底部切り離しを行ない、内面黒色処理を施す。7は、口径12.0cm（復元）・底径5.0cm・器高3.9cmを測る。いっぽう8は底に「×」字のヘラ記号を刻む。口径16.3cm（復元）・底径6.8cm・器高6.1cmを測る大型品である。甕は2点あり、いずれも小形品である。ロクロ成形で、9はヘラ切り、10は回転糸切りによって底部切り離しを行なう。

奈良時代末～平安時代初頭の所産である。

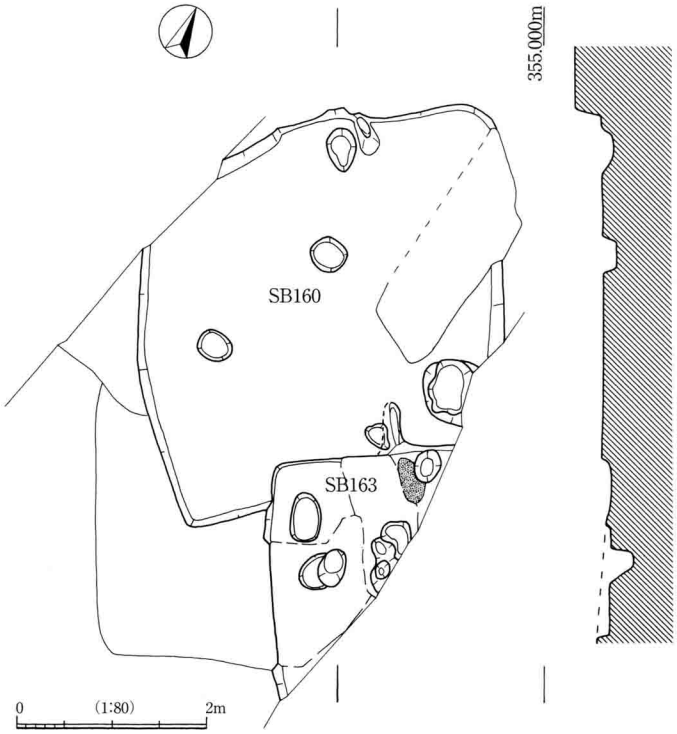


図306　SB160・SB163実測図

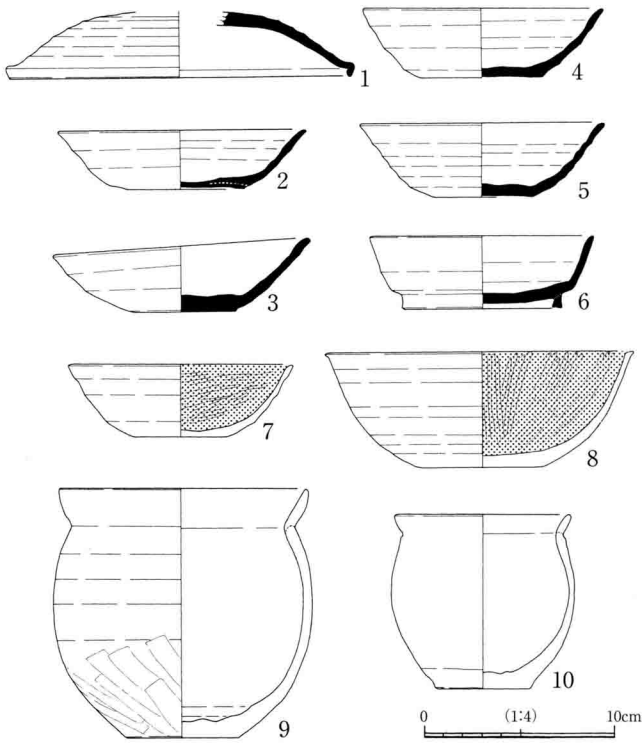


図307　SB160出土遺物実測図

SB163（PL－43）

平面方形を呈する竪穴式住居跡である。カマドは北東側に設けているが、大きく損壊しており、煙道の一部を確認するにとどまった。床面には貼床を施しているが、その大半は小規模な遺構によって損壊している。

多くの遺物はカマド周辺から出土している。図示した遺物には土師器の坏・甕がある。

土師器坏は、いずれも回転ヘラ切りによる底部切り離しを行なう。１は内面黒色処理を施し、口径13.0cm・底径6.0cm・器高4.9cmを測る。２は平底をなし、口径13.6cm（復元）・底径3.6cm（復元）・器高5.6cmを測る。

土師器甕の３・４はロクロ成形で、その形態も類似している。胴部上半の径1/4程度しか残存していないが、被熱の痕跡はとくに認められなかった。

出土遺物は奈良時代の所産である。

SB160との先後関係については不明確ではあったが、SB160の貼床がSB163北壁にまで及んでいたこと、SB163のカマド煙道がSB160によって損壊した可能性の低いことを考えあわせると、SB160→SB163の構築順が考えられる。ところが出土遺物はSB163の方が明らかに古く、矛盾する。しかし図示したSB163出土遺物は、出土レベルは床面と並ぶが、住居中央の撹乱坑上より出土しており、その帰属については留意する必要がある。ただしSB163より先行する遺構はとくに見当たらず、その流入経緯はわからなかった。

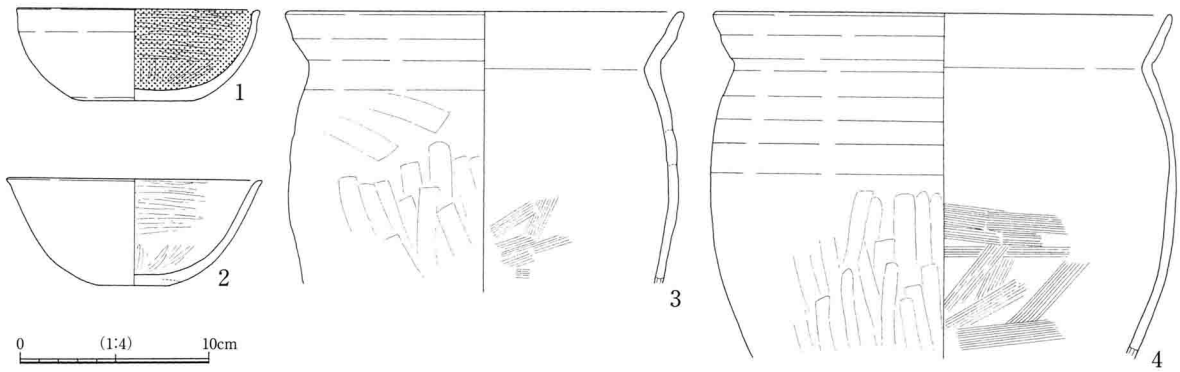


図308　SB163出土遺物実測図

SB165（PL－43）

長軸5.10mをはかる竪穴式住居跡である。住居内は複数の小規模な遺構によって大きく破壊されていたが、カマド・柱穴１基・貼床を確認した。カマドは２基、貼床は２面検出され、大きく建て直しを行なったものと考えられる。カマドは全く同じ箇所に二度構築され、二次カマドでは両袖部・煙道が確認され、その下からは一次カマドの奥壁が検出された。カマド前の大型土坑内には一次カマドに由来すると思われる焼土が多量に投棄されていた。またそのカマドに対応するように床面が上下２面にわたって貼り直されている。

本住居跡は、地山を整地した上に構築しており、先行する遺構は無いようである。また、住居廃棄に際してカマドは大きく破壊されておらず、他の住居跡とは状況が異なっている。その一方で床面の北半は大きく破壊されている。住居廃棄行為に伴うものか。

遺物総量は多く、土師器・須恵器を主体とする。図示した遺物には、須恵器の蓋・坏・甕、土師器の甕がある。

須恵器蓋には大小の二つがあり、１は口径13.0cm、２は口径18.0cmを測る。いずれも頂部には回転ヘラケズリを施す。須恵器坏には無台のものと高台を付すものがある。無台のもの（３・４・５）は、３・５のように底部回転糸切りによって平坦な面をなすものと、４のように手持ちヘラケズリによって底が丸みを帯びるものがあ

る。3は口径12.2cm（復元）・底径7.4cm（復元）・器高3.0cm、4は口径12.9cm（復元）・器高4.4cm、5は口径13.2cm（復元）・底径8.3cm（復元）・器高4.2cmを測る。高台を付すものには、6のように深い坏のものと、7・8のように浅い坏のものがある。6は口径8.4cm（復元）・底径5.4cm（復元）・器高4.7cm、7は口径12.2cm（復元）・底径9.2cm（復元）・器高3.0cm、8は底径9.6cm（復元）を測る。甕はいずれも残存度が低い。9は須恵器の小形甕、10はロクロ成形の土師器甕、11は外面ハケメ調整の土師器甕である。須恵器大甕片も出土しているが、いずれも残存率は低い。12は口縁部片、13は頸部片である。14は須恵器坏で、底部には「井」状の線刻を施す。

須恵器を主体としており、奈良時代の様相が看取される。

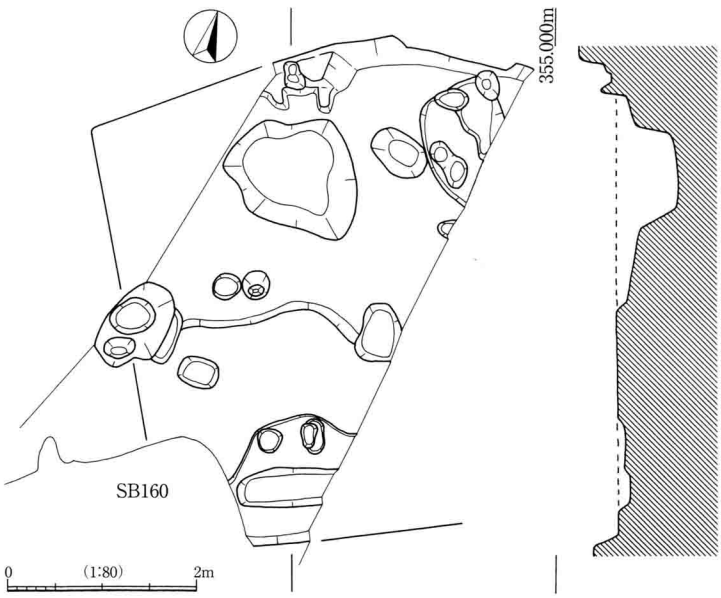


図309　SB165実測図

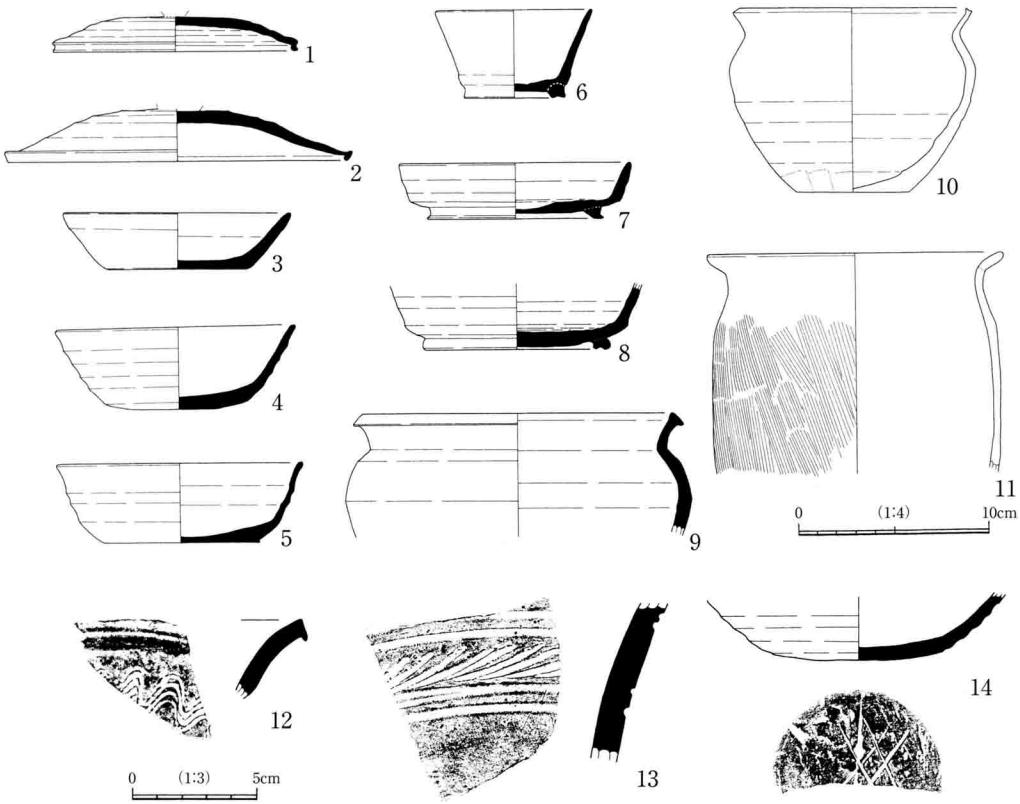


図310　SB165出土遺物実測図

SB166（PL－43）

平面方形の竪穴式住居跡である。カマドは明確には検出されなかったが、住居北側でカマドに由来すると思われるまとまった焼土が検出された。床面には貼床を施しているが、その大半は他の小規模な遺構によって損壊していた。明確な柱穴は確認できなかった。

遺物は、本住居跡を壊す小規模な遺構に多く含まれており、とくに攪乱坑から多くの土器や礫が出土した。

図化した土器には、須恵器の坏・壷、土師器の坏・盤がある。

図311　SB166実測図

須恵器の坏は、無台のものと高台を付すものがある。無台のもの（1・2）は、いずれも底部と体部との境が明瞭でなく底部から緩やかに屈曲して立ち上がる。1は底部を回転糸切りによって切り離し、回転ヘラケズリで仕上げる。口径11.8cm（復元）・器高3.6cmを測る。2は残存度が低く、口径14.0cm（復元）・器高3.9cmに復元される。高台を付す坏は2点ある。3は口径11.8cm（復元）・底径7.9cm（復元）・器高3.2cmを測る。4は高い高台を有し全体的にシャープな作りである。口径13.8cm（復元）・底径10.4cm（復元）・器高3.7cmを測る。土師器坏は2点あり、いずれも内面黒色処理を施す。5は回転糸切りによる底部切り離しを行なう。口径12.4cm（復元）・底径6.4cm（復元）・器高4.0cmを測る。6は回転ヘラ切りによる底部切り離しを行なう。口径15.8cm（復元）・底径6.0cm（復元）・器高6.0cmを測る。8は土師器の盤で径の1/4程度が残存する。その他、須恵器には壷（7）、四耳壺（9）がある。四耳壺は径1/6程度しか残存していない。

おおよそ奈良時代末から平安時代初頭に帰属すると考えられる。

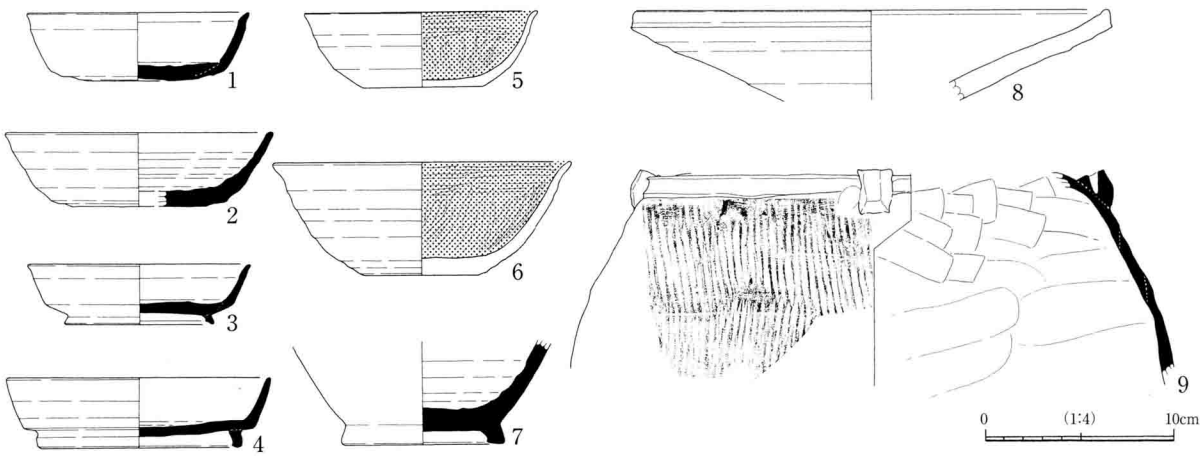
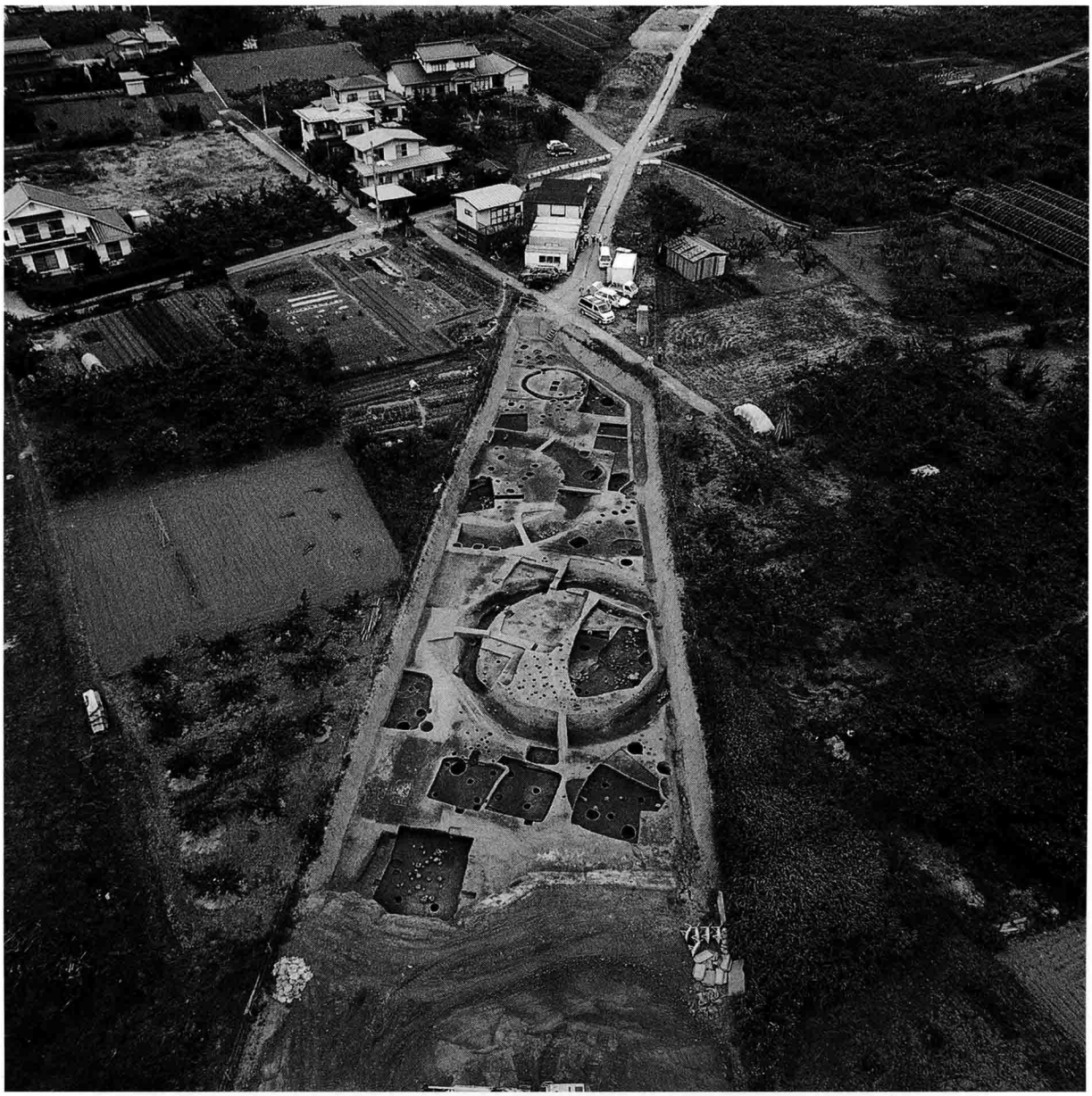


図312　SB166出土遺物実測図

遺構写真図版



調査区遠景

SB091

SB065

SB064

SB064 カマド

SB080

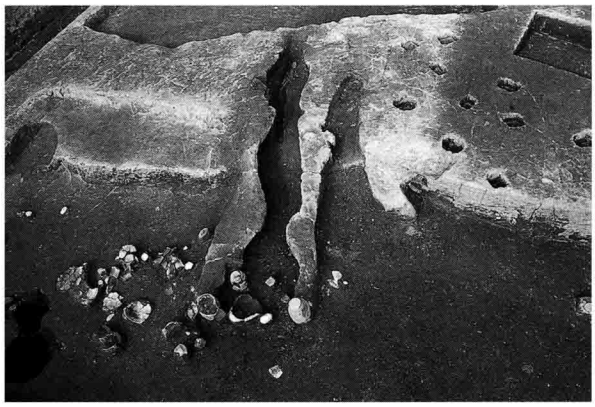
SK082・SK083

SB081

SB082

PL－1

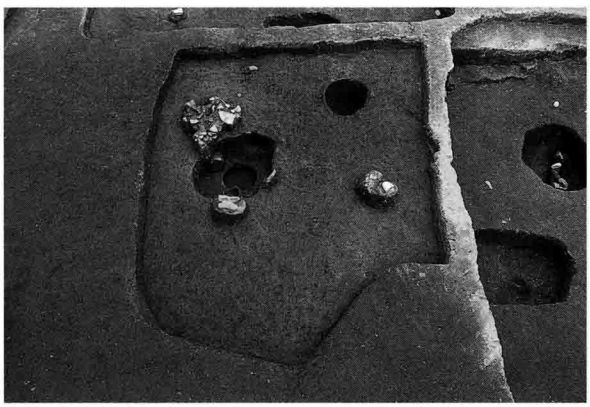
SB071



SB071 カマド

SB071 カマド

SB071 カマド周辺土器出土状況



SB072

SB085

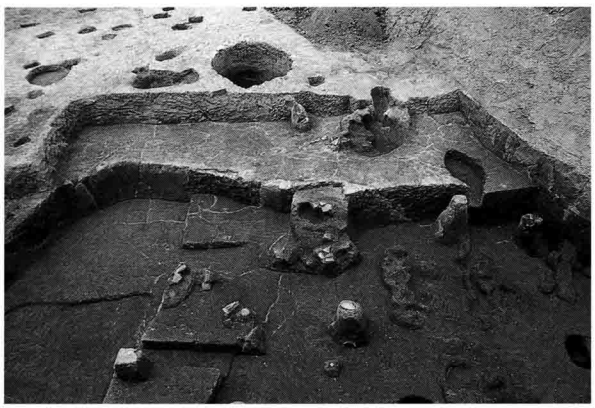
SB070

SB070 カマド

PL－2

SB069

SB078・SB079・SB083・SB090



SB078・SB079・SB090

SB078

SB079

SB083・SB084

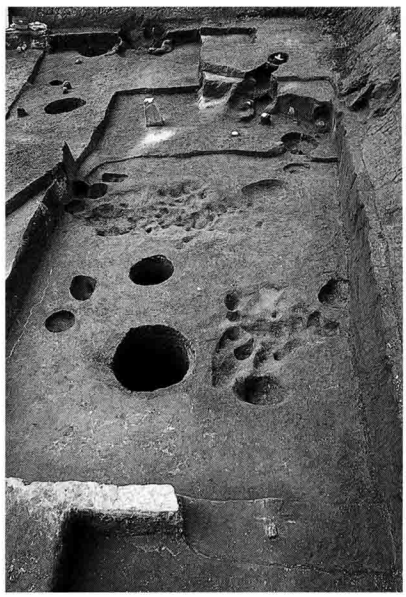
SB083

SB090

PL－3

SB075

SB077



SB112

SB106 上層

SB106 上層

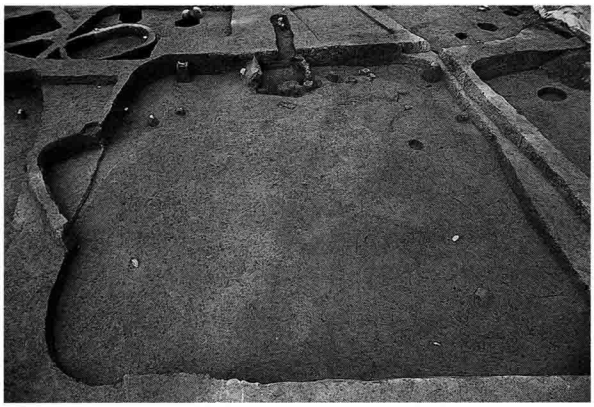
SB106

SB106 カマド

PL－4

SB125

SB125 カマド左袖



SB109

SB109 カマド

SB118

SB118 カマド

SB116

SB116 カマド

PL－5